

一関市民俗芸能調査報告書



令和2年3月
一関市教育委員会

一関市民俗芸能調査報告書



令和2年3月
一関市教育委員会

序

一関市は、古くから奥羽・北上両山系の雄大な自然がもたらす恩恵を受け、緑豊かな農村地域として発展してきました。また、北上川の流れや人々が行き交う街道によって旧盛岡・仙台両藩の経済、文化、情報が交差する地理的特性をもち、両藩の影響を受けながらも独自の文化を育んできた地域でもあります。

一関市では多様な民俗芸能が生活の中で伝えられてきました。それぞれの地区ごとの祭礼や行事で披露され、伝えられてきた芸能の中には当市でしかみることのできないもの、また近隣地域から伝わり独自に発展させた芸能もあり、この地の独自性を語るためには欠かせない文化です。

しかし、残念ながら近年の生業や生活環境の変化、また子供の人数が減る中で担い手が減少し、後継者不足の団体もあり、芸能を継承することが難しい時代を迎えています。今回、一関市教育委員会では、現時点での民俗芸能の実態を明らかにし、今後の伝承への資料とするために悉皆調査を行い、報告書にまとめました。また、調査で明らかになった廃絶している団体の古文書等を後世に伝えるため、一部を掲載することにしました。

当市の民俗芸能は、「地域の宝」として郷土愛、古里への誇りを醸成する貴重な資源です。本報告書をもとに、伝承されてきた民俗芸能の魅力が多くの人に再認識され、さらに広がることを期待するとともに、大切な財産として次世代へつないでいきたいと考えます。

本調査には、多くの有識者の方々からお力をいただきました。また、ご協力いただいた市内芸能保存団体関係者の皆様、資料や情報を提供いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

令和2年3月

一関市教育委員会

教育長 小菅 正晴

目次

序	001	鹿踊り供養碑写真	034	5. 打ちばやし	050	⑨蓬田神楽	
目次	002	鹿踊り供養碑所在地	036	①小梨打ちばやし		⑩富沢神楽	
例言	005			②根山打ちばやし		⑪永井神楽	
I 市内の民俗芸能を見るために		2. 獅子舞	038	③屋中打ちばやし		⑫白浜神楽	
調査の経緯と概要	009	①狐禅寺獅子舞		④浜横沢うちばやし		⑬奈良坂神楽鶏舞	
地方自治体における文化財としての 民俗芸能の支援に向けて	010	②西黒沢獅子舞		⑤藤沢ばやし		⑭天狗田代々神楽	
鹿踊の全体像と今後の課題	014	③達古袋獅子舞		★本宿ばやし		⑮瀬台野流市之通神楽	
一関市の田植踊	018	④善楽流獅子舞				⑯京津畑神楽	
農村の祭り・芸能と地域活性化	020	⑤東永井獅子舞		6. さまざまな民俗芸能・行事	054	⑰愛宕神楽	
		⑥永井獅子舞		①峠山伏神楽（大償野口斎部流）		⑱奥玉神楽	
II 市内の民俗芸能		⑦岩ノ下獅子舞		②前畑権現舞		⑲濁沼神楽鶏舞	
民俗芸能の所在地	024	3. 田植踊り	042	③長者さんさ踊り		⑳夏山神楽	
1. 鹿踊り	026	①小猪岡豊年田植踊		④千厩町愛宕花相撲		㉑南部神楽東山鶏舞	
①行山流舞川鹿子躍		②下内野田植え踊り		⑤老松大黒舞		㉒布佐神楽	
②小沼鹿踊		③小梨田植踊り		⑥大原馬子節		㉓黄海神楽	
③丑石鹿踊り		④入山沢田植踊り		⑦舞草鉦太鼓念仏		㉔本郷神楽	
④行山流大木鹿踊		⑤大里田植踊り		⑧鉦念仏（舞川12区）		㉕増沢神楽	
★折壁鹿踊り		⑥徳田田植え踊り		⑨鉦念仏（舞川14区）		㉖下大籠南部神楽	
コラム／折壁鹿踊保存会の歩み		★前ノ沢田植踊り		⑩鉦念仏（舞川17区）			
鹿踊り（行山流）系譜略図 一関市編	030	★上山流田植え踊り					
鹿踊り供養碑一覧	032	★そのほかの休止中の田植え踊り		7. 南部神楽	060	III 民俗芸能の環境	
		4. 伊勢神楽	047	①沢田神楽		祭礼における民俗芸能の奉納	066
		①宇都野伊勢神楽		②牧澤神楽		市内で行われる民俗芸能発表会	067
		②下猿澤伊勢神楽		③一関夫婦神楽		民俗芸能を支える道具の相談先	068
		③渋民伊勢神楽		④本寺地区神楽		京屋染物店	
		④花貫伊勢神楽		⑤達古袋神楽		尾上屋呉服店	
				⑥古内神楽		関根太鼓店	
				⑦南沢神楽		小山太鼓店	
				⑧市野々神楽		旗や伊藤染工場	

例言

IV 資料編

1. 折壁鹿踊保存会所有文書 …… 072
2. 巖美町字駒形佐々木家文書 …… 082
3. 大東町曾慶字蟹小沢足利家文書
…… 094
4. 大東町沖田字前田野村上家文書
…… 100
5. 「两部神道行山流鹿子踊莊東之事」
…… 102
6. 鉦念仏保存会（舞川12区）所有文書
…… 104
7. 大泉院文書 …… 108
8. 大東町曾慶羽黒神社熊谷家文書 124
9. 狐禅寺芸能保存会所有文書 …… 136
10. 「宣寿院様在所御下之節御遊覧每所真写」
…… 138

奥付



表紙写真：
「丑石しがく(神楽)」村上護朗氏 撮影(昭和40年代頃)

1. 本書は、一関市教育委員会が令和元年度に行った民俗芸能調査の調査報告書である。
2. 調査は、市内の民俗芸能の伝承と現在の活動のようすを把握、記録し今後の保存伝承に資することを目的として行った。
3. 調査主体は、一関市教育委員会である。
4. 調査体制は以下のとおりである(敬称略)。

教育委員会	文化財課	課長	千葉 浩
		文化財係長	坂本 光司
		主任学芸員	菅原 孝明
		文化財調査研究員	東 資子
		期限付臨時職員	菅原 友明
5. 調査期間は、平成31年4月1日から令和2年1月31日である。
6. 本書の作成は文化財課が行い、本文執筆は以下の方々をお願いした(順不同、敬称略)。編集は東が行った。

成城大学文芸学部教授	俵木 悟 (I執筆)
東北歴史博物館主任研究員	小谷竜介 (I執筆)
東北民俗の会会員	及川宏幸 (I執筆)
國學院大學研究開発推進機構共同研究員	
	佐藤一伯 (I執筆)
金津流獅子躍師匠	安部 靖 (II鹿踊り系譜図作成、供養碑一覧・所在地作成協力)
文化財調査委員	八巻 徹 (IV大泉院文書解題執筆)
7. 演目・行事・用具の名称の表記や伝承などは、それぞれの団体に伝えられているとおりとし、統一はしていない。
8. 各芸能の住所は、代表者住所とする。
9. 写真は、提供を受けたものはその出典を示した。それ以外のものは一関市教育委員会が撮影したものである。
10. 資料所有者、民俗芸能団体、市内神社各位にも協力をいただいた。記して謝意を表す。



I 市内の民俗芸能を見るために

調査の経緯と概要

一関市内では、令和元年(2019)度時点で13種類の民俗芸能が伝承されており、62の団体が活動している。さまざまな民俗芸能が各地にあり、神社の祭礼に奉納したり、行事やイベント、発表会などで披露したりしているが、合併後に広域となった一関市でそれらの状況が一覧できる資料はなかった。

合併前には、旧一関市が昭和43年(1968)に『一関市文化財調査報告書第5集・6集』、平成7年(1995)に『一関市文化財調査報告書第14集 南部神楽系譜調査報告書』、平成10年(1998)には一関市教育研究所が『郷土の文化シリーズ26 一関地方の民俗芸能』を刊行し、南部神楽を中心に芸能の紹介を行っている。旧大東町は平成2年(1990)に『大東町文化財調査報告書第13集大東町の民俗芸能』を発行し、廃絶したものも含めて29の芸能などをあげている。また、多くの旧市町村史では、民俗芸能の項目を作って地域の芸能を取り上げてきた。

平成28年(2016)、まず合併後の市域の南部神楽を調査し、『南部神楽調査報告書』を発行したので、今年度は全ての民俗芸能を取り上げることにした。調査は、全体像をつかむことを目的として、毎年活動状況を尋ねている調査票をもとにした聞き取りなどによった。また、芸能の上演の場など、芸能を取り巻く環境の情報も加えた。さらに調査するなかで、民俗芸能関係の文書が世代を経ることによって継承されなくなる危機を迎えていることも知り、特に廃絶団体の文書について一部を掲載することにした。

調査報告書作成にあたっては、各専門家の協力を得ることができた。無形民俗文化財研究の第一人者である俵木氏に全体の指導をいただき、いくつかの芸能については実見いただいた。東北歴史博物館の民俗専門の学芸員である小谷氏には特に市の田植踊りの位置づけを検討していただいた。鹿踊り研究の専門家の及川氏には市内に伝わる鹿踊りについて全体像と歴史に迫っていただくことができた。ご自身が神職でもあり、民俗芸能研究者でもある佐藤氏には祭礼と地域づくりについてご論考いただいた。

また、鹿踊り系譜研究と供養碑の調査については、金津流獅子躍師匠安部氏に全面的にご協力をいただき、さらに川崎町の大泉院文書の整理、調査を行ってこられた一関市文化財調査委員八巻氏に解説をいただくことができた。

このような多様な専門家に協力をいただき、市の各芸能を、歴史的な時間軸と全国的な視野の中で位置づけることができたことは、大きな成果であった。今後、新たな指針を得て次の世代への継承を図るきっかけとなることを期待するものである。

地方自治体における文化財としての民俗芸能の支援に向けて

— 一関市民俗芸能調査事業の成果から —

成城大学文芸学部 俵木 悟

一関市の民俗芸能と文化財としての位置付け

一関市は、平成17年(2005)、23年(2011)の市町村合併によって全国でも12番目という広域自治体となった。東北地方の背骨と言える奥羽山脈の麓から、北上盆地、北上高地を超えて三陸沿岸部の代表的な街である気仙沼、陸前高田と接するまでにわたる、きわめて多様な地理的条件を内包する。そうした地理的条件を反映して、一関市内には多くの民俗芸能が伝承され、その内容も多岐にわたる。

しかしこれまで市内の民俗芸能を文化財として把握することは十分に行われてこなかったという。最も伝承団体の多い神楽系統のものは相応に指定が進んでおり、また平成28年(2016)に『南部神楽調査報告書』が出たことでその全容の把握も進んだ。そこで今回は、南部神楽以外の民俗芸能の全体的な把握を行い、文化財としての支援も含めて今後の継承に資することを目的として調査を行った。

南部神楽以外に一関市内に見られる民俗芸能としては、鹿踊り、獅子舞、田植踊り、伊勢神楽、打ちばやし、鉦念仏が一定の分布を示し、他に馬子節、花相撲、大黒舞、七福神舞、さんさ踊りなどが確認できた。32件の伝承を確認した南部神楽に続いて、総数30件以上の民俗芸能が確認されたというのは、広域自治体とはいえ一市内に存する数としては眼を見張るものであり、この点だけとれば一関市は民俗芸能の宝庫と呼んでもおかしくない。しかし神楽以外で市の文化財に指定されているものは、鹿踊りが県指定1(舞川鹿子躍)、市指定1(折壁鹿踊り)、芸能の上演の場・機会としての祭り行事が県指定1(大原水かけ祭り)のみである。

もちろん文化財は数が多ければ良いというものではない。しかし以下に詳述するように、これからの文化財

保護、とりわけ地域と密着した民俗文化財の保護は、価値付けの体系ではなく、幅広い支援の仕組みであるべきだと筆者は考えている。そうした見地からすると、今後はこれらの多くの民俗芸能について、より積極的な文化財としての位置付けを期待したいところである。そこで本稿では、これらの民俗芸能を文化財として位置付ける意義について考えてみたい。

国の文化財と地方自治体の文化財

その手始めとして、なぜこれまでこれらの民俗芸能が文化財として位置付けられてこなかったのかということを考えてみよう。

まず、正月の悪魔払いや夏のお天王さま、盆などの年中行事に伴って演じられる獅子舞や鉦念仏などを除くと、それ以外の芸能の多くは、大原の水かけ祭りや、地域ごとの郷土芸能発表会などに余興芸として演じられるケースがほとんどで、信仰や生業などと結びついた芸能の基盤性が見出しにくいということがある。また鹿踊りのように流派の別があって系譜関係や伝承経路がある程度たどれるものは、系統的な把握とそのなかでの典型例を示しやすいが、同じく多数の伝承が見られる獅子舞や伊勢神楽のように、それぞれ地域ごとに独立して行事や祭礼に参加しているものは、どれが典型的でどれが派生的なものかというように系統立てて理解するのに馴染まないものである。さらに田植踊りや打ちばやしなどは、市内に多く伝承されているものの、そのルーツは市外にあると考えられており、一関市の民俗芸能としての独自性(地域的特色)が示しにくいというところもある。

ところで上記のように、私たちがごく当たり前に考える文化財としての「相応しさ」は、いったい何によって

いるのだろうか。端的に言えば、それは国の文化財保護法における重要無形民俗文化財としての民俗芸能の指定基準と価値認識を踏まえたものであろう。法律上、民俗文化財とは「我が国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの」(文化財保護法第2条の3)と定義されており、また重要無形民俗文化財の指定基準(平成17年3月28日文部科学省告示第43号改正)によれば、民俗芸能は「(一) 芸能の発生又は成立を示すもの、(二) 芸能の変遷の過程を示すもの、(三) 地域的特色を示すもの」という基準で選ばれることになっている。言い換えれば、(一) 発生的・基盤的、(二) 歴史的・系譜的、(三) 地域的という三つの観点において、国という全体のなかで比較を通して見出される特徴によって評価し、選別されるということである。

しかし、ある一地域に伝わる民俗芸能が他の地域の同種のものと比較され、その中から典型的・代表的なものが選ばれて「我が国民の生活の推移の理解」のための資料として保護の対象となるというのは、国の施策としてはともかく、地方自治体の文化財の選別の観点として絶対的なものなのだろうか。国と同様の基準で地方自治体の文化財を選ぶとしたら、地方自治体の文化財とは国の指定に漏れたものであり、また市町村の文化財は都道府県の指定に漏れたものであるというように、階層的な優劣によって理解されてしまう。しかし、歴史的・地理的にある特定の環境や条件のもとで、人びとの日常生活のなかで育まれてきた民俗文化財を、そのような一元的な尺度で評価するだけで良いのだろうか。むしろ地方自治体の文化財だからこそ、国の尺度とは異なり、その地域の生活のなかで文化財がどのような意味や機能をもって存在してきたのかということ、そうした意味や機能の歴史的変遷も踏まえて評価するべきではないだろうか。

一例を挙げれば、大原水かけ祭りに参加する複数の田植踊りがある。田植踊りは、本来的には年の初めに田の耕作の様子を模擬的に演じることで豊作を願う農耕予祝の行事である。ところが東北地方太平洋側の一部では、この田植踊りが農村青年などによって農閑

期に巡遊の形式で催され、洗練された踊りの様式を作り上げてきたことが知られており、青森県の八戸のえんぶり、岩手県の山屋の田植踊り、宮城県の子守舞の田植踊りなどがそうした様式の典型例として国の重要無形民俗文化財に指定されている。当地の田植踊りはもちろんそのような大きな特徴は共有しているが、本来的な農耕予祝という性格を重視するならば、これらの田植踊りはその性格がよく見いだせるとは言いがたく、また踊りの様式だけを取り出すと、他地域の田植踊りと比較して顕著な特徴を持っているとも言いがたいかもしれない。

しかしその一方で、街場の火伏せの行事と言われる大原水かけ祭りと結びつくことで祝福芸としての性格が育まれ、この大規模な行事の賑わいを演出するものとして、周辺の村から競って出される仮装の手踊りや鹿踊りなどと並んで演じられることによって独自の踊りの性格を形成してきたという点で、これらの田植踊りはユニークな特徴をもった存在である。本事業に先立つ『南部神楽調査報告書』でも、神楽の競演大会というイベントが、その歴史的経緯をたどると社寺の例祭における余興の発展形という性格をもつことが指摘されているが〔橋本 2016〕、こうして他にはないこの地域ならではの芸能の存在形態が生み出されてきたということ、地域の生活文化の変遷を示す貴重な文化財として評価してもおかしくないはずである。地域の民俗芸能を取り巻く文脈を視野に入れて、ある民俗芸能が担ってきた役割やその歴史的変遷を知ることは、市民が自分たちの地域の歴史を理解する上で欠かせないものという民俗文化財の本来の意義にもかかなうはずである。

支援の仕組みとしての文化財行政

こうしたことに加えて、市域の民俗芸能をできるだけ広く、積極的に文化財に位置付けたいと考える理由がある。それは冒頭にも述べたとおり、地方自治体、とりわけ市町村における文化財行政の役割を、価値付けに基づく「保護」を目的とするところから、幅広い「支援」の仕組みへと転換させたいと考えるからである。

日本の文化財行政は、昭和25年(1950)に制定された文化財保護法にもとづいて行われてきたが、この法律における文化財保護の基本的な方針は、選別主義、優品主義、そして重点主義であった。ただしこうした方針は、有形文化財を想定して定められたものであることは、すでに多くの研究者が指摘しているところである。そもそも国におけるこの方針は、「厳しい国家財政状況を反映して、重点保護主義をとり、指定を厳選する代わりにいったん指定したものは国家が責任を持って保護するという態勢をとった」〔西村 2004:107-108〕と指摘されるように、戦後の混乱期における文化財の散逸や荒廃を回避するという時代的な要請があった。しかし当時と現在では大きく時代状況が異なっているのは言うまでもない。全国規模で無数の文化財——民俗芸能だけでも数万件の存在が知られている——を視野に入れてなされる国の文化財行政と、地方自治体、とりわけ市町村における文化財行政の果たすべき役割はおのずと異なると思われるのが自然だろう。

希少なものと脆弱なものを対象として、衰亡や滅失から守る、あるいはその危険から救済するという「保護」の考え方は、温情主義(パターンリズム)に近いものと理解される。これは文化財そのものが意思をもたない有形の文化財の場合と異なり、人が体現することで受け継がれる無形の文化財、とりわけ民俗芸能を含む無形の民俗文化財の場合には大きな問題となる考え方である。世代を超えて伝えられていく、生きたプロセスである無形の民俗文化財の場合、その維持管理は、それを担う人びとの判断や自己決定にもとづいてなされるべきもので、行政的な施策は、そうした自律的な活動の「支援」という形をとるのが本来的なあり方であろう。国がそのうちの一部のものを、専門的な見地から保存措置をとることの是非は別に考えとしても、文化財の裾野を担う地方自治体が無形の文化財に対してなすべきことは、担い手の活動のエンカレッジメントであり、そうした活動への側面的なサポートであると筆者は考えている。

ただし、担い手の自己決定を尊重することが、結果

としてその責任を当事者のみに背負わせるようなものであってはならない。担い手の意思を尊重しながらも、立場が違う者がそれぞれできることによって支え合うということに、公共的な施策としての文化財行政の意義がある。そしてその仕組みが公共的なものであるとしたら、そうした支援を受ける可能性は、専門的あるいは学術的な価値とは別に、広く開かれていなければならない。これが可能な限り多くの民俗芸能を文化財に位置付けたいと考える理由である。

こう述べると、どんなものでも文化財にすれば良いのかとか、その必要を感じていないものまで文化財にする意味があるのかという疑問も持たれよう。だが支援の必要は当事者にとっても予見できないのであり、その一方で行政的な支援を実現するためには何らかの根拠を必要とする。これは私たちの多くが東日本大震災の経験から学んだ教訓である。宮城県で県職員として被災した民俗文化財の保護に奔走した小谷竜介は、その経験を踏まえて次のように述べている。

東日本大震災の被災地では歴史的、文化的に意味をもった多様なものが被災した。その現場では「これは文化財、これは文化財ではない」という区別は意味をなさない。文化財レスキュー事業では「被災文化財等」ということで、文化財かどうかはひとまず検討せず、所有者が要請する動産の「もの」を救済した。これは祭礼行事等無形の文化財の支援においても同様で、地域の人たちが継続したいという意志をもっているものにたいして支援がおこなわれている。

一方で、行政的に明確にかかわれるのは、法や条例で規定されている「文化財」までとなり、線引きをせざるをえないところがある。〔小谷 2012:116〕

こうした状況に対して小谷は、文化財より幅広い対象を包含するものとして「文化遺産」という枠組みを提唱する。特に「文化遺産」が文化財と異なる点として、その価値付けが地域の担い手によるものであり、専門

的な観点からの文化財の価値付けと並立して支援の判断材料となる点を挙げている。

実際に、近年は小谷が言うような意味での「文化遺産」に近い枠組みが、政府が認定する「日本遺産」から、遠野遺産、京都遺産、奄美遺産など自治体を主体とする「地域遺産」、さらにより草の根的な「世間遺産」まで、さまざまな形で生み出されている〔山川 2016〕。法的に文化財として保護の対象になり得ないようなものや、「まだ文化財に位置付けられていない」潜在的な文化財など、多様なものに支援の可能性を開くという意味で有意義な動向であるのは間違いない。小谷の「地域の人たちが継続したいという意志をもっているものにたいして支援」という主張は筆者も同じである。ただし、そうした支援の実質的な効果を考えた場合、これらの新しい「文化遺産」制度の有効性はまだ十分には測れない。少なくとも本稿で話題にしている民俗芸能の場合、すでに長く文化財として位置付けられてきた経緯があり、その支援のためのノウハウも少なからず蓄積されているのであるから、その枠組みのなかで門戸を広げることが、新たな支援の枠組みを構築するよりも現実的で実効的であるのではないか。

そのように門戸を広げる方策として、例えば文化財保護法の規定によって「保存と活用」の対象となる指定以外にも、柔軟な文化財としての位置付けがあっても良いだろう。例を挙げると、京都府と京都市では多くの民俗行事を府・市の無形民俗文化財として「登録」している。登録制度は国においては、文化財として指定の対象になりにくかった近代の建造物から始まり、多くの有形文化財にも拡大されてきた制度であり、比較的緩やかな保護措置をとるために原簿に登録する、文字通り「リストアップ」の意味合いの強い制度である。京都ではこれを「保存」の措置に馴染まない無形の民俗文化財などに対する独自の枠組みとして活用している。この方法の意義について、かつて京都市の文化財担当職員は筆者に対して、登録されていることで市はその状況を把握する責任を負うとともに、必要な場合にすぐに支援に動けること、さらに言えば文化財の担

い手側も市に対して気軽に支援の相談ができるようになることなどを効果として挙げていた。これは他市町村でも参考になる仕組みではないだろうか。

大事なことは、過疎化や少子高齢化、あるいは生活様式の変化などによってこれまでと同じように維持することが困難になる民俗芸能が、その悩みや苦勞を自分たちだけで困り込まず、問題を共有して助けを得られる支え合いの仕組みを構築することである。地方自治体における無形の民俗文化財の保護制度を、そうした支援の仕組みとして利用可能なものにするためにも、できるだけ多くの民俗芸能の現状を把握し、文化財に位置付けていこう提案したい。この調査成果が、その礎を築くものとなることを願っている。

◆参考文献

- 小谷竜介 2012 「被災地の文化遺産を保護するための試み」 日高真吾 編 『記憶をつなぐ：津波災害と文化遺産』 財団法人千里文化財団
- 西村幸夫 2004 『都市保全計画』 東京大学出版会
- 橋本裕之 2016 「地域社会に埋め込まれた南部神楽」 一関市教育委員会 編 『南部神楽調査報告書』(岩手県一関市文化財調査報告書第5集) 一関市教育委員会
- 山川志典 2016 「「世間遺産」と「地域遺産」：なんでもないようなものを遺産にする動きに着目して」 『世間話研究』24

鹿踊の全体像と今後の課題

東北民俗の会会員 及川 宏幸

鹿踊の全体像

獅子舞とシシ踊り¹。ともにシシ頭をかぶって踊る芸能ですが、a獅子舞は二人立ち獅子舞といい、中国大陸から奈良時代頃に伎楽・舞楽とともに伝来した芸能で、正月の門打ちや神事祭礼・神楽で踊られ、日本全国各地に分布する民俗芸能(伎楽・神楽・祭礼系)です。他方bシシ踊り(鹿踊、三匹獅子舞)は一人立ち獅子舞といい、中世末から近世以降日本で発生し、基本的には東日本(神奈川・長野県・新潟から以東)にしか分布していない民俗芸能(風流系)で、盆や春彼岸等に見られます。名称と形態が多少似てはいますが、芸能史的には発生・起源が全く異なる民俗芸能です²。ここで対象とするシシ踊りは、bの一人立ち獅子舞・風流系シシ踊りとなります。ところでbのシシ踊りが東日本に偏在(東国から大名転封に伴う芸能移動をした若狭小浜及び愛媛宇和島の例外は除く)していると述べましたが³、その理由は現在でも不明です。bのシシ踊りが皆無な西日本では頭がない太鼓踊が分布しますが⁴、太鼓等を抱え頭を付ける東日本に分布するbのシシ踊りと対比すると、頭を付すか否かで対照的であり、日本を文化的に東西に二分しているかのような状況が見えます。

次に東日本に偏在するシシ踊りの分布についてくわしく見ていくことにしましょう。関東域から東北北部まで三匹獅子舞(獅子舞と称されますがaの獅子舞ではなくbのシシ踊りに属し、三人一組で踊る芸能)と称するシシ踊りが東日本のほぼ全域に分布し⁵、関東地方ではシシ踊りといえば三匹獅子舞のみで、シシ踊り=三匹獅子舞というイメージが固定的でした。しかし近年の研究から、三匹獅子舞とは異なる別種の、多頭シシ踊り(5頭から12頭のシシが一組となり踊る)というシ

シ踊り群の存在がクローズアップされてきました。しかもこの多頭シシ踊り群の分布(図1)は、日本でも東北地方のみ、特に東北地方でも東北地方中部域(岩手県、宮城県、福島県相馬地方、米沢市・置賜地方を除く山形県)にしか限定的に見られないもので⁶、装束等も三匹獅子舞と比べ大きな相違が見られます。中世に近畿地方で流行した太鼓踊が、西日本に伝わって花笠等をかぶり、東日本では頭を付すようになった結果とも想定されていますが⁷、異論はありますが多頭シシ踊り(鹿踊)は、東北地方発祥の芸能とも想定されています⁸。他方東北地方の中でも、三匹獅子舞が濃密に分布している会津や秋田県域は、関東から移封した大名が治めた藩域やその周辺域と重なることから、異論はありますが関東から移設された芸能であるとの説が有力視されています⁹。

上記の、東北地方中部域だけに分布する多頭シシ踊り群、つまり鹿踊については、近年の研究から、図1のように現在以下の五つの群に分類されています。①12頭(主に旧盛岡藩中南部域:従来の幕踊りと称されている鹿踊系)、②8頭(主に旧仙台藩中北部域:従来の太鼓踊りと称されている鹿踊系)、③6から12頭(仙台市周辺域、旧仙台藩中南部域)、④5から7頭(山形県中部域)、⑤5頭中心(山形県沿岸部域)の五つです¹⁰。このうち一関市域全域は②の8頭群に全て含まれます。8頭群は江戸期には、伝書や伝承を紐解くと9頭で踊られていた形跡が見られますが、なぜ現在の8頭に収斂していったのかは不明です¹¹。この8頭群はさらに行山流・金津流・春日流の三つの大きな系統に分類されます¹²。

全て背中に1m前後~4m前後に及ぶ特徴的な二本の長大なササラを持つ装束を備え、8人で踊る俗に



図1 東北地方シシ踊り分布図
(菊地和博『シシ踊り』p356より一部編集)

「ハツ鹿踊」¹³とも称される一群です。シシ踊りにおいてこのように長大なササラを持つシシは日本国中探しても皆無で、他にない特徴を持つ系統と言えます。発祥元は仙台藩領内です。この系統の歴史的な展開を紐解くと、仙台藩領内中部沿岸域で行山流が発生し、以後仙台藩域を北上する形で各地に伝播していきました。歴史的には行山流が発生してほぼ100年後に金津流が、さらに春日流が派生し、その春日流が藩境消滅前後、旧盛岡藩域に展開していったものと想定されています¹⁴。平成13年(2001)現在岩手・宮城県で行山流は51団体、金津流が7団体、春日流が9団体现存しています¹⁵。ちなみに一関市内には行山流しか存在していません。そこで以下に一関市域に関係する行山流につ

いて、くわしく見ていくことにしましょう。行山流は現在の宮城県南三陸町戸倉水戸辺住の、登米伊達家御抱え伊藤伴内持遠という人が発祥元で¹⁶、その弟子筋からこの流派が各地に広まっていきました。時期は江戸期の貞享期(1684~1687)以降と想定されます¹⁷。以後この行山流はA久田系、B気仙系、C舞川系、D大原山口系、E富士麓行山系、F栗原五鹿系、G不明系の七つ¹⁸に伝播・分岐を経て、仙台藩領内中部北部域に広がりました。ちなみに久田系のみ伊藤伴内持遠の系統とは異なる系統です。

一関地方の鹿踊概要

一関市内に見られる鹿踊は現在上記7系統のうち、C舞川系(発祥地は舞川の相川地区)とD大原山口系(発祥地は大東町の大原山口地区)の2系統のみです。舞川系元祖の吉田猪太郎、大原山口系元祖の又助は、ともに伊藤伴内持遠の弟子筋から行山流を伝授しています¹⁹。その後、舞川系と大原山口系の両鹿踊は、江戸期中後期を通して胆沢・江刺・磐井・気仙・本吉諸郡に至る、現在の岩手県南宮城県北域(旧仙台藩領内の北域)の広大な地域に伝播していくこととなり、行山流鹿踊の中で主要な2系統を形作るまでになっていきました。特に大原山口系は、江戸中期から後期にかけて積極的な活動が見られ、以後大原山口系継承団体の爆発的な増大につながることとなります²⁰。現在岩手県内外に舞川系は現存5団体ほど、大原山口系は現存20団体ほど見られます²¹。これら舞川・大原山口系が属する8頭系鹿踊の特徴としては、背中に付けた長大なササラが挙げられます。この長いササラの発生時期及び経緯は不明ですが、前田鹿踊(大船渡市)の記録を見ると元来五行幣の腰差しだったものが、享保5年(1720)前後石巻の五郎兵衛や水戸辺の市之助の指南で、装束を後ろに九曜を背負い柳の指物等に改めたとの伝承が残っています²²。また鹿牝村(現宮城県東松島市)の鹿踊の絵²³及び平泉長部鹿踊伝書の鹿姿絵「鹿罵皆白敷暇日」(明和3年(1766))²⁴から想定して、1700年代はじめ頃の江戸中期には既にササラが発

生していたように思われます。このササラの原初形態は神の神籬ひもろぎとしての役割を持つ五行幣の腰指とも思われますが²⁵、この五行幣をいつ、だれが、どのような経緯で現在の長大なササラに展開・発展させていったのかは謎です。舞川系・大原山口系を含む行山流の伝播・発展・変化の今後のさらなる解明が、ササラ経緯を含む多頭シシ踊り群発生・展開の謎解明の糸口として、今後期待されるところです。

廃絶団体から見えてくるもの

以前私が、鹿踊の系譜をたどろうと作業した際にぶち当たった壁は、現存している団体だけで系譜を構成しようとする、途中で系譜が寸断されてその先に進めず、全く前後の関係がたどれなくなってしまったことでした。鹿踊は行山流だけを見ても現存47団体、廃絶74団体と言われるように²⁶廃絶団体の方が圧倒的に多いです。そのため廃絶団体を考慮に入れないと、系譜の全体像をつかむことは不可能な事態となります。他方現存する各団体を見ても、休止・再興・廃絶を繰り返して現在に至っている現状が見られます。廃絶団体が再興を目指そうとする際には、系譜をたどって最も近い関係の団体から再度伝承を受ける必要が出てくるとも思われるため、各団体がどの鹿踊団体と密接な関係があるか、またはあったかを把握することは、再興の際および芸態検証の際にはとても重要なこととされます。その観点から一関市域内における数ある廃絶団体の中より、注目したい事例として以下に四つの廃絶団体事例を紹介してみたいと思います。①一つは巖美地区に存在した鹿踊群、②もう一つは前田野鹿踊(仮称:大東町沖田)、③三つめは渋民鹿踊(仮称:大東町渋民)、そして④四つめに山雀流です。まず①に関しては、現在一関市内にはEの富士麓行山系の鹿踊りは一つもなく、逆に隣接する奥州市域に密集して見られます。しかし江戸期に、現宮城県域から現在の奥州市域へ富士麓行山系鹿踊が伝播されたその足跡を探てみると、富士麓行山系鹿踊5系統の内の1系統(山谷・小山堀切系統の十文字鹿踊や長袋鹿子躍)に、なんと

巖美の山谷鹿踊が中継する形で奥州市域に伝えた可能性が出てきました²⁷。しかし山谷鹿踊は廃絶したため未だ詳細は謎のままです。②に関しては、奥州市江刺地区の地ノ神鹿踊や餅田鹿踊、内ノ目鹿踊等の伝書を見ると、前田野から伝承されたとの記述が出てきます。この前田野の存在は長く不明であったのですが、この前田野とは、大東町沖田の前田野鹿踊(仮称:廃絶)であることが近年わかってきました²⁸。どうやら前田野は行山流山口派鹿踊を北方に伝播伝承する上で非常に重要な役割を持っていた組であることがわかります。また前田野組は又助の子の、山口喜左衛門から免許を伝授するかなり前から、庭元・中立として独自の活動をしていた形跡もうかがえます²⁹。前田野に関しても、活動の全体像はいまだ謎です。③三つめに、いろいろ調べてみますと1700年代後半から1800年代にかけて、大原山口系の鹿踊は急速な勢いで各地(江刺郡域、東磐井郡域、気仙郡域)に伝播していきました³⁰。その後文化14年(1817)山口屋敷(大原山口鹿踊始祖である又助子孫)の没落以降、大原山口の鹿踊が渋民鹿踊に引き継がれます³¹。没落当時の大原山口鹿踊の弟子筋には下折壁の菊松(室根町)、曾慶の善十郎、渋民の幸五郎、前田野の常五郎(全て大東町)、大木の善太郎(東山町)らの名が見えるため、渋民鹿踊(廃絶)の文献および上記各所の伝書を詳細に検証することで、江戸期における大原山口系の旺盛な活動の全体像が、今後解明されてくるものと期待されます。④四つめに山雀流です。この流派の祖は入谷の四郎兵衛とされ、登米郡水戸村、上沼村、本吉郡横山町に伝わり、さらに舞草に伝わって以降は「山雀流」と改め、東山にも伝わりましたが³²、現在山雀流の団体は廃絶してしまい、系統も含め実態が不明で謎の鹿踊です。以上一関地方の鹿踊だけ見てもまだまだ不明な点が山積し、今後疑問の解明が待たれるところと見られます。

舞川鹿子躍の果たした役割・功績

岩手県一関市の舞川鹿子躍組には、伊藤伴内持遠「行山鹿子躍之由来」(元禄13年(1700))をはじめ

「勘太郎之巻」、「行山系図之事」等の貴重な文書が伝わっています。「行山鹿子躍之由来」によって装束意味の他、行山流の発生・展開時期がおおよそ想定可能となりますし、「勘太郎之巻」によって藩主から九曜の御紋の使用が許された経緯が解り、「行山系図之事」から伊藤伴内持遠以降の弟子筋および行山流の伝播先の概要を知ることができました。つまりこれらの文書は現在、行山流の発祥・展開を探る上で非常に重要な手がかりとなっています。これらの文書を保持し後世に伝えた舞川組の役割・功績は非常に大きいものがあります。さらにこの舞川鹿子躍組は、行山流各組の再興の際にも手を貸すといった、非常に重要な役割も担いました。たとえば長らく途絶えていた、行山流鹿踊の総本家にあたる水戸辺鹿子躍(宮城県南三陸町)の再興を担い、行山流では系統的に重要な位置にある佐沼鹿踊(宮城県登米市)の再興にも間接的に寄与しています。舞川鹿子躍組の行山流における功績は大きいといえるでしょう。

今後の課題

廃絶した団体が再興する場合には、違った系統の団体から継承してしまうことで、元々の芸態から大きく変わってしまう例もかつては見られました³³。今後廃絶団体の再興の際には、より系統の近い団体からの継承が理想的と考えられます。その準備として、各団体および文化財行政側による、鹿踊系統の理解と把握が今後必要とされるかもしれません。さらに近年家の建て替え、代替わり、過疎化、災害の発生等による鹿踊資料消失の危機が迫っているようにも思われます。一例として大原山口屋敷の資料を受け継いだ加藤家が近年空き家になり、大原山口流始祖の又助が藩主から賜った、竹に雀紋入り椀³⁴の行方が不明であるように聞いています。その他大東町内個人宅に散在する大原山口系関係(渋民鹿踊や前田野等)鹿踊文書群や道具類、山谷や山雀流に関する文書類等散逸のおそれが近年顕在化してきているといえます。舞川鹿子躍が文書を一関市博物館に寄託(所有権は団体・個人に

あるままで、長期保管を館に願う措置)などし資料の安全を保持している例から、各団体および所蔵者による同等な、文書資料や文化財の永久保存、及び写真での文書の記録化等に向けた動きが、今後必要とされているように思われてなりません。

◆参考文献

- 1 菊地和博2012『シシ踊り』岩田書院p13
- 2 本田安次1996『本田安次著作集 日本の伝統芸能 第十巻風流I』錦正社p173,186、笹原亮二2001「三匹獅子舞の分布」『国立民族学博物館研究報告26巻2号』国立民族学博物館p171,173、千葉雄市2001「宮城県の民俗芸能(2)」『東北歴史博物館研究紀要2』p65、菊地和博2012『シシ踊り』岩田書院p13,14
- 3 本田1996前掲p185,186、笹原2001前掲p215、千葉2001前掲p79,80
- 4 本田1996前掲p189、笹原2001前掲p174,222
- 5 本田1996前掲p186、笹原2001前掲
- 6 本田1996前掲p186、菊地2012前掲p356
- 7 本田1996前掲p190、笹原2001前掲p174
- 8 菊地2012前掲p339~344,353、菊地和博2017『東北の民俗芸能と祭礼行事』清文堂p276~9
- 9 本田1996前掲p188、笹原2001前掲p221、千葉2001前掲p67、菊地2017前掲p276~9
- 10 菊地2012前掲p356,328
- 11 菊地2012前掲p342、及川宏幸2018「岩手県気仙地方の鹿踊」『東北民俗52』東北民俗の会p72~76
- 12 千葉2001前掲p81~82
- 13 千葉2001前掲p80
- 14 森口多里1971『岩手県民俗芸能誌』錦正社p998,1000,1010、北上・みちのく芸能まつり実行委員会1999『炎の伝承』p94,98,99、千葉2001前掲p81,85、及川宏幸2015~2017「金津流鹿踊の系譜(一)~(三)」『東北民俗49~51』東北民俗の会
- 15 千葉2001前掲p82
- 16 千葉2001前掲p84、及川宏幸2012「行山流鹿踊」『東北歴史博物館研究紀要13』p53,54
- 17 及川2018前掲p71、及川2012前掲p53,55,59
- 18 千葉2001前掲p84、及川2012前掲p53
- 19 及川2012前掲p57,59
- 20 及川2012前掲、及川2018前掲p72
- 21 及川2012前掲
- 22 大船渡市1980『大船渡市史 第四巻』p689、及川2012前掲p56
- 23 今野印刷2001『仙台領の地誌(復刻版)』p18(大場雄淵「奥州名所図会 巻之五」宝暦8年(1758)~文政12年(1829))
- 24 及川2012前掲p52,74
- 25 千葉2001前掲p66,67、及川2012前掲p50,52
- 26 及川2012前掲p50
- 27 高橋守夫1987「「ハツ鹿踊り」の発祥地を探して(つづき)」『栗原郷土研究 第十九号』栗原郡郷土史研究会p124,125、及川2012前掲p65,67
- 28 金野富雄1976「行山流山口派鹿踊りについて」『東磐史学創刊号』東磐史学会p63,64、及川2012前掲p60~62
- 29 及川2012前掲p60~62
- 30 及川2012前掲p59~65、及川2018前掲p72
- 31 金野1976前掲p57、及川2012前掲p59
- 32 一関教育委員会1985『一関市文化財調査報告書特集号』p53、高橋1987前掲p124、東山町1978『東山町史』p963、及川2012前掲p64
- 33 千葉2001前掲p76
- 34 仙台市1998『仙台市史 特別編6民俗』p516,517

一関市の田植踊

東北歴史博物館 小谷 竜介

1 田植踊の概要

田植踊は、小正月に行われるその年の稲作の豊作を願う予祝の芸能である。その名からも分かるように、田植えを中心とした一連の稲作の作業を模した踊りである。稲作の予祝行事としては、「田遊び」という模擬稲作行事が全国的に行われているが、これを踊りで表現する田植踊は、東北地方のみに伝承される芸能化した「田遊び」である。

岩手県およびその周辺の田植踊をみると、大きくは3種に分類される。第1が八戸地方のえんぶりである。第2が盛岡市周辺の座敷田植である。第3が岩手県の南部から宮城県に伝わる庭田植である。一関市の田植はすべてこの庭田植となる。庭田植は田植踊の一行が家いえの庭や土間を舞台に踊る田植踊である。また、この田植踊は踊り手に弥十郎役がいる点に共通する部分がある。

『岩手県の民俗芸能』（2007）では、この田植踊を(1)和賀型、(2)胆沢型、(3)気仙・東磐井型、(4)その他に分類している。このうち、和賀型と胆沢型には弥十郎の上役的な位置づけのエンブリスリヤ太夫といった役があるところが、気仙・東磐井型との大きな違いとなる。本稿ではこの田植踊を太夫弥十郎系田植と称したい。これに対して、気仙・東磐井型は弥十郎と田植を担う早乙女または奴による構成の踊りとなっている。『「秋保の田植踊」の歴史と現在』（2014）では仙台藩領の田植踊を弥十郎奴系田植と弥十郎早乙女系田植として分類しているの、それに倣い表記することにする。

一関市域の田植踊は、沿岸から伝わったという伝承を持つ弥十郎奴田植の系統と、岩手県内陸部とのつながりが認められる太夫弥十郎系田植の系統が伝わ

る。以下、この二つの田植踊を紹介しよう。

2 弥十郎奴田植

一関市で現在伝承されている田植踊の多くは弥十郎奴田植となる。田植を指揮する役である弥十郎が口上を述べたあと、鞆鼓を持った男性役の奴（大里ではカッコ）が踊る。太鼓を奴が担うことから囃子は笛のみということがおおい。弥十郎奴系田植では、早乙女役をおいたり、鞆鼓が奴と別に躍人がおかれたりするところもあるが、一関市域の田植踊は鞆鼓役を奴が担っている。また、一関市の弥十郎奴系田植は本吉郡、気仙郡から習得したとの伝承を有しているが、気仙沼市の廿一田植踊にある早乙女役などもない。また、陸前高田市の雪沢田植踊では鞆鼓を持つ奴や躍人がない。このように近在の同系統の田植踊とも構成が異なる田植踊となっている。

演目は、田植えを担う早乙女による稲作作業の踊りを模してるとされる田植踊と、曲の合間などにおこなわれる余興の手踊りなどで構成される。弥十郎奴田植で最も演目の多い大里田植踊りでは田植踊23曲を伝えている。

大里田植踊りの演目

一 入葉、二 年の始、三 お正月、四 朝はか、五 朝霧、六 向山、七 入違向山、八 昼へ持ち、九 何処より、十 鎌倉、十一 義経、十二 黒皮、十三 此の宿、十四 七つ下り、十五 長十七、十六 廻り十七、十七 巻きおろし十七、十八 君様、十九 細道、二十 御暇、二十一 行きそろ、二十二 渡拍子、歌切り

演目をみると、家に入る入葉からはじまり、正月の様子を描く「年の始」、「お正月」と続く。その後、「朝霧」から「おいとま」までの演目はストーリーを持つものではない。他の弥十郎奴系田植踊でも、演目名は共通するが曲順は最後となる「御暇」をのぞき決まりがない。

つぎに余興であるが、大里田植踊りが9曲、入山沢田植踊りが12曲と比較的多数の演目を伝えている。その曲名をみると「伊勢踊」や「春駒」など共通する演目もあるが、田植踊組ごとに演目の増減が多い。

大里田植踊りの余興

おいとこ節、家業おいとこ節、夕暮、八本、伊勢おどり、春駒、近江八景、軒ばやし、大黒舞

入山沢田植踊りの余興

夕暮、一の谷、近江八景、春駒、ヤモト、伊勢踊り、餅おいとこ、家業おいとこ、春雨、おさべおいとこ、やんじろう、踊り十郎

余興は、市内に限らず全ての田植踊組で有しており、田植踊の演目の合間に行われる。田植踊に欠かせないとははいえないが、時間の限られる招へい公演などでは行われないことが多くっており、伝承が途絶える例も見受けられる。充実が期待される部分でもある。

3 太夫弥十郎系田植

太夫弥十郎系田植は、北上市や胆沢郡などで伝承される田植踊との関係性が強い田植踊である。一関市では巖美町の小猪岡田植踊が唯一現代も伝承している。

踊りは烏帽子をかぶった太夫が進行役となり、奴と早乙女が踊り手となる。踊り手は擦りささらや扇子など、曲ごとに持ち物を変えて踊る。囃子は笛、太鼓、歌からなる。

演目では、朝はかの奴、義経の奴、仙台田植、義経の手太鼓、朝はかの手太鼓、式丁ぎ、今日の田植など、余興も含めるとかつては30曲余りを伝えていた。弥次郎奴系田植の演目と比べても大きく異なっていることがわかる。このなかでは、仙台田植という曲名が目ま

れる。その歌詞を見ると

- お正や月は 御日出度ぞや
お祝い申しぞや若様
- 御年男 太郎治や殿は 向の松をや迎える
- 千本小松 そのよや中で
黄金の松をや迎える

とある。3首の曲と短いものである。他の田植踊の歌詞と比較すると、直接的につながるものはないが、弥次郎奴系田植の「年の始」「お正月」「朝はか」の3曲と単語などでは繋がりをみることができる。逆に言えば、こうした3曲を一つの演目に仕立てたものともみることができるかもしれない。

また、演目には「義経の手太鼓」のように手太鼓とついたものがある。この曲では、早乙女が下がり、太夫と鞆鼓を持った奴のみで踊る。奴の太鼓があるため、囃子の太鼓は囃さない。弥十郎が太夫に変わることを除くと、弥十郎奴田植の踊り囃子に共通するものとなる。弥十郎奴系田植踊はもともと、こうした太夫弥十郎系田植踊の演目から生まれた可能性がうかがえる。唯一伝承している小猪岡田植踊は、田植踊を考える上では貴重な田植踊組といえる。

4 一関市の田植踊の特徴

18世紀後半に成立した『仙台始原』には、仙台の田植踊について胆沢郡より伝わったものと記されている。これをうけて、『「秋保の田植踊」の歴史と現在』では、弥十郎奴系と弥十郎早乙女系の先後について、弥十郎奴系田植がより古い形態であるとしている。しかし、一関市の太夫弥十郎系田植踊をみると、弥十郎奴田植と弥十郎早乙女田植の両面の特徴を有しているという特徴がある。こうした点から田植踊の展開を考えると、弥十郎奴系田植と弥十郎早乙女田植は、太夫弥十郎田植から分かれて生まれたということがいえるのかもしれない。少なくとも、一関市の田植踊は田植踊の展開を考える上でも重要な場所であるといえる。大切に伝承していただきたいと考える。

農村の祭り・芸能と地域活性化

— 一関市花泉町老松地区を事例に —

國學院大學研究開発推進機構共同研究員 佐藤 一伯 かずのり

祭りのなりたち

弥生時代から高度経済成長期に入るまでの日本では、自然の恵みのもと互いに協力して農業を営み、和を尊ぶ価値観を育んできた。盆と正月に先祖の霊を家に迎え、氏神は稲作が始まる春には山から里において氏子の祭りを受けて神社に留まり、秋の収穫が終わるまで彼らを守護し、秋には新穀を子孫と共食するなど、神、先祖、人が自然のリズムにのっとり年を送ってきた(宮家準『民俗宗教と日本社会』)。

農業の守り神である田の神は、農神・作神とも呼ばれ、農作業の進行に伴って去来する。岩手県内では、旧暦3月16日に山から山の神が下りてきて田の神または農神となり、旧暦9月16日に山に帰って、再び山の神にもどるといふ伝承が一般的とされ、奥州市胆沢若柳では春秋の社日しゃにち(春分の日と秋分の日に近い戊の日)が神迎えと神送りの日だといふ、また一関市大東町中川では田の神が歳神としがみにもなるという。恵比須・大黒・稲荷いなり・地神じのかみ・水神すいじんなどと習合していることも多い。田の神の祭りは、農耕儀礼として農作業の折り目ごとに行われる。正月の予祝行事に始まり、3月の神迎え、苗代みなくちでの水口祭り、初田植え、田植え後のさなぶり、災害を封じる虫祭り・風祭り、収穫後のお刈り上げ、9月ないし10月の神送りへと続く(岩手県立博物館『岩手民間信仰事典』)。

田の神や山の神、歳神などは、いずれも家や家業を守護する神で、その祭りは共同生活をする一団が一致して営み、はじめは家々の祭りであったが、村人がともに農耕に勤しむようになると、村の氏神の祭りが尊ばれるようになった(高原美忠『家のまつり』)。宮中や全国の神社で奉仕される祈年祭(2月)と新嘗祭(11月)は、いずれも五穀豊穡のを中心として皇室・国家・

地域の隆昌を祈る重要な祭祀である。祈年祭は春の農事を始めるに先立ち、その年の豊作を神に祈り、新嘗祭は秋に、その年の新穀を神に捧げご加護を感謝する。神社の例祭も古くは春秋等に二度行われた例が多い(神祇院『神社本義』)。

柳田國男は『祭日考』で、9月は農民が最も祭りを営みやすく、また最も祭りたがる月であったと指摘し、また3月・9月という組合せの春秋祭は、時代が新しくなるとつれて地方によってかなり多くなるが、「春秋二つの祭日の組合せというものが、意外になお古い考え方を残している」という。一関市内の神社で行われる祭礼も、春秋に営まれる例が少なくないように思われる(岩手県神社庁『郷土暦』)。

伝統文化と地域づくり

近年、持続可能な福祉社会や定住型社会、田園回帰の動きを促進するために、伝統文化の価値を再発見することが重要との指摘がなされている(広井良典他『田園回帰がひらく未来』)。祭りや民俗芸能は、過疎化や少子化によって継承が困難となりつつあるものの、地域活性化のための方法として、また観光資源として注目され期待されている。地域の歴史や伝統文化を尊重する人材育成も課題としてあげられており、その上において、祭礼・芸能の振興策を充実させることの意義は大きいと思われる。

市内花泉町老松地区のおいまつ・さざほざプロジェクトは、平成24年(2012)度より6か年にわたり、一関市農村地域活性化モデル支援事業に取り組み、筆者も事務局の一員として参加した。老松地区は花泉地域の中心部の面積約15平方キロメートルに約400世帯、約1,400名が居住する農村で、江戸時代には義民千葉惣

一関市内の主な神社祭典日(岩手県神社庁『平成31年郷土暦』より)

祭日	鎮座地	神社名	祭典名
新暦1月4日	大東町鳥海	興田神社	蘇民祭
新暦1月15日	花泉町花泉	八雲神社	星祭
新暦1月16日	大東町大原	勝善神社	例祭
新暦1月17日	室根町折壁	南流神社	例祭
旧暦1月24日	花泉町花泉	八幡神社	秋葉祭
旧暦2月15日	花泉町花泉	八雲神社	永代講社祭
新暦3月9日	中里	熊野神社	春祭
新暦3月25日	藤沢町保呂羽	保呂羽神社	春祭
旧暦3月10日	花泉町老松	御嶽山御嶽神明社	例祭
旧暦3月12日	千厩町小梨	小牛田山神社	春祭
旧暦3月15日	萩荘	八幡神社	春祭
旧暦3月15日	花泉町油島	美渡神社	例祭
旧暦3月15日	千厩町奥玉	八幡神社	例祭
旧暦3月16日	大東町大原	金鳥神社	例祭
旧暦3月18日	弥栄	日吉神社	例祭
旧暦3月27日	川崎町薄衣	浪分神社	春祭
旧暦3月28日	東山町長坂	火産霊神社	春祭
新暦4月8日	藤沢町黄海	葉山神社	春祭
新暦4月17日	舞川	儂草神社	例祭
新暦4月18日	釣山	田村神社	例祭
新暦4月20日	萩荘	駒形根神社	祈年祭
新暦4月24日	室根町矢越	射勢山愛宕神社	春祭
新暦4月25日	舞川	菅原神社	例祭
新暦4月25日	萩荘	吾勝神社	春祭
新暦4月28日	萩荘	三島神社	春祭
新暦4月28日	千厩町小梨	白幡神社	春祭
新暦4月29日	花泉町日形	月館神社	春祭
新暦4月30日	大東町沖田	天狗田神社	春季例大祭
旧暦4月8日	東山町松川	早間神社	春祭
旧暦4月8日	室根町矢越	羽山神社	例祭
新暦5月1日	山目	配志和神社	例祭
新暦5月1日	大東町鳥海	興田神社	例祭
新暦5月3日	千厩町清田	金田神社	例祭
新暦6月12日	中里	熊野神社	八雲祭
旧暦6月13日	川崎町薄衣	浪分神社	天王祭
旧暦6月15日	花泉町花泉	八雲神社	例祭
旧暦6月15日	大東町大原	弥栄神社	例祭
旧暦6月15日	千厩町奥玉	八坂神社	例祭
旧暦6月15日	藤沢町西口	八阪神社	例祭
新暦7月15日	藤沢町砂子田	弥栄神社	例祭
新暦8月17日	舞川	儂草神社	秋祭
旧暦8月1日	大東町曾慶	羽黒神社	例祭
旧暦8月8日	藤沢町黄海	葉山神社	例祭
旧暦8月13日	室根町折壁	室根神社	例祭(御刈祓祭)
旧暦8月15日	萩荘	八幡神社	秋祭
旧暦8月15日	花泉町涌津	八幡神社	例祭
新暦9月9日	滝沢	瀧神社	例祭
新暦9月13日	大東町洪民	八幡神社	例祭

祭日	鎮座地	神社名	祭典名
新暦9月15日	釣山	八幡神社	例祭
新暦9月15日	花泉町金沢	八幡神社	例祭
新暦9月15日	花泉町花泉	八幡神社	例祭
新暦9月15日	花泉町花泉	神明社	例祭
新暦9月15日	大東町摺沢	八幡神社	例祭
新暦9月15日	大東町大原	八幡神社	例祭
新暦9月15日	室根町矢越	弥栄神社	例祭
新暦9月16日	室根町矢越	射勢山愛宕神社	秋祭
新暦9月17日	千厩町清田	熊野神社	秋祭
新暦9月18日	大東町曾慶	熊野神社	秋祭
新暦9月19日	室根町矢越	矢越神社	秋祭
新暦9月19日	藤沢町増沢	立石神社	秋祭
新暦9月30日	大東町沖田	天狗田神社	秋季例大祭
旧暦9月8日	東山町松川	早間神社	秋祭
旧暦9月9日	千厩町清田	熊野神社	例祭
旧暦9月10日	花泉町老松	御嶽山御嶽神明社	火渡祭
旧暦9月12日	東山町田河津	山神社	秋祭
旧暦9月15日	花泉町油島	美渡神社	秋祭
旧暦9月15日	花泉町油島	白山姫神社	例祭
旧暦9月15日	室根町津谷川	陸塩神社	例祭
旧暦9月15日	室根町津谷川	雷神社	例祭
旧暦9月15日	大東町中川	旭岡神社	例祭
旧暦9月16日	大東町大原	金鳥神社	秋祭
旧暦9月16日	千厩町奥玉	櫻森神社	例祭
旧暦9月17日	萩荘	御嶽神社	例祭
旧暦9月18日	弥栄	日吉神社	例祭
旧暦9月27日	川崎町薄衣	浪分神社	例祭
旧暦9月28日	千厩町小梨	白幡神社	例祭
旧暦9月28日	東山町長坂	火産霊神社	例祭
新暦10月1日	大東町鳥海	興田神社	例祭
新暦10月8日	赤萩	樞原神社	例祭
新暦10月9日	藤沢町藤沢	葉山神社	例祭
新暦10月12日	千厩町清田	金田神社	例祭
新暦10月16日	川崎町門崎	伊吹神社	例祭
新暦10月19日	大東町猿沢	猿沢神社	例祭
新暦10月20日	萩荘	駒形根神社	例祭
新暦10月20日	中里	稲荷神社	例祭
新暦10月25日	萩荘	吾勝神社	例祭
新暦10月25日	花泉町花泉	天満社	例祭
新暦10月28日	萩荘	三島神社	秋祭
新暦10月29日	花泉町日形	月館神社	秋祭
旧暦10月7日	花泉町永井	高倉神社	例祭
旧暦10月12日	千厩町小梨	小牛田山神社	例祭
新暦11月1日	藤沢町砂子田	弥栄神社	例祭
新暦11月3日	東山町長坂	熊野神社	例祭
新暦11月3日	千厩町磐清水	新山神社	例祭
新暦11月4日	千厩町千厩	松澤神社	例祭

左エ門、和算家千葉胤秀、医者千葉理安らの先人を輩出、餅やはっと、干し柿などの郷土料理・郷土食を伝承している。同プロジェクトは、おいまつ柿援隊、老松活性化同志会、老松大黒舞保存会、老松先人顕彰太鼓保存会の4団体が中心となり、芸能や郷土食を継承しながら特産品を商品化し、世代間交流で住民参加型の生活基盤づくりを行おうとするものであった。

このうち、老松大黒舞の取り組みに着目すると、老松小学校での昭和62年(1987)からの伝承活動をきっかけとして、公民館事業の支援により平成14年(2002)に保存会が結成された。平成25年(2013)5月の創立140周年記念大運動会では、児童、保護者、保存会指導者の世代間交流による大黒舞の披露が実現した(『老松小学校創立百四十周年記念誌』)。また、同年10月の御嶽山御嶽神明社の秋季例大祭「大護摩祈禱火渡祭」において、保存会と児童による合同演舞が行われ、現在まで毎年継続している。保存会のメンバーの多くが女性で、郷土食の生産・販売事業にも積極的に関わっていることも大きな特色といえる。

なお、御嶽山御嶽神明社では戦前から昭和40年代の秋季例大祭において、大門神楽の奉納が境内の仮設舞台や宮司宅(社務所)で行われていた。昭和50年代から火渡祭が行われるようになり、神楽の奉納が途絶えていたが、平成25年(2013)以降、白浜神楽が春季例大祭に奉納されている。

他方、老松先人顕彰太鼓については、平成16年(2004)に地域づくり団体全国協議会から講習事業への助成を受けて翌年に保存会が結成、仙台市の民族歌舞団ほうねん座の作調・指導のもと「流れ義民太鼓」「先人顕彰太鼓パートⅡ(胤秀・理安太鼓)」などの楽曲を創作・演奏してきた。現在も地区の夏まつり等で活動しているが、学校での伝承活動や神社祭礼での演奏など、活動の基盤が整っていないことが課題といえる。

おいまつ・さざほざプロジェクトの「農村地域づくり計画書」には、「特産品×郷土食×郷土芸能の融合により、今までにない相乗効果が期待される。また、地区内

外の皆がさざほざ(和気藹々)集う老松を発信することにより、やりがい・生きがいが創出され、縁溢れる元気なふるさとに変わり、後継者の育成・確保に繋がる」との目標が掲げられている。こうした農村で活用すべき地域資源の中に、「祭り」を加えることにより、地域活性化はさらに促進されるように思われる。それは、一関市内外の各地に応用できる事例でもあるといえよう。



老松先人顕彰太鼓(平成22年9月26日、花と泉の公園)



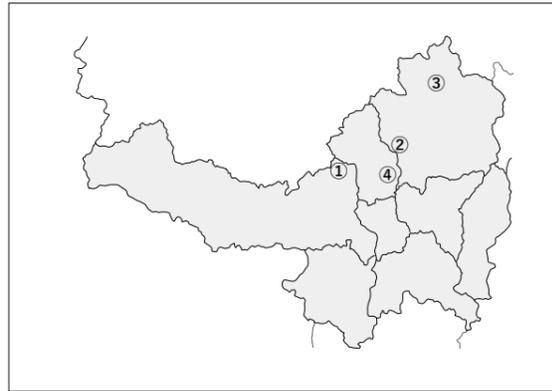
老松大黒舞(令和元年10月20日、御嶽神明社)

Ⅱ 市内の民俗芸能

1. 鹿踊り —ししおどり—

鹿の角をつけた頭をかぶり、長いささらを背負い身に付けた太鼓を打ちながら歌い踊る「太鼓踊系」といわれる鹿踊り。太鼓踊系鹿踊りには行山流、金津流、春日流があり、当地の踊り組はすべて行山流である。

8頭の鹿で構成するのが基本というが、各団体の事情に応じて編成している。



① 行山流舞川鹿子躍

行山流舞川鹿子躍保存会

舞川字蛙沢

県指定無形民俗文化財

【由来と芸能の特徴 構成】

元禄13年(1700)に本吉郡水戸辺村(現宮城県本吉郡南三陸町)の伊藤伴内持遠から舞川の吉田猪太郎らが伝授したのが始まりとされている。

昭和32年(1957)保存会を発足、舞川中学校、相川小学校(合併後舞川小学校)の指導が続いている。

継承が困難になる時期もあったが、地区外の人や女性の参加を積極的に進めて乗り越えた。

8頭の鹿(1頭の雌鹿を含む)で構成。

【演目】

三人舞(三人狂)、二人舞(二人狂)、案山子躍、女鹿子隠し、墓躍、土佐舞(土佐躍)、鹿島躍、海の門中



保存会提供

【上演】

菅原神社例大祭(4月)、藤原まつり(5、11月)、大原水かけ祭り(2月)、一関民俗芸能祭(3月)、イベントなど多数。新盆供養を頼まれることもある。

【保存会】

26人(20~80歳代、女性を含む)。一関文化伝承館で毎週練習。

※平成25年(2013)に東京在住の会員が「東京鹿踊」を結成。

② 小沼鹿踊

小沼鹿踊保存会

大東町摺沢字小沼

【由来と芸能の特徴 構成】

大原山口鹿踊師匠、喜左衛門より文化14年(1817)に伝授された浪民の「行山流山口派」(小崎幸五郎が庭元)を明治中期に小沼の三浦利三郎が継承した。

戦争等で中断していたが昭和25年(1950)に復活させ、35年(1960)に保存会を結成。平成8年(1996)から大原商業高等学校鹿踊部を指導し、合併した大東高校への指導に続き、高校卒業生が保存会に加わるなど活発な活動になっている。

【演目】

いれは 入羽、いりこ 入込み、大入羽、みずぐるま 水車、一人狂い、三人狂い、回り鹿の子、引き鹿の子



【上演】

大原水かけ祭り(2月)、養護老人ホーム夏祭り(7月)、花巻祭り(9月)、摺沢秋祭り(9月)、猿沢秋祭り(10月)、大東町郷土芸能発表会(12月)

【保存会】

13人(20~70歳代、女性を含む)。小沼自治会館で毎週練習。

③ 丑石鹿踊り

丑石鹿踊保存会

大東町鳥海字新田

【由来と芸能の特徴 構成】

地域では明治、大正生まれの人たちが鹿踊りをしており、一時途絶えるが昭和20年代にも盛んに踊っていた。昭和40年(1965)頃、当時の踊り手を師匠に丑石青年会7人が児童館で指導を受けて伝承。

昭和50年(1975)頃までは活動し、その後中断していたのを平成8年(1996)に保存会を設立し、活動を再開させた。

【演目】

墓踊り(仏前供養)、唐金狂い(二人で踊る)、まわり木、かかし

※過去には「ながせきは」などの演目もあった



【上演】

8月14日から16日まで新盆の家で依頼を受けて踊る。

【保存会】

13人(30~70歳代、女性を含む)

④ 行山流大木鹿踊

行山流大木鹿踊保存会

東山町長坂字大木沢

【由来と芸能の特徴 構成】

文化7年(1810)、大原村(現大東町大原)山口より大木集落に伝えられた。

昭和50年代には中断の危機があったが、若い人が中心となり継承。子供会で教えていた時期があり、当時の子供が加入し、また平成末頃からは会員の夫人や子供も参加している。

【演目】

いれは、どんか、庭まわり、狂い踊り、女鹿かくし、案山子おどり、てっぼうおどり、ひきは、墓踊り

【上演】

水かけ祭り(2月)、東山町さなぶり発表会(6月)、花巻祭り(9月)



※平成中頃までは東山町長坂の町なかで位牌を持ち寄ってもらい墓踊りで供養したり、新盆に呼ばれて庭で踊ったりしていた。

【保存会】

10人(10~60歳代、子供、女性を含む)

★ 折壁鹿踊り

折壁鹿踊保存会

室根町折壁若菜沢

市指定無形民俗文化財 ★平成29年から休止中

【由来と芸能の特徴 構成】

文書には、大原山口屋敷又助から喜左衛門に伝授された行山流が天保3年(1832)下折壁村の菊松に伝授されたとある。

大正期には盆供養に踊っていたが、毎年踊るものではなく、また長年休むこともあった。

昭和33年(1958)頃は、清水家を庭元にして練習しており、そこに庭元の孫の忠信氏が加わり踊っていた。その後途絶えていたが、忠信氏が再興を呼びかけ、昭和49年(1974)冬に「行山流屋中鹿踊同好会」を発足し活動した。

昭和60年(1985)からは折壁小学校へ指導を行い、装束を用意し運動会披露も行った。昭和62年に



保存会提供

室根村の無形民俗文化財に指定される。

8頭の鹿と「ばけぼうず(道化)」で構成。道化は家にあった面(かまど神か)をつけていた。

【演目】

一人狂い、二人狂い、笹狂い、墓踊り

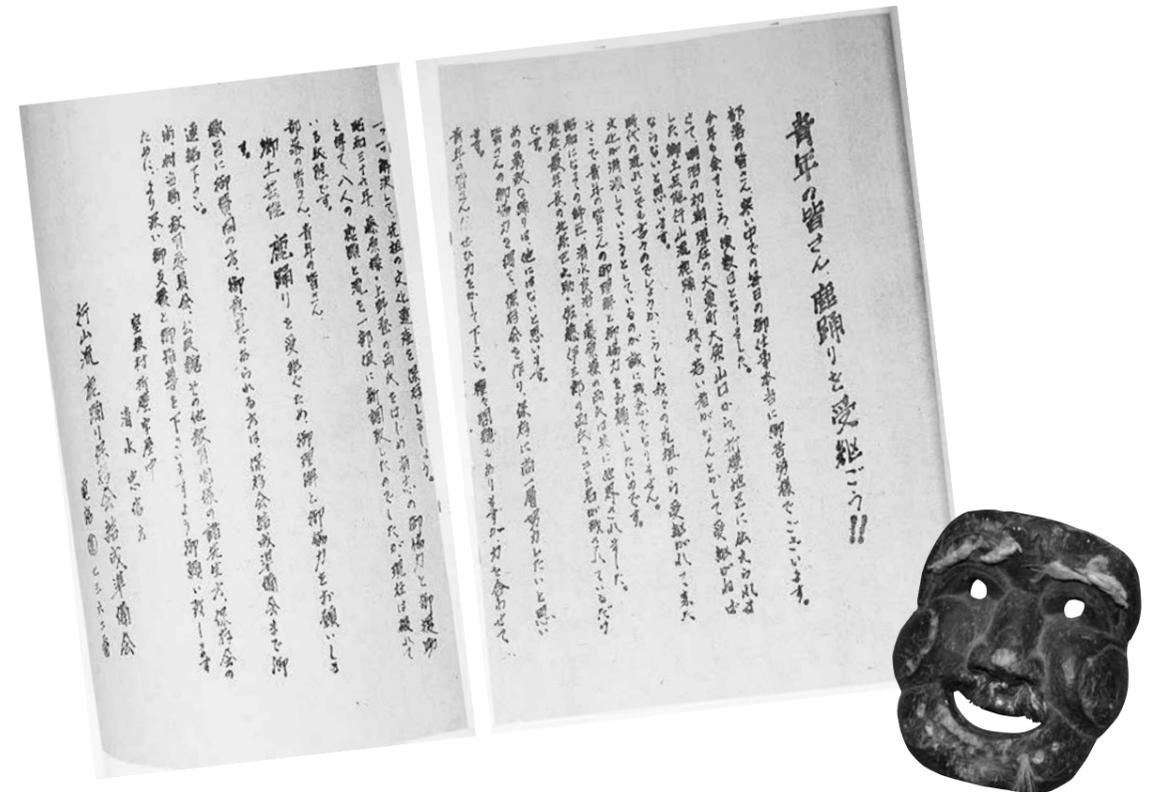
折壁鹿踊保存会の歩み

昭和49年(1974)清水忠信氏の呼びかけに地区の若者らが応じて鹿踊りが再興した。清水家の庭などで一斗缶を太鼓に見たてて練習を積み、公会堂で発表会を開催できるまでになった。

活発に活動を続け、昭和62年(1987)には村の無形民俗文化財指定を受け、子供への指導にも力を入れていた。



保存会提供



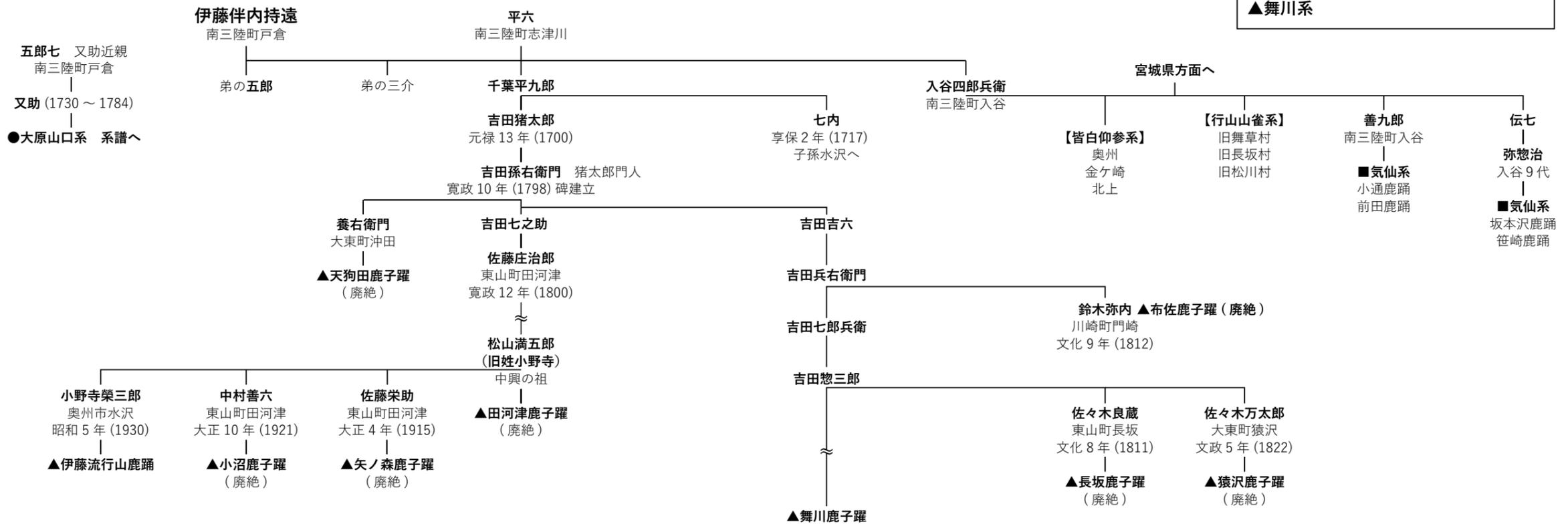
ばけぼうずに使った面

鹿踊り（行山流）系譜略図 一関市編

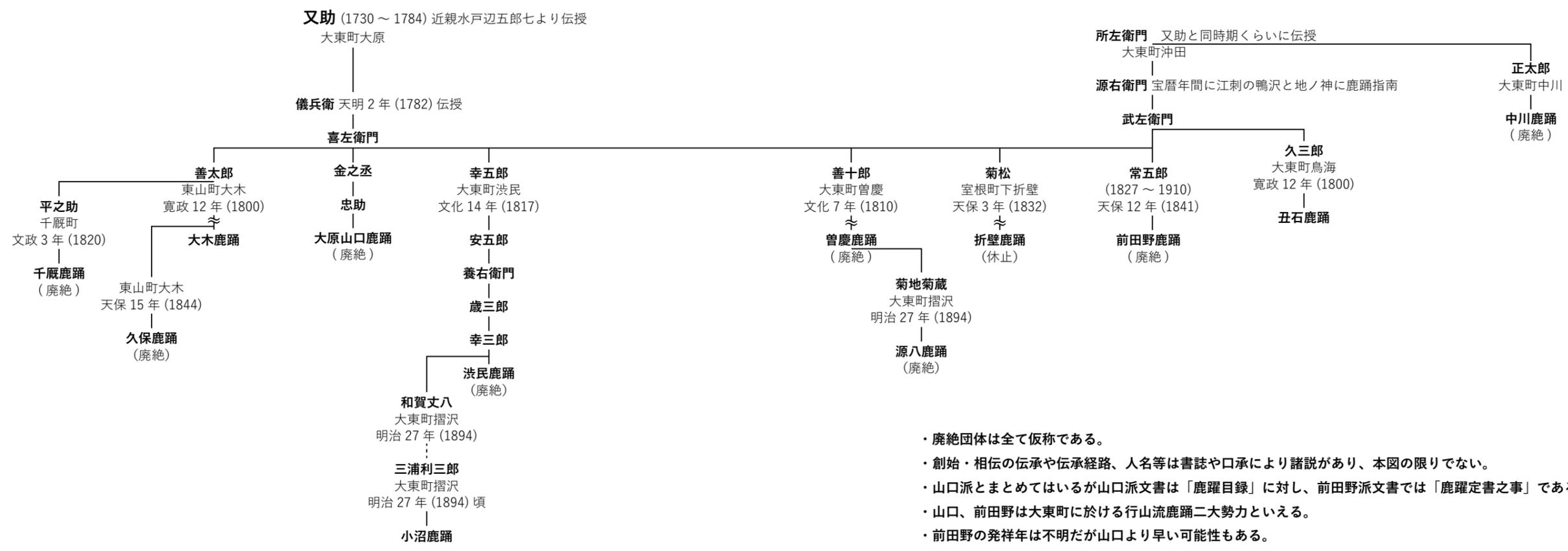
作成 安部 靖（奥州市江刺、金津流獅子躍師匠）

●大原山口系
■気仙系 しかし大原山口系と混同する
▲舞川系

行山流



大原山口系



- ・廃絶団体は全て仮称である。
- ・創始・相伝の伝承や伝承経路、人名等は書誌や口承により諸説があり、本図の限りでない。
- ・山口派とまとめてはいるが山口派文書は「鹿躍目録」に対し、前田野派文書では「鹿躍定書之事」である。
- ・山口、前田野は大東町に於ける行山流鹿踊二大勢力といえる。
- ・前田野の発祥年は不明だが山口より早い可能性もある。

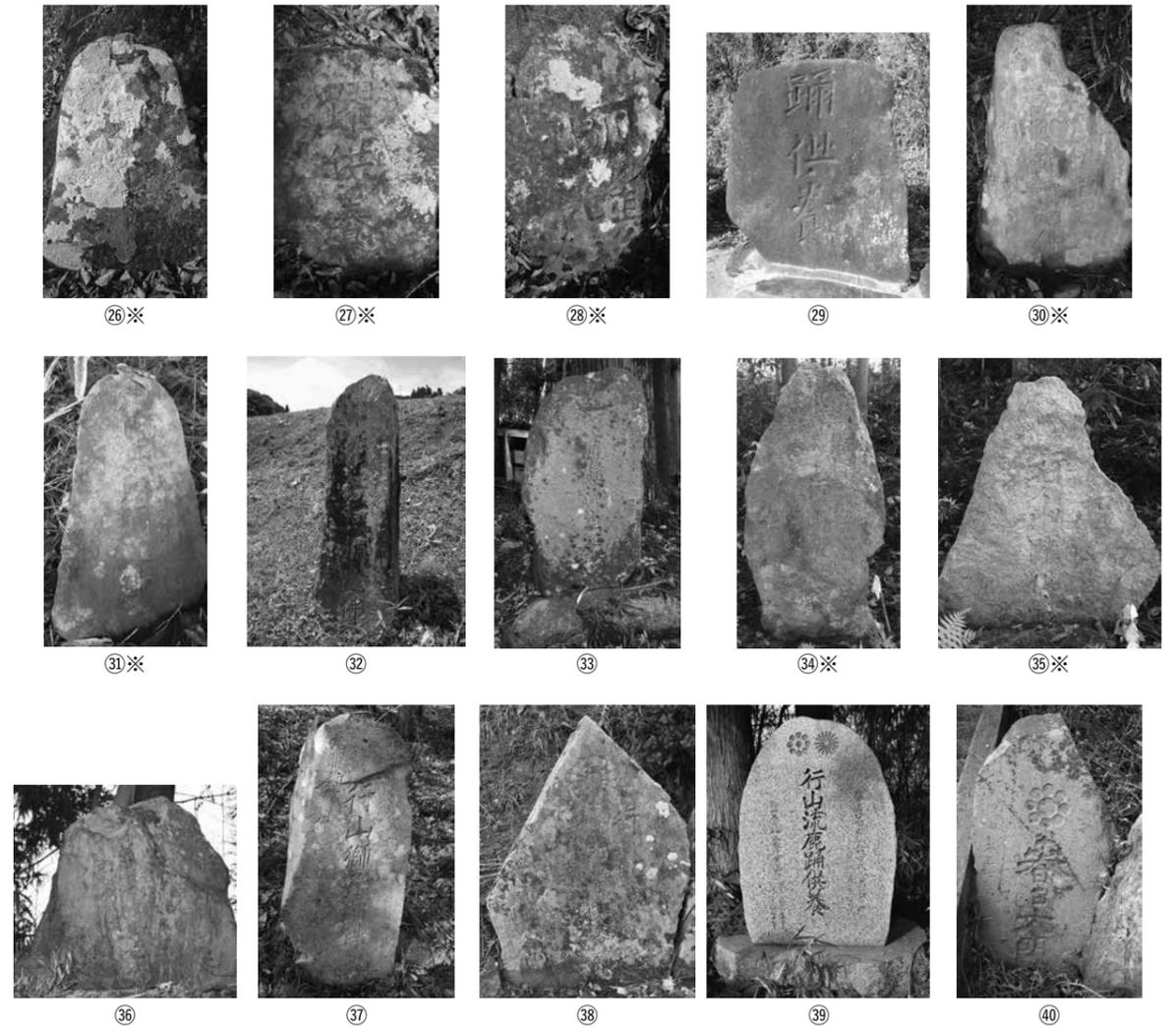
鹿踊り供養碑一覧

No.	写真	系統など仮称	碑文	紋	年等	西暦
①	○	勘太郎系行山	行山鹿子踊供養	九曜紋	文久三癸亥年九月十七日	1863
②	○	勘太郎系行山	行山鹿子踊供養	九曜紋	明治十五年三月十七日	1882
③		行山鹿子踊	行山鹿子躍	九曜紋	寛政十二年六月十七日	1800
④		勘太郎系行山	行山鹿踊供養		文政三庚辰冬十一月九日	1820
⑤	○	鹿嶋宮行山流踊	鹿嶋宮行山流踊供養		文政十三年庚寅三月吉日	1830
⑥	○	勘太郎系行山	行山供養 開眼 正楽院		寛政七年九月十二日	1795
⑦	○	勘太郎系行山	南無阿弥陀佛 開眼導師正楽院		寛政七年九月十三日	1795
⑧	○	勘太郎系行山	行山鹿踊供養	九曜紋	天保六乙未年九月十七日	1835
⑨		行山	行山供養		寛政四年九月十七日	1792
⑩	○	勘太郎系行山	行山鹿踊供養 天王八雲神社	九曜紋	明治四十四年五月吉辰日	1911
⑪	○	勘太郎系行山	(梵字 金剛界五仏) 一之迫畑岡村師匠 右旨趣獅子躍施行事 已何十歳今般建石碑供養塔(か)	九曜紋	宝暦十庚辰歳九月吉日	1760
⑫		勘太郎系行山	一之迫畑岡村師匠 右旨趣獅子躍施行事 已何十歳今般建石碑供養塔		享保拾九年甲寅	1734
⑬	○	山雀流舞草鹿踊	春日大明神	キリーク	天保三辰年 九月吉祥日	1832
⑭	○	山雀流舞草鹿踊	春日大明神 壽老神 空也師	キリーク	時于文化十二年九月と朔日	1815
⑮		山雀流舞草鹿踊(か)				
⑯	○	山雀流舞草鹿踊	春日大明神 山雀流	九曜紋	明治六年酉七月十二日	1873
⑰	○	行山流舞川鹿子躍	春日大明神 不空羂索観音 高祖空也上人		文化九申年	1812
⑱	○	行山流舞川鹿子躍	行山流鹿子踊供養碑 岩手県知事 千田正書	九曜紋	昭和五十年十月吉辰	1975
⑲	○	行山流舞川鹿子躍	春日大明神行山		年月不詳	
⑳	○	行山流舞川鹿子躍	春日大明神 高祖空也上人	キリーク	年月不詳	
㉑	○	行山流舞川鹿子躍	春日大明神 不空羂索観音 高祖空也上人		年月不詳	
㉒	○	行山流舞川鹿子躍	春日大神 行山		大正四年八月八日	1915
㉓	○	行山流舞川鹿子躍	南無阿弥陀佛 躍供養	月輪	寛政十年年 八月吉祥日	1798
㉔	○	行山流大原山口鹿踊	行山躍供養塔 又助	九曜紋・菊紋	天明二年 八月十六日	1782
㉕	○	行山流山口派小沼鹿踊	行山流 小沼鹿踊供養碑 山口派(裏)第九代師匠中立正一没す 平成七年五月二十日 平成十六年五月吉日正喜建立	九曜紋・菊紋	平成十六年五月吉日	2004
㉖	○	行山流天狗田鹿子躍	躍供養		■政七歳 七月吉日	
㉗	○	行山流天狗田鹿子躍	踊連中家内安全	九曜紋	享和元年酉歳 八月吉日	1801
㉘	○	行山流天狗田鹿子躍	獅子躍塔供養		年代不明	
㉙	○	行山流前田野鹿踊	踊供養		文化十二乙亥歳 八月五日	1815
③①	○	山口派仰山流丑石鹿踊	南無阿彌陀佛	九曜紋・月輪	寛政十二星 行山七月十五日	1800
③②	○	山口派仰山流丑石鹿踊	南無阿彌陀佛	月輪	弘化二巳年 七月十六日	1845
③③	○	山口派仰山流丑石鹿踊	南無阿彌陀佛	九曜紋	慶応元丑歳 九月	1865
③④	○	行山流洪民鹿踊	角懸仰山躍供養	菊紋・九曜紋	天保十五甲辰歳	1844
③⑤	○	行山流千厩鹿踊	行山躍供養 大白山観海	九曜紋・菊紋	嘉永四亥歳 十月十四日	1851
③⑥	○	行山流千厩鹿踊	行山躍供養	九曜紋	明治廿五歳 八月十四日	1892
③⑦	○	行山流久保鹿踊	行山踊供養	九曜紋・菊紋	天保十五 辰年仲秋八日	1844
③⑧	○	行山流大木鹿踊	行山獅子踊供養 菊御紋 九曜御紋		文化七年仲秋未巳	1810
③⑨	○	行山流大木鹿踊	行山踊 鈴木善太夫大夫碑	菊紋	明治十六癸未 八月十五日	1883
③⑩	○	行山流大木鹿踊	行山流鹿踊供養 大原山口亦助派大木中立 鈴木長左工門 昭和廿九年七十七才	菊紋・九曜紋	昭和五六 辛酉春彼岸	1981
④①	○	山雀流岩ノ下鹿踊	春日大明神 山雀流	九曜紋	明治二十七年七月吉日 大正七年七月吉日	1894 1918

設立者	場所	寸法(高さ×幅)、奥行(cm)	文献(35頁)掲載	文献に写真	備考
中立 鹿之助七十一才	巖美町駒形根神社境内	120×70	4、6、7	あり	
中立 佐々木仁左エ門	巖美町駒形根神社境内	140×50	4、5、6、7	あり	若神子の塚バス停留所にあったが道路改良のため移転
	巖美町駒形根神社境内		1、6	あり	未確認
	巖美町若神子塚バス停留所	165×95	1、4、6	あり	道路工事で見えなくなったという
行山清左エ門、門人中立利道	巖美町古館 長慶寺西側丘陵部	185×50、60	6	あり	
鹿踊 半右衛門 貞三郎	巖美町雨田 かんぼの宿バス停近く	60×43	1、6	あり	
鹿踊 与三郎	巖美町雨田 かんぼの宿バス停近く	110×90	6	あり	
	巖美町雨田 かんぼの宿バス停近く	90×55	1、6、7	あり	
	巖美町雨田 かんぼの宿バス停近く	60×40	6	なし	
庭元 佐藤文四郎 先生 佐々木謙太夫	巖美町山谷八雲神社参道	105×55	1、4、6、7	あり	
名前あり不詳	萩荘芦の口 自鏡山吾勝神社南口	154×46	4		
	萩荘芦の口 自鏡山吾勝神社北口		4、7		現在は碑分読めず
行山山雀流 兵右衛門	舞川字蓬田	125×114	7	あり	道路下にあったのを引き上げた
山雀流祖 三郎右衛門	舞川字平石7付近	180×140	7	あり	
	舞川字平石7付近		7	あり	未確認
千葉卯格(か)	舞川字和田	190×86	7	あり	
行三末流 吉田七之助	舞川字原沢155付近	100×70	7	あり	文献掲載の年号は誤りか
	舞川字原沢菅原神社境内	190×103	7	あり	
吉田清蔵	舞川字水上 小坂バス停付近	130×41	7	あり	
七郎兵衛(か)	舞川字水上 小坂バス停付近	110×82	7	あり	
七郎左衛門	舞川字水上 小坂バス停付近	150×130	7	あり	
吉田七太郎	舞川字外大久保17付近	114×37	7	あり	
瀧之倉 孫右衛門	舞川旧今泉街道高ト峠				
	大東町大原山口15手前	92×55、36	2、9	あり	
三浦正喜	大東町摺沢小沼57付近	90×45			
人数十八人	大東町沖田久子沢5付近	70×48	3		
養右工門	大東町沖田久子沢5付近	95×58	3		
	大東町沖田久子沢5付近	92×46	3		割れている
中立武左衛門他	大東町沖田字奈良崎5付近	92×81、33(台高8)			
施主 久三郎 円之助 八太郎 十左工門 深松 己五三郎 辰之助 猿松 五良 弓前 万之助 太郎左工門 喜四郎 吉郎治他	大東町鳥海字物沢 物沢公葬地奥	115×72	2		
	大東町鳥海字物沢 物沢公葬地奥	92×50			
	大東町鳥海字西丑石 消防屯所向かい	123×43、32			現在、年号は読めず
源蔵 世話人菊池太郎吉 芦宇一郎 中立 幸五郎 右弟子百拾八人	大東町洪民伊勢堂40 裏山	100×60	2		
長坂村善太夫	千厩町千厩字上駒場93裏山	143×69、30	8	あり	もとは白山光龍寺(松澤神社)
佐藤近之丞 世話人 佐藤喜源太、金野徳四郎、佐藤養三郎 外十四名	千厩町千厩字上駒場93裏山	108×105、36	8	あり	もとは白山光龍寺(松澤神社)
	東山町長坂久保10北側	80×70、15	10	あり	大木鹿踊りには、教えた伝承あり
大原山口亦助弟子 中立善太郎	東山町長坂大木沢79北側	100×45	2、10	あり	
	東山町長坂大木沢 大木沢バス停付近	100×70			
嗣子義雄七十三才 後継伸雄四十七才	東山町長坂上沢田136南側	112×77、42(台高20)			
明治二十七年 佐藤大三郎 大正七年 千葉林七	東山町岩ノ下観音堂下	120×55、40	10	あり	同一碑内に年号2つ



※は安部靖氏撮影



供養碑一覧「文献掲載」

- 1 一関市文化財調査委員会 『一関市文化財調査報告書 第5集』1968 一関市教育委員会
- 2 金野富雄 「行山流山口派鹿踊りについて」『東磐史学 創刊号』1976 東磐史学会
- 3 金野富雄 「行山口派鹿踊り」『東磐史学 第2号』1977 東磐史学会
- 4 一関市史編纂委員会 『一関市史 第4巻地域史』1977 一関市
- 5 一関市立本寺中学校 『須川・本寺風土記』1977 一関市立本寺中学校
- 6 阿部正瑩 『巖美地方の民俗資料』1985 阿部正瑩
- 7 佐藤丕基・千田一司 『一関地方の民俗芸能 郷土の文化シリーズ26』1998 一関市教育研究所
- 8 千厩町史編纂委員会 『千厩町史 第4巻近代編』2000 千厩町
- 9 山口自治会長 千葉耕士 『おらほの文化財 山口の文化財』2010 山口自治会
- 10 いちのせき元気な地域づくり事業(郷土ひがしやま歴史伝統保存記録事業) 『ひがしやま記憶をつなぐ(郷土ひがしやま歴史伝統保存記録事業)』2015 東山町自治会連絡協議会

鹿踊り供養碑所在地



奥州市

岩手県

平泉町

住田町

陸前高田市

大東

東山

一関

室根

千厩

川崎

気仙沼市

花泉

藤沢

栗原市

宮城県

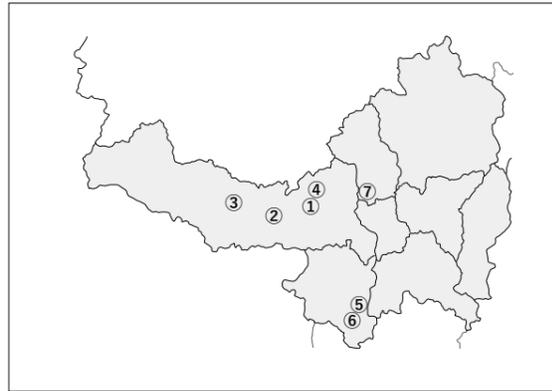
登米市

※図中の丸番号は、鹿踊り供養碑一覧の番号に対応する。

0 7.5km

2. 獅子舞 —ししまい—

獅子の頭かしらを持ち、幕の中に2人か3人が入って太鼓にあわせて踊る。当地の獅子舞は、正月や春、または夏に神社の祭礼につき従い、あるいは獅子のみで地域を巡行して厄払いをする。



① 狐禅寺獅子舞 こぜんじ

狐禅寺芸能保存会
狐禅寺字川口

【由来と芸能の特徴 構成】

文化2年(1805)、当地方一帯に悪疫が流行していたので、狐禅寺久田の修験、来善院の恵順法印が仲間の法印たちと羽黒山に行き、獅子舞を習得してきた。八雲神社の神輿が村内を巡幸するとき、各家々でこの獅子舞を舞ったところ悪魔降伏、疫病退散の効験あらたかであった、という。八雲神社は稲荷神社(狐禅寺舞台)に合祀されている。

獅子舞は地域で舞われていたが後継者がおらず、狐禅寺芸能保存会の男性が担うようになった。昭和50年代までは狐禅寺全戸を回り、座敷から靴を脱いで家に入って、柱に沿わせて舞う「柱かくし」をした。現在は各地区公民館を回っている。

ほら貝、太鼓、舞手(2人)で構成。

昔は太鼓は一人で肩から抱えていた。獅子は、鈴、扇子を持ち、毎回、宮司が切った紙垂を頭につける。頭は昭和末に新調し、代表宅で保管している。



保存会提供

【演目】

舞あがい上り、御神楽、火難よけ疫病よけ舞い、疫病よけ舞い

【上演】

地区内(公民館、新築の家など)の巡行(3月)、病院慰問など

【保存会】

狐禅寺芸能保存会は昭和41年(1966)に神楽を習うために狐禅寺2~6区の有志で発足。5区公民館で練習し、神楽や七福神舞を披露したが現在は活動できていない。会員は約20人(50~70代男女)。そのうち男性が獅子舞を担う。

② 西黒沢獅子舞

西黒沢獅子舞保存会
萩荘字川ノ上

【由来と芸能の特徴 構成】

7月の「ご天王さま」の祭りに神職が社を持って七集落を回るのに供奉する。昔から八雲神社の別当として阿部家あべが頭を保管し、獅子舞を舞っていた。

氏子うぢこが協力して保存会としている。地名をとって神田獅子舞としていたこともある。

構成は、太鼓(1人)と舞手(2人)。

頭の紙垂は付けたまま。昔は落ちたものをおばあさんたちが喜んで持ち帰っていた。幕と同じ布で尻尾がつく。

【演目】

太鼓に合わせて舞う。その後、頭などを噛む。

昔は歌を歌っていたとも聞くが、不明。



【上演】

ご天王さまの祭り(7月)で7集落の各自治会館を回る。昭和中頃までは各家を回っていた。

【保存会】

15戸(中島地区の氏子)。奉納前に中島公民館で練習を行う。

③ 達古袋獅子舞 たっこたい

保存会はない。
達古袋神楽の保存会員が担っている。
八幡神社(萩荘字八幡)

【由来と芸能の特徴 構成】

昔から「ご天王さま」の神輿について獅子舞を踊る人がいた。昭和末頃までは踊っていたが、現在はないので、神楽の会員が代わりに担っている。

獅子頭は八幡神社に保管し、祭りの時に出して、毎年、新しい紙垂を付ける。幕には共布で尾がついている。

構成は太鼓(1人)、舞手(2人)

【演目】

決まった演目はない



佐藤公基氏提供

【上演】

ご天王さまの祭り(7月)で7集落の公民館を回る。戦後すぐは各家を回っていた。

【保存会】

なし

④ 善楽流獅子舞

善楽流獅子舞保存会

一関市舞川字河岸

【由来と芸能の特徴 構成】

寛永年間(1624~1644)に、修験の流れをくむ熊野神社が河岸に移り、大正期に舞草神社に合祀された熊野権現についた獅子舞。

昭和40年(1965)頃までは旧暦2月1日に舞草神社内の八雲神社付きの獅子舞として神輿について旧舞草村内を巡っていた。しばらく途絶えていたが、地域の若い人が参加し、平成28年(2016)に各自治会の受け入れの協力を得て巡行を再開した。

昔は神社講中の家や新築の家にも呼ばれ、土間や玄関で舞った。頭の紙垂がお守りとされ、子供が競って取っていた。各家では、盆に載せた米を供え、お守りを受けてからその年の農作業を始めたという。

構成は太鼓(1人)、ほら貝、獅子舞(3人)。

頭は別当家に保管。



【演目】

かいな差し、お脇払い、三の足、六の足、シャクジョウ御神楽、オオギ御神楽、柱ガクシ、世の波、親子舞 ※世の波は子猿と翁が登場する物語のある演目。

【上演】

八雲神社祭礼「天王さま」で各地区公民館を巡行(3月)、舞川幼稚園で披露(2月)。

【保存会】

約20人(河岸を中心にした有志、30~80歳代)。月2回舞川第8区公民館で練習。

⑤ 東永井獅子舞

東永井獅子舞保存会

花泉町永井字岫前

【由来と芸能の特徴 構成】

古くから地域で舞われてきたという。昭和47年(1972)頃、東永井の弥栄神社で文久3年(1863)の幕が発見されたのを機に永井青年会が経験者の古老に教わって始めた。地域で太鼓を作ってもらい、そのお披露目に正月元旦に永井地区の全戸を歩いたり、他地区まで行ったりした。

昭和50年代中頃から平成17年(2005)の閉校まで花泉南中学校に指導していた。

現在は弥栄神社の祭礼でのみ奉納している。

構成は、獅子あやしと獅子舞(2人)、笛、大太鼓、小太鼓、鉦。



保存会提供

【演目】

踊り(獅子舞)、お囃子(打ちばやし、外ばやし)

【上演】

弥栄神社の祭礼(旧暦6月15日前後)

【保存会】

7人(50~80歳代)

⑥ 永井獅子舞

永井地区郷土芸能伝承保存会

花泉町永井字新田

【由来と芸能の特徴 構成】

文久3年(1863)の幕が残る東永井獅子舞から指導を受け、引き継いでいる。平成22年(2010)に永井地区住民に協力を得て郷土芸能伝承保存会を作り、教室形式で誰でも参加できるようにして公民館で獅子舞と鶏舞(永井神楽)の継承活動を始めた。平成17年(2005)に閉校した花泉南中学校の獅子舞の道具を使っている。

構成は、獅子あやしと獅子舞(2人)、笛、大太鼓、小太鼓、鉦。

【演目】

打ちばやし、外ばやし、獅子舞



【上演】

永井地区敬老会(9月)、市民センター祭り(11月)、慰問など

【保存会】

約20人(子供~大人)

⑦ 岩ノ下獅子舞

岩ノ下獅子舞保存会

東山町松川字岩ノ下

【由来と芸能の特徴 構成】

岩ノ下の三十三観音と関係があるという。

1月3日に地区内の全戸を「悪魔祓い」に回り、早間神社(松川字岫)のお札を配る。厄年の人には厄払いの札も渡す。

もとは小正月行事の「かどめぐり」として旧暦1月12日に行っていたが、平成初めに日を変えた。年配者の頃には、獅子に入る前には魚を食べないなど精進をしていた。

構成は、「悪魔払い」のささら(幣束)を持つ人、お札を配る人、太鼓(大太鼓、小太鼓、太鼓を担ぐ人)と笛、獅子(3人)で十数人の一行になる。

獅子頭は「胴元」に祀られている。先代の頭は、江戸時代に地域の大工が一つの切り株から二つ作り、もう一つは萩荘の頭という。麻で作った尻尾を付ける。紙垂は付いたままにしている。



【演目】

なし

【上演】

悪魔祓い(1月)

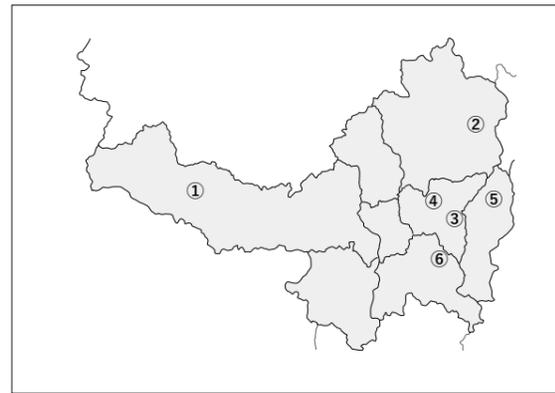
※昔は新宅祝いの依頼もあった。さなぶり大会やイベントに出演することもある。

【保存会】

地区の全戸が参加(昭和53年(1978)に保存会を結成)。

3. 田植踊り —たうえおどり—

小正月にその年の豊作を祈願して各家を回り、庭などで踊る。太鼓にあわせて踊るものと、手に太鼓を持って踊るものがある。「やんじゅうろう」などという役がいることが共通している。



① 小猪岡豊年田植踊

小猪岡豊年田植踊

敵美町字中ノ上

【由来と芸能の特徴 構成】

藩政期に猪岡村の肝入槻山権十郎が若衆に伝授したとの伝えがある。

2代目の明治25年(1892)頃からの記録はあり、3代目に女性に加わるが、その後6代目までは男性が踊っていた。「役人田植踊り」といわれていた。

構成は、胴取り(太鼓)、大夫(口上を言う)、奴(男役)、早乙女、どけ(道化。弥十郎、才三とも。面をつけて手平鉦を摺る)。

昔は笛方もおり、岡びょうし、水口がかり、かつためちらし、早苗とり、苗がかりなどの役もあったという。

【演目】

朝はかの奴、義経の奴、義経の手太鼓、仙台田植(一丁ぎ、二丁ぎ)、夕暮れ

※過去には、朝はかの手太鼓、今日の田植、小波合せ、足柄山、お正月の手太鼓、鎌倉の手太鼓、黒川の



保存会提供

手太鼓、神川の手太鼓、向え山の手太鼓、吉原の手太鼓、麻きりの手太鼓、斜太鼓、行けやもどれ、目を見れば、安恵の山、松がや、ちんばくら、西よ館、壺丁笠、前の檜木、など約30種類の踊りがあった[岩手日日新聞 昭和50年12月11日掲載より]。

【上演】

一関市民俗芸能祭(3月)

【会員】

小猪岡地区の中上を中心にした愛好者の会。15人(50~70歳代の女性が主)

② 下内野田植え踊り

[別称:オダエ(お田植)]

下内野田植え踊り保存会

大東町大原字岩脇

【由来と芸能の特徴 構成】

昭和25年(1950)、地域に芸能がなかったので、当時42の厄年であった勝部榮之丞氏宅を庭元にして気仙沼市八瀬の「関根田植踊り」の先生を招いて20歳前後の青年が習得した。翌年の水かけ祭りで披露し、小正月行事として家々を回った。昭和40年(1965)頃までは、水かけ祭りの前日に集落内の全戸を回っていた。現在は、水かけ祭りで年祝いの家や商店を回る。

配役は、八次郎2人(大・小八次郎、回しの文字は大、原)、早女7人(田、植、し、も、う、ち、の、の文字が入ったまわしをつける。中立ちは「う」、先鉢は「田」、後鉢は「植」)。囃子は笛(1~3人)と歌。門付けでは、庭借り、ガバン(鞆)持ちが先導する。



保存会提供

【演目】

お正月、年初、鎌倉、朝霧、尊、朝はか、向山、夕暮、君様、おいどま、立[平成29年水かけ祭りで上演した演目]

ほかに、細道、朝草刈、ヒロヘモチ、黒川、十七

【上演】

大原水かけ祭り(2月11日)

【保存会】

昭和53年に保存会を創設。現在、下内野住民と役所職員など有志47人。

③ 小梨田植踊り

小梨芸能保存会

千厩町小梨字大目

【由来と芸能の特徴 構成】

小梨10区の青年たちが昭和49年(1974)、打ちばやしとともに矢越の小松森雄氏から習った。やんじゅうろう2人がこっけいなことを言いながら主導し、舞手(5人など奇数人)が小太鼓を持って踊る。笛がつく。

【演目】

お正月、年の始め、朝はか、向山、此の宿、入れ違い向山、おいとま

【上演】

平成中頃まで正月3日頃にお祝いのある家(新築や



小梨自治振興協議会提供

結婚)に呼ばれて行っていた。小梨地区だけでなく、千厩町内の他の地区にも行った。

現在は、結婚式などに呼ばれて行く。披露機会は少ないが、練習はしている。

【保存会】

13人(小梨10区の20~70歳代の男性)

④ 入山沢田植踊り

入山沢田植踊り保存会

千厩町奥玉字入山沢

【由来と芸能の特徴 構成】

大正頃にも踊る人がいたが、昭和7年(1932)小野寺巳之助氏宅を宿にして浜横沢の菅原貞之進氏が一か月間滞在し、青年たちを教えた。数回で途絶え、再度昭和26年(1951)に貞之進氏から10~30歳代の男女11人が伝承し、2年ほど活動した。

その後は休んでいたが昭和37年(1962)に婦人会に教え、20年ほど続き、昭和50年(1975)頃に天ヶ森子供会に教え、平成中頃まで続いた。

平成31年(2019)の中東北田植え踊り大会(藤沢町)に呼ばれて小野寺義吉氏などを師匠に練習して出演した。

構成は、やんじゅうろう、かっこ(中央が中立)、笛、庭借り、荷しよい(昔は米や豆をもらっていた)。

【演目】

入れは、年の始、お正月、朝はか(朝の歌)、麻切、長十七、どこより、向山、鎌倉、夕暮(夕方の歌)、この



しぐ、ひるえ持ち(昼の歌)、義経、黒川、君様、セツ下、廻り十七、細道、おいとま、行きそう、さよ節(道中歌)

【踊り】夕暮れ、一の谷、近江八景、春駒、ヤモト、伊勢踊り、餅おいとこ、家業おいとこ、春雨、おさべおいとこ、やんじろう、踊り十郎(現在は、一部のみ伝承) ※ご祝儀をもらうと手踊りや太鼓を加えた。

【上演】

昔は、餅の年越(旧正月15日)頃に地区内や大東町曾慶や大原まで泊まりで踊って歩いた。

【保存会】

15人(30~80歳代男女)

⑤ 大里田植踊り

大里田植踊り保存会

室根町折壁字新館前

【由来と芸能の特徴 構成】

昔から田植踊りを踊る人たちがいた。昭和49年(1974)、昔踊っていた60歳代の人を師匠にして、大里地区の20~50歳代の有志が田植踊りと手踊りを習った。しかし、数年で中断した。

昭和56年(1981)に地区の小学生高学年に田植踊りと手踊り(近江八景、夕暮ほか)を教えた。平成9年(1997)に助成をもらって地区の小学生全員に田植踊りのみを教えるようになり、現在は子供会が継承している。

構成は、やんじゅうろう2人、カッコ(踊り手)5人、下座(歌)と笛吹(現在、不在)。

【演目】

入葉、年の始、お正月、朝はか、朝霧、向山、入違向山、昼へ持ち、何処より、鎌倉、義経、黒皮、此の



保存会提供

しぐ、七つ下り、長十七、廻り十七、巻きおろし十七、君様、細道、御暇、行きそろ、渡拍子

【手踊り】おいとこ節、家業おいとこ節、夕暮、八本、伊勢おどり、春駒、近江八景、軒ばやし、大黒舞

【上演】

地区の敬老会(9月)、芸能祭など

※昔はお観音様まいり(南流神社(室根町折壁)で1月17日に開催)で町場を門付けで歩いていた。

【保存会】

子供9人、大人4人(女性が主)

⑥ 徳田田植え踊り

徳田田植え踊り保存会

藤沢町徳田字辻道

【由来と芸能の特徴 構成】

明治初期に宮城県の涌谷や米川(東和町)から伝わったといい、小正月に少人数で家を回って歩いていた。昭和40年(1965)頃に徳田青年会が年配者にその踊りを習って徳田部落会館で始めた。徳田青年会が八沢青年会(徳田、砂子田、新沼、増沢)に教えたこともある。

その後、途切れていたが、徳田小学校の教育発表のために頼まれて青年会の経験者とPTAが保存会を作って指導した。当時の校長先生が神社の宮司だったので発表会用に祭壇を作り、教諭がナレーションを吹き込んだ。

敬老会やお祭りなどでは大人も一緒に踊る。

構成は、笛、口上・歌、踊り手(やんじゅうろうを含む)、あるじ役。



【演目】

田植踊り(1~5番)を時間に応じて選ぶ。

【上演】

藤沢町子ども芸能発表会(1月、子供のみ)、地区敬老会、芸能祭など

【保存会】

保存会員16人(30~70歳代、女性1名含む)、小学生約10人(希望者が参加)

★ 前ノ沢田植踊り

前ノ沢田植踊り保存会

大東町曾慶字清水

★現在は休止中

【由来と芸能の特徴 構成】

明治30年(1897)頃、前ノ沢で気仙沼の師匠に習って始めた。その中の泉慶三郎氏が大正7年(1918)に師匠となって藤原直美氏、佐藤儀三郎氏に教え、その二人が昭和25年(1950)に佐藤富男氏、須藤良人氏に教えた。昭和56年(1981)2月に富男氏らを師匠にして約10人で保存会を発足した。前ノ沢(渋民3区)の青年が中心だが女性も加わることもあった。

昔は大きな家を宿にして練習をしていたが、保存会は冬に1週間ほど渋民3区の会館で練習した。

正月元旦に八坂神社に奉納し、地区内の家や他の区などを「かどめぐり」した。昭和63年(1988)には県

の補助を受けて衣装を揃え、大東町の芸能祭にも出た。

平成始め頃には保存会員が曾慶小学校に教えたり、曾慶青年団に教えたりしたこともあった。地区の子供と一緒に踊ったこともあった。

【演目】

お正月、向い山、おいとま、やんじゅうろうの口上

★^{わ やま}上山流田植え踊り

上山田植え踊り保存会

室根町折壁字屋中

★現在は休止中

【由来と芸能の特徴 構成】

大正期に青年団の男女で踊っていたという。昭和22年(1947)頃、戦地から帰ってきた人に教わって始めるが数年で中断し、昭和31年(1956)に再興。何度か中断し、昭和42年(1967)2月に屋中7区全戸が参加して「上山田植え踊り保存会」を作るが、また中断した。

当時は南流神社(室根町折壁)の縁日(1月17日)に奉納し、町を門付けで歩いた。その前日に地区内の各戸を回った。昭和50年代にはイベントに呼ばれることもあった。

構成は、かっこ5人、やんじゅーろ2人(または4人)、笛4、5人、庭借り・お世話人(計20人くらい)。明治の末には「女やんじゅうろう」がいたといい、昔から男女ともに参加している。

【演目】

年の始め、お正月、向山、おおやれ、こやれ、扇正月、あさはか、ほそみち、おいとま、わたり

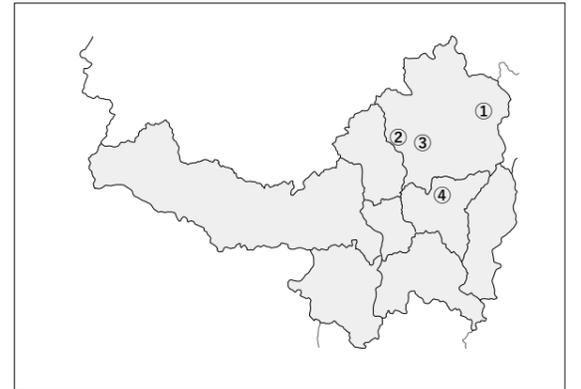
[手踊り] おいとこ、けんばやし、春駒など

★そのほかの休止中の田植え踊り

達古袋田植え踊り(萩荘広面、小猪岡から伝承)、山谷田植え踊り(巖美町)、弘川田植え踊り(大東町大原)、宇都野田植え踊り(大東町大原)、上大原金成沢田植え踊り(大東町大原)、丑石田植え踊り(大東町鳥海)、曾慶七区田植え踊り(大東町曾慶)、釘子田植え踊り(室根町)、津谷川田植え踊り(室根町)、濁沼田植え踊り(千厩町)

4. 伊勢神楽 —いせかぐら—

江戸時代の伊勢参りの途上で見た祭りの踊りを覚えて持ち帰ったのが由来などとされる。囃子の笛にあわせて屋台に据えた太鼓を踊りながら綾棒(バチ)で叩く。大東町とその周辺で見られる。



①^{う つ の}宇都野伊勢神楽 (旧内野伊勢神楽)

宇都野伊勢神楽保存会

大東町大原字城戸

【由来と芸能の特徴 構成】

元文年間(1736~1741)、駿河逗留時の秋祭りをもち帰った萱屋敷九右衛門が広めたのが始まりという。江戸時代末の1850年代に宇都野川具保の亦兵衛が大之助に指示し、神楽を復活させて秋祭りの御供行事として伝えてきた。

昭和58年(1983)頃に保存会を結成し、太鼓を購入し、青年を育成してきた。昭和55年(1985)からは内野小学校を指導(平成22年閉校)。

笛の囃子で「綾」を持って踊り、太鼓を叩く。踊り手は24人、笛2人、庭借り・かばん持ち、賄い等含めて80人近くが参加。



保存会提供

【演目】

渡り拍子、一^{いっひょうし}拍子、曲、金成矢車、野々下矢車、岡崎、滋賀、香川^{かがわ}、唐飛^{とうひ}、御積迦、御神輿^{さか}降り羽、御神輿^{くだ}降り、ぶっかくし

【上演】

大原八幡神社祭礼(4年ごと)

【保存会】

上・中・下内野の全戸約150戸が加入。

② 下猿澤伊勢神楽

下猿澤伊勢神楽保存会

大東町猿沢字岩婦

【由来と芸能の特徴 構成】

元文年間(1736~1741)に鳥海村丑石の兄弟が駿河で会得して帰り、伊勢神楽として人々に教えたという。江戸時代末に沖田堀合から婿養子に來た忠吉氏が小向、板倉の若者に伝授したのが下猿沢での始まり。

昭和53年(1978)に下猿沢自治会で保存会を作り伝承しており、地区の子供は小学生になれば指導を受ける。昭和58年(1983)から猿沢小学校の運動会に指導。小学校に指導を始めてから地区の女兒も加わるようになった。

構成は、太鼓を叩く舞手と笛、ササラ擦り(鉦、ササラ)。

【演目】

お降り、お登り、曲、宇平殿茂平殿平作殿、一拍子、



岡崎、矢車、お釈迦様、打ち止め

【上演】

猿沢神社奉納(10月)、猿沢地区芸能発表会(11月)、大東町郷土芸能発表会(12月)

【保存会】

下猿沢地区全戸で結成。7人(囃子、世話役、指導者)と小学生約10人が活動している。

③ 渋民伊勢神楽

渋民伊勢神楽保存会

大東町渋民字横張

【由来と芸能の特徴 構成】

「昔の人は、伊勢参宮を一生に一度の念願としてきたが、なかなか叶わず、参宮できない人達は伊勢の二見ヶ浦から昇る朝日を太鼓に見立てアヤに祈りを込めて、この地方より伊勢神宮を遥拝したと語り伝えられている。」という。

明治始め頃から伝承されてきたというが、中絶していた。昭和55年(1980)地域の青年たちが親睦のために「渋民讚互会」を作り、菊池昭二氏の指導を受けて伊勢神楽を受け継ぎ、平成13年(2001)に保存会を結成した。平成24年(2012)までは渋民小学校の運動会での発表に向けて児童を指導していた。

笛に合わせて太鼓を緩で叩きながら、列になって演技する。昔は道化(ササラすり)もいた。

【演目】

お上り、一拍子、廻り曲、でんでこでん、でんでこで



ん、お下がり、ぶっきり、とーひーぶっきり

[伝承のみ] 野々下八事、松竹梅、渡り、打ち切り、矢車、おしゃかさま

【上演】

渋民八幡神社の例大祭での奉納、地区巡行(9月)、大東町郷土芸能発表会(12月)、年祝いなど。

【保存会】

渋民地区約200世帯が会員。舞手約20人、笛5人(子供~大人)。

④ 花貫伊勢神楽

花貫伊勢神楽保存会

千厩町奥玉字茶名畑

【由来と芸能の特徴 構成】

元文年間(1736~1741)に大原の芦屋敷久右エ門が西国八十八か所をまわり、途中の駿河あたりで秋祭りのために踊りを指南しているのに会い、それを習得して土産として持ち帰り、普及させたといわれる。

明治26年(1893)頃に茶名畑の金野丑蔵氏などが大原内野の師匠を招いて修得したという。有志の青年たちが踊っていたが、昭和30年(1955)頃からは女性も加わり、保存会として活動。昭和40年頃から茶名畑班の子供への指導が始まり、50年頃から花貫子供会への指導に広がった。渋民小学校に教えていた時期もある。

構成は太鼓(舞手)と笛。「花バチ」は、和紙で作っていたが、現在は耐久性のあるビニールで作っている。衣装は黒紋付を「おはしより」し、襷をかける。



【演目】

渡り、曲、釈迦踊り、三切り、打切り

※子供は渡りと曲のみ伝承。

【上演】

奥玉民芸大会(11月)

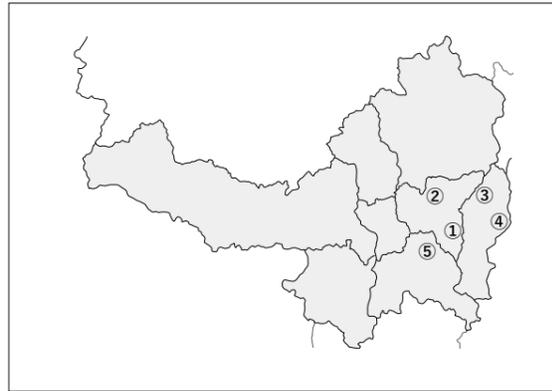
※昔は、地区内を練り歩き、神社に奉納していた。地区内の祝いの席にも呼ばれた。平成15年(2003)には伊勢神宮に奉納。

【保存会】

15人(40~70歳代)と地区の子供約10人。

5. 打ちばやし —うちばやし—

気仙沼から伝わったといわれる。笛の囃子があり、締め太鼓を複数の奏者が揃って打ちならす。



① 小梨打ちばやし

小梨芸能保存会
千厩町小梨字大目

【由来と芸能の特徴 構成】

昭和49年(1974)、小梨10区の青年たちが地域の祝い事などを盛り上げるため、室根村(現室根町)矢越の小松森雄氏から打ちばやしを習った。場所がなかったので公葬地などで練習し、衣装は手作りしてもらい、山車を作って地域にお披露目した。

地区の子供会に教え、平成初め頃からは小梨小学校へ指導していたが平成30年(2018)に統合により廃校。現在は小梨地区の子供に指導を続けている。

掛け声をかけ、振りをつけながら、締め太鼓(大、小)打つ。笛が演奏を主導する。

【演目】

[子供に指導]とおひ、おいとこ、けんばやし、わたり
[保存会で伝承]糸矢車、しころ、りどうばやし、かっこう



小梨自治振興協議会提供

【上演】

白幡神社大祭(4月、5年ごと)、小梨地区民祭(11月)、慰問など

【保存会】

13人(大人)と小梨地区の小学生
小梨第3集会所、小梨市民センターで上演前に練習。

② 根山打ちばやし

根山打ちばやし保存会
千厩町奥玉字弘川

【由来と芸能の特徴 構成】

大正15年(1926)に八瀬(現気仙沼市早稲谷)の橋の沢打ちばやしの対馬倉吉氏(太鼓)、小山福次郎氏・武則氏・武男氏(笛)の指導を受けて青年有志が会を結成。その後活動が途切れていたが、昭和30年代後半、当時の会員を先生にして伝承を再開した。

昭和47年(1972)頃、千厩夏祭が始まり、その出演のために大平子供会に教えるようになった。平成17年(2005)に閉校するまでは旧奥玉小学校にも指導。

締め太鼓(大)、締め太鼓(小)、笛で構成。

【演目】

通りばやし、渡りばやし、剣ばやし、おいとこ、笹ばやし、江戸矢車



【上演】

飛ヶ森キャンプ場開き(4月)、水車音楽祭(9月)、奥玉地区民芸大会(11月)、八坂神社大祭(8月、3年ごと)で神輿に供奉。

※奥玉のふるさと祭り(盆踊り)や、昭和末頃からは室根神社祭の新宮の陸尺(神輿の担い手)の太鼓と笛を保存会が担当。

【保存会】

大平地区の小学生(3~6年生)は全員参加する。

③ 屋中打ちばやし

屋中郷土芸能保存会
室根町折壁字勢返

【由来と芸能の特徴 構成】

明治頃、八瀬(現気仙沼市早稲谷)から教わったというが不明。途絶えていたが昭和30年(1955)頃に復活した。

昭和52年(1977)にさくらまつりで発表するために屋中の子供会に教えて「屋中子供うちばやし」も活動していたが、平成21年(2009)の小学校統合を機に廃止。

台車に太鼓(小と大)を据えて、引っ張る。まわりに手踊りもつく。笛が4人。着物を重ねて脱ぎ垂れにして着る。上山(わやま、地名)の「わ」が入ったまわしをつける。

【演目】

わたりばやし、りどうばやし、けんばやし、おいとこ、と



保存会提供

らまい、かっこばやし、ささばやし

※過去には16曲あった。

【上演】

室根山つつじまつり(5月)、気仙沼みなとまつり(8月)室根町芸能祭(11月)ほか

【保存会】

屋中地区(勢返、若菜沢)の有志、約25人(50~70歳代、女性が半数)。上演前に屋中地区会館で練習。

④ 浜横沢うちばやし

浜横沢うち囃し保存会

室根町折壁字中里

【由来と芸能の特徴 構成】

江戸時代に室根神社の祭典で打ち鳴らしたのが始まりといわれ、古い歴史をもつという。

気仙沼から指導を受けて、昭和57年(1982)に保存会を作り、地区の子供に教えるようになった。

浜横沢小学校(平成21年(2009)閉校)では4~6年生に指導をしていた。

大・小の太鼓と笛で構成。鉦が入った時もあった。

【演目】

とお通り、おいとこ、けんばや剣囃し、四候桜、とら獅矢車囃し、まい虎舞

【上演】

室根芸能発表会(11月)、東磐井地区芸能発表会(3



保存会提供

月)、室根大祭太鼓フェスティバル(10月)

※昔は屋台を組んで町内を回っていた。

【保存会】

浜横沢地区の子供有志(3歳~高校生7人)と大人2人。

★もとしゆく本宿ばやし

本宿ばやし

室根町津谷川

★現在は休止中

【由来と芸能の特徴 構成】

戦前は9月15日に陸塩神社(室根町津谷川)のお祭りがあり、手踊りと太鼓の打ちばやしを出していた。

平成頃までは2月の防火祭(1、5日のまちの日(津谷川での市の日)の初午の日)に出ていた。青年団の男女(40歳代前後)が主となり活動したが、昭和40年

(1965)頃には子供も参加していた。太鼓は折壁の寺や神社から借りてきて使った。

【演目】

わたり、軒ばやし、おいとこ、虎舞、かっこー

[踊り] がんじん、からかさがんじん、びっきはてんぶり

⑤ 藤沢ばやし

藤沢ばやし保存会

藤沢町砂子田字上山

【由来と芸能の特徴 構成】

昭和53年(1978)活動が継続できなくなった砂子田神楽の藤沢31区の神楽衆が地区に相談したところ、別の芸能で地域を盛り上げようと提案され、20~50歳代の青年たち20余人が室根村(現室根町)津谷川の畠山幸紀氏から打ちばやしを習い、藤沢ばやし愛好会として活動を始めた。

昭和58年(1983)に始まった「藤沢町子ども郷土芸能発表会」出場のために31区の子供会が室根村(現室根町)矢越の小松森夫氏から指導を受けて出演した。この活動を31区自治会青年部が保存会として支えている。

平成15年(2003)からは30区の子供会を加え、平成26年から34、35区も加わり、新沼小学校区域の子供会行事として継続している。



【演目】

道中ばやし、おいとこばやし、剣ばやし、虎舞ばやし、運連舞、獅子矢車、二度囃子

※虎舞ばやしで虎が舞う。虎には大人が入る。

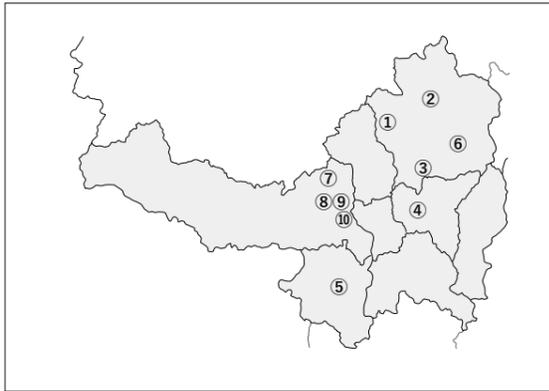
【上演】

藤沢町子ども郷土芸能発表会(1月)

【保存会】

30~35区の園児、小学生20人ほど。指導者と虎役の自治会青年部員、世話役などは31区が中心。

6. さまざまな民俗芸能・行事



山伏神楽

① 峠山伏神楽 (大償野口斎部流)

猿沢峠山伏神楽

大東町猿沢字大町裏
市指定無形民俗文化財

【由来と芸能の特徴 構成】

天保6年(1835)の飢饉で大償神楽組が道具一切を持って和賀郡東和町東晴山(現花巻市東和町)に移り住み、天保9年頃まで留まって伝えたのが晴山神楽といわれ、これが鴨沢(現奥州市江刺広瀬)と猿沢の峠に伝わっている。早池峰系山伏神楽の南限になる。

古老の伝えるところでは当時金山の興隆にともない、他地方から人夫が集まり、賭博がはやるなど風紀が乱れていた。それを憂い、健全な娯楽として晴山の神楽師匠横川瀬平氏のもとに通い、習得して青年たちに伝えたという。文久4年(1864)の神楽本が伝わっている。

胴取り(太鼓)、鉦、笛、舞手、言い立て、で構成。



【演目】

鶏舞、三番叟、翁、四弓、しめ切り、勢剣、笹分け、天女、機織、鐘巻、天王、権現舞

【上演】

峠自治会運動会御祈祷(6月)、猿沢神社例祭(10月)、年祝い・自治会新年会・どんと祭(1月)、いわい地方民俗芸能祭(3月)、大東町民俗芸能発表会(12月)

【保存会】

30人(子供、女性を含む)

山伏神楽権現舞

② 前畑権現舞

[別称: 権現様、まいおどり]

前畑神友会

大東町鳥海字向前畑

【由来と芸能の特徴 構成】

大正生まれの人たちが昭和期に丑石の伊東さかり氏に権現舞を習って始め、正月に前畑地区内を回っていた。その人たちに昭和中頃に2代目が習い、現在は3代目になっている。

途中で下舞は省いていたが、地元の民俗芸能研究者、村上護朗氏に指導されて丑石から習い直して復活させた。

構成は、笛と太鼓、擦り鉦、舞手。権現様の頭につける紙垂は毎回作る。

【演目】

下舞、南部大権現(権現舞)



【上演】

地区の新年懇話会(1月)

【保存会】

9人(30~70歳代の男性)

※以前は別当家(伊東家)の庭、現在は前畑コミュニティセンターで練習する。

さんさ踊り

③ 長者さんさ踊り

長者自治会

大東町摺沢字北長者

【由来と芸能の特徴 構成】

摺沢八幡神社の秋祭りに参加するため、昭和8年(1933)石鳥谷から師匠を招いて伝承した。摺沢出身で当時石鳥谷に赴任していた警察官の高橋氏が紹介した。現在の菊池巖氏宅を宿にし、有志の男性を中心に女性も加わり、連日練習した。

何度かの中断後、昭和46年(1971)「長者さんさ踊り保存会」が結成され、その後、長者自治会に引き継がれた。昔は祭の日に町中を歩き、庭を借りて披露していた。

県内最南で伝承されている伝統さんさ踊り。

太鼓と笛、踊り手で構成。



【演目】

[伝統さんさ] 第一踊り~第五踊り、合踊り、礼踊り(入退場の行進)盛岡さんさ

【上演】

摺沢秋祭り(9月)、大東町郷土芸能発表会(12月)、イベントなど

【保存会】

25戸(自治会全戸、小学生~高校生男女約10人を含む、30~60歳代男女)

※昔は、男性も踊っていたが、現在は女性が中心。

花相撲

④ 千厩町愛宕花相撲

千厩町愛宕花相撲保存会

千厩町千厩字神ノ田

【由来と芸能の特徴 構成】

千厩町では大正時代から女性たちが相撲の横綱土俵入りや幕内力士の相撲甚句などを披露する女相撲が行われていた。戦後に復活させ、継承している。

平成15年(2003)からは「みちのく千厩赤ちゃん相撲大会」を開催し、披露の場としている。

【演目】

幕内力士土俵入り、三役力士土俵入り、横綱愛宕山土俵入り、相撲甚句、弓取り



保存会提供

【上演】

みちのく千厩赤ちゃん相撲大会(10月)、イベントなど

【保存会】

70人(千厩1-1区、1-2区自治会女性)

大黒舞

⑤ 老松大黒舞

老松大黒舞保存会

花泉町老松字藤田

【由来と芸能の特徴 構成】

大正末生まれの佐野原の小野寺弘氏が山形から来た竈屋から習って踊っていた。平成14年(2002)に佐野原自治会で婦人部に指導され、「おらほの伝承芸能事業」として老松地区の市民センターでの活動になった。

昭和62年(1987)から小野寺氏らが老松小学校に指導していたのを保存会が引き継いでいる。

【演目】

市販の「山形大黒舞」のテープの歌に合わせて踊る。

1番、2番、間奏のそれぞれに踊りがある。



【上演】

老松小学校運動会(5月)、御嶽山神社例祭(10月)

【保存会】

16人(60~80歳代、女性が主)

馬子唄

⑥ 大原馬子節

大原馬子節保存会

大東町大原字和野

【由来と芸能の特徴 構成】

4年ごとの大原八幡神社例祭の神輿渡御の先陣行列に加わる。

4つの「祭り区」が馬子節、伊勢神楽、大名行列などを持ちまわっていたが、祭りの中断後、平成20年(2009)に復活したときに新山地区が永続的に馬子節を担当することになった。

馬を飾り、馬方6人が浴衣に手ぬぐいのほうかむりで馬の手綱を左右に取り、馬子歌を唄う。左前の人が歌い出し。

【演目】

唄1~12番



保存会提供

※昔は宿から歌い始めていたが、現在は自治会館から歌う。役場の前では役場の歌を歌い、所望と旦那様はご祝儀をもらう家などで歌う。

【上演】

大原八幡神社例祭(9月、4年ごと)

【保存会】

16人(新山地区の男性)

鉦太鼓念仏

⑦ 舞草鉦太鼓念仏

舞草鉦太鼓念仏保存会

舞川字梅木

【由来と芸能の特徴 構成】

「奥州合戦で死者は北上川に投げられ、舞草の地には屍が重なり、首川原ができていた。日夜、亡霊がさまよい旅人は恐れて通れなかったが、たまたま通りかかった畠山重忠が、守護神である薬師如来を祀り、南無阿弥陀仏と唱えたところ次第に亡霊が成仏した。これがその念仏の始まり。」と伝え、また日向屋敷の惣太郎が鉦、笛、太鼓、舞踊を振付け、「惣太念仏」といわれ舞草地区に広がり、供養の行事としてきたという。文久3年(1863)から称名師を引き継ぐ文書があり、現在は9代目。

舞草の舞川1区が伝承しているが、平成中頃から2区からも参加している。

称名と笛、側(鉦とささら)は、大人の男性。女兒が浴衣に花笠をかぶり、打敷で顔を隠して太鼓を打ちながら踊る。墓では花笠はかぶらない。



【演目】

墓念仏、門褒め念仏、礼念仏、寺褒め念仏、河灯籠念仏(川での死者用)、舟場念仏、施餓鬼念仏、散念仏、七つ子散(盆供養では、墓念仏と門褒め念仏)

【上演】

毎年8月15日

※舞川1区から9区までの初盆の家から依頼を受ける。午前中は各家を回り、午後に墓地に行く。

【保存会】

約10人(30~70歳代男性と小・中学生の女子)

※昔は太鼓は小学生女兒だった。

念仏

⑧ 鉦念仏(舞川12区)

[別称:かねっこ念仏]

鉦念仏保存会(舞川12区)

舞川字番台

【由来と芸能の特徴 構成】

舞川河岸の熊谷たけこ氏(昭和初め頃生まれ)が昭和30年(1955)頃に12区に嫁ぎ、近所の仲のよい女性を誘って始めた。

河岸では、かねっこ念仏といい年配の女性たちが盆に観福寺や山根の墓地、家などを回っていたというが、昭和50年代以降は途絶えている。

浴衣を着て笠を被り、鉦を持つ。持ち物はそれぞれ自分で用意し、保管している。

【演目】

墓念仏①道志ばの、②いにしへの、③ぬるるとも、④枯がらしの、⑤こそたてし、⑥七月の、⑦七七の、⑧七月は、⑨からかさの

回向、いはええこ(家の仏壇で)、いはえ念仏(①泣人の、②ぬるるとも、③人たびは)



佐藤一伯氏提供

ほかに川念仏(水難や水の事故で亡くなった人へ)、庭褒めなどがある。

※通常は墓念仏の①～③と回向

【上演】

8月15日

※下相川(12、13、15区付近)などの初盆に呼ばれて常川寺の墓や旧墓などで念仏を唱える。昔は夕方からだったが、現在は午後早くから始めている。

【保存会】

3人(12区の60～80歳代女性)

念仏

⑨ 鉦念仏(舞川14区)

[別称:わさん念仏]

鉦念仏保存会(舞川14区)

舞川字外大久保

【由来と芸能の特徴 構成】

昔から地区の女性で伝承してきた。「南無阿弥陀仏」と書かれた旗を持つ。

浴衣は各自のものを着用し、笠や鉦は前の人から譲られたものを各自持つ。

【演目】

お念仏①みずしばの、②こそまでは、③からくさの、④えにし、⑤十七を、⑥こそだてし、⑦香のけむり、⑧七月は、⑨しつしつは、⑩こよしさに、⑪月なみの、⑫なむになむあみ、⑬荒き風にも

※通常は①～④と回向。途中で焼香する。



佐藤一伯氏提供

※⑦⑫⑬はうたいあげ(歌い出し)をせずに念仏。子供の場合は⑫、幼い子供は⑬、若い人は⑤などそれぞれの歌がある。

【上演】

8月15日午後

【保存会】

4人(地区の有志の女性60～70歳代)

念仏

⑩ 鉦念仏(舞川17区)

[別称:かねっこ念仏]

鉦念仏保存会(舞川17区)

舞川字中島

【由来と芸能の特徴 構成】

天保13年(1842)からという。

現在の代表の実家が「宿」であった。脚絆や笠などを置いてあり、7日から夜に練習を始めていた。祖母が嫁である母に教え、母から伝えられた。昭和40年(1965)頃は、主に17区の30代の女性10人くらいが参加していた。

女性の講だが、念仏が好きな男性と一緒に回ったりお世話役をしたりすることもある。

浴衣(各自のもの)、白足袋、わらじ、こて(手甲)をつけ、すげ笠、扇、鉦を持つ。

【演目】

黒門、六地藏、十主堂、大門、前庭、墓念仏など13種



佐藤一伯氏提供

類があったが、現在は一部のみ伝承。また門口褒め、玄関褒め、ご馳走の礼、酒の礼などもあったが、伝承されていない。

【上演】

8月15日に舞川16区～18区の新盆の家などの墓を例年12、3軒を回る。

昔は暗くなってから回っていたが現在は午後早くから回る。また昔は家にも上がっていた。

【保存会】

3人(50～70歳代女性)

7. 南部神楽 —なんぶかぐら—

	地域	芸能の名称	保持団体名称 (保存会結成○)	代表者住所	芸能の伝承 の時期	由来、創始、経緯	上演可能演目
①	一関	沢田神楽	中里鶏舞踊り隊	山目町	平成 26 年 (2014)	沢田神楽から指導を受けた中里中学校の鶏舞を閉校を機に継承。定期的中里市民センターで練習を重ねている。	鶏舞
②	一関	牧澤神楽	牧澤神楽○	真柴字 鴻ノ巣	明治 42 年 (1909)	八幡神社へ奉納のために板倉神楽の菅原貞四郎氏、菅原惺氏、高橋衛氏から伝授。昭和 60 年頃途絶え、平成 14 年庭元の家族と友人で再興。	三番叟、神分かれ、岩戸入、岩戸開、御室焼き、彦炎出見命、宝剣納め、羽衣、石童丸、敦盛妻別れ、法童丸親子名乗、葛葉物語、葛ノ葉子別、東下り、法掛け、五條ノ橋千人切
③	一関	一関夫婦神楽	一関夫婦神楽	巖美町字 沖野々	昭和 50 年 (1975)	近所の夫婦で仲間同士の楽しみのために、瑞山国首神楽の小岩孝太郎氏から指導を受け始めた。	東下り、五條の橋、二度対面、宝剣納め、羽衣、屋島合戦、彦火出見尊
④	一関	本寺地区神楽	本寺地区神楽	銅谷町	平成 30 年 (2018)	本寺神楽、瑞山国首神楽、小猪岡神楽を合わせて創作した本寺中学校神楽を、閉校を機に卒業生らが継承。	鶏舞
⑤	一関	達古袋神楽	達古袋神楽○	萩荘字 上要害	江戸末期	弘化年間頃、八幡山常学院の修験の法印神楽を伝承したという。明治 5 年からの名簿を保有。	鶏舞、三番叟、岩戸入、岩戸開、瓊瓊杵尊、彦炎出見尊、羽衣、田村二代、安部保名、屋島合戦、一の谷、五條の橋、弁慶安宅関、牛若丸・秀衡公二度対面の場、宝剣納め
⑥	一関	古内神楽	古内神楽保存会	萩荘字 野手倍	江戸末期	弘化年間には下黒沢神楽から南部神楽を伝授。現在、若い世代が加わり、継承を図っている。	鶏舞、三番叟、岩戸入、神別れ田村二代、五條の橋、屋島合戦、宝剣納め、秀衡対面
⑦	一関	南沢神楽	南沢神楽保存会 ○	萩荘字 南沢	昭和 15 年 (1940)	萩荘市野々本郷神楽千葉秀雄氏から伝承。平成元年から休止するが、11 年に地区青年団「南星会」が継承し、そこに女性が加わり、活発な活動になった。	鶏舞、三番叟、岩戸入神談、岩戸開祝詞、魔王退治、五大額、宝剣納め・盗み取り・奪い返し、信田ヶ森、屋島合戦、安宅の関
⑧	一関	市野々神楽	市野々神楽 同好会	萩荘字 芦ノ口	昭和 51 年 (1976)	イベント出演のために「読書会」メンバーに南沢神楽保存会会員が指導して始まった。現在は子供への指導を行っている。	鶏舞
⑨	一関	蓬田神楽	蓬田神楽保存会 ○	舞川字 竜ヶ沢	明治 25 年 (1892) 頃	法印神楽を伝授した初代が、隣接する赤伏神楽を取り入れ、創設。昭和 50 年代の廃絶の危機に地区の青年団が加わり、継承を支えた。	三番叟、天の岩戸入り、岩戸開き、瓊瓊杵尊、地神四代の帝彦火炎手見之尊、豊玉姫之尊の産小屋、龍宮出現、三熊大神退治、五大龍、羽衣、叢雲、宝剣納め、一ノ谷、黒塚、八俣の大蛇退治、田村將軍利春、二代田村中将利通、三代田村將軍純友、橋弁慶
⑩	一関	富沢神楽	富沢神楽保存会 ○ (地区全戸参加)	弥栄字 運南田	明治中期	飯倉神楽小野寺忠七氏から伝授。大正初期に途絶え、昭和 3 年再興するが再度途切れ、昭和 50 年に地区の協力を得て再興。	鶏舞、三番叟、岩戸入、岩戸開、おろち退治、国授、宝剣納め、義経物語、信田ヶ森、扇の的
⑪	花泉	永井神楽	永井地区郷土 芸能伝承保存会	花泉町永井 字新田	昭和 42 年 (1967)	永井白崖の千葉勇氏の指導を受けて設立した永井神楽が小学校へ指導していた鶏舞を継承。地区住民の支援を得ながら鶏舞教室を市民センターで開催している。	鶏舞
⑫	花泉	白浜神楽	白浜神楽会	花泉町涌津 字台	昭和 45 年 (1970)	栗原神楽佐藤佐吉氏に指導を受けて創設。昭和 50 年代には大門神楽から伝授。地区を越えて花泉町内の他神楽経験者たちが参加している。	鳥舞、翁舞、三番叟、岩戸開、岩戸入、彦火出見尊、手玉織、宝剣納め、大蛇退治、神分舞、高間登り、三熊大人、羽衣、作耕舞、天孫天下り、三熊神話、一ノ谷、義経一代記、葛葉物語、曾我物語、楠木一代記、田村三代記、小敦盛記、道化(棒しばり、いな切り、神楽見物、関所破り)
⑬	花泉	奈良坂神楽 鶏舞	奈良坂神楽鶏舞 クラブ	花泉町花泉 字坂下前	昭和 20 年代 後半	武鎗神楽(現宮城県栗原市)を継承した奈良坂神楽が花泉小学校へ鶏舞を指導。それを引き継いで指導を継承している。	鶏舞

地域との関わり	・学校への指導(統合前校を含む) ・地域の子供指導 []: 過去の実績	神社奉納など []: 過去の奉納	主な例年の出場大会等	文化財指定
中里夏まつり(8月)、中里地区敬老会(9月)、中里地区民文化祭(11月)に出演	・中里小学校へ指導(平成 26 年～) ・地域の子供へ指導	稲荷神社恵美須講秋祭り(10月)[愛宕神社奉納(平成 26 年)]		
施設慰問(9月・11月)など	・滝沢小学校(平成 14 年～)、一関東中学校(昭和 38 年～) ・真滝 12 区の子供に指導	八幡神社例祭(9月)、配志和神社例祭(11月)	一関民俗芸能祭(3月)、岩手県南宮城県北神楽大会(5月)、東北神楽大会(9月)、宮城岩手選抜神楽大会(9月)	市指定無形民俗文化財(平成 28 年) 阿部繁雄氏、市無形民俗文化財芸能保持者(昭和 51 年、56 年解除)
巖美地区文化祭(11月)、巖美道の駅イベント(6月)、施設訪問(10月)、喜寿祝い、結婚式余興などで上演		温泉神社例祭(5月)、中里照井神社例祭(9月)、温泉神社例祭(10月)	一関市民俗芸能祭(3月)、岩手県南宮城県北神楽大会(5月)、東北神楽大会(9月)、農業祭(10月)	
本寺地区などのイベントに多数出演				
達古袋地区合同運動会(5月)、達古袋盆踊り(8月)などで上演	・巖美中学校(平成 15 年～)[達古袋小学校(～平成 20 年)] ・[達古袋子ども鶏舞保存会を指導]	知勝院(2月)、八幡神社例祭巡行に供奉(5月)、平泉熊野神社例祭(9月)、三関神社祭り(9月)、鶯沢八幡秋祭り(9月)	南部神楽伝承推進連絡協議会延年閣公演(1～12月)、石越神楽大会(2月)、一関民俗芸能祭(3月)、岩手県南宮城県北神楽大会(5月)、石越神楽大会(6月)、東北神楽大会(9月)	市指定無形民俗文化財(平成 28 年) 阿部長治氏、市無形民俗文化財芸能保持者指定(昭和 51 年、56 年解除)
地区公民館上演会を開催、萩荘祭(11月)に出演	・会員の子供が参加	[春日神社奉納(昭和 50 年頃迄)]	一関民俗芸能祭(3月)	「蛇面」市指定有形民俗文化財(昭和 48 年)所蔵
萩荘地区いきいき交流フェスティバル(3月)、南沢交流ツアー(11月)、萩荘祭(11月)、里芋オーナー祭(11月)で上演		田村神社例祭(4月)、山神社例祭(9月)、平泉熊野神社三社例祭(9月)、稲荷神社例祭(9月)、吾勝神社奉納(不定期)	一関民俗芸能祭(3月)、岩手県南宮城県北神楽大会(5月)、東北神楽大会(9月)	市指定無形民俗文化財(平成 28 年)
敬老会(9月)で上演	・萩荘小学校(昭和 45 年～)、萩荘中学校(昭和 44 年～) ・「自鏡っこクラブ」指導	[吾勝神社(昭和 50 年代)]	一関夏まつり(8月)、藤原まつり(5, 11月)	
施設慰問(11月)	・舞草小(昭和 60 年～)	舞草神社例祭(4月)、配志和神社例祭(5月)、大威徳天満宮例祭(9月)、笹谷稲荷神社例祭(9月)、萩荘駒形根神社例祭(10月)	一関民俗芸能祭(3月)、宮城岩手選抜神楽大会(9月)	市指定無形民俗文化財(平成 28 年) 蓬田稔氏、市無形民俗文化財保存技術保持者指定(平成 11 年)
弥栄地区いやさか祭り(10月)出演、施設慰問(8・11・2月)	・弥栄小学校(昭和 60 年～)、一関東中学校(昭和 50 年代～) ・地区の子供を指導	田村神社例祭(4月)、八幡神社例祭(9月)、檀原神社例祭(10月)、月館神社例祭(10月)、蚕養神社例祭(11月)	南部神楽伝承推進連絡協議会 延年閣公演(1～12月)、一関民俗芸能祭(3月)、岩手県南宮城県北神楽大会(5月)、石越神楽大会(6月)、みちのく神楽大会(7月)、東北神楽大会(9月)、宮城岩手選抜神楽大会(9月)	市指定無形民俗文化財(平成 28 年)
	・永井小学校(昭和 60 年～)			
施設慰問(9・12月)	・涌津小学校(昭和 50 年頃～)	御嶽神明社例祭(4月)、日枝神社(9月)、八雲神社(9月)、涌津八幡神社(9月)、日吉神社(10月)、平野神社(10月)、古峰神社(10月)、高倉神社(11月)	岩手県南宮城県北神楽大会(5月)、一迫あやめ祭り(7月)、宮城岩手選抜神楽大会(9月)、JAまつり(11月)	
	・花泉小学校(昭和 46 年～)			

	地域	芸能の名称	保持団体名称 (保存会結成○)	代表者住所	芸能の伝承 の時期	由来、創始、経緯	上演可能演目
⑭	大東	天狗田代々 神楽	天狗田代々神楽 保存会○	大東町沖田 字大平	大正期	田河津高金神楽の佐藤金治郎氏などから伝授。戦後中断し、昭和59年復興、その後も中断、復興する中で神社奉納は継続している。	羽衣、三番叟、天の岩戸開き
⑮	大東	瀬台野流 市之通神楽	瀬台野流市之通 神楽保存会○	大東町鳥海 字市之通	大正6年 (1917)	田原村(現奥州市江刺)の川内神楽を伝授。神社奉納などを続けてきた。	御神楽舞、山ノ神舞、三葉舞、八幡舞、道引舞、岩戸開舞(くずし舞付)、日光権現、一ノ谷嫩軍記
⑯	大東	京津畑神楽	京津畑神楽 保存会○ (地区全戸参加)	大東町中川 根岸	明治35年 (1902)頃	田河津高金神楽の佐藤金治郎氏が2年間滞在して教授。昭和30年頃からは活発な活動ができずにいたが、平成元年に地区が支援して復興。地域づくりの中に神楽を位置づけている。	鶏舞、岩戸開き、羽衣、牛若丸(橋弁慶)
⑰	千厩	愛宕神楽	愛宕神楽保存会 ○(後援会あり)	千厩町千厩 字町浦	昭和48年 (1973)	愛宕神社奉納のため、地区の有志が増沢神楽(藤沢町)、熊田倉神楽(千厩町)の指導を受けて始める。	白露、祝詞、鳥舞、三熊退治、蘇民将来、大蛇斬、日本武之命、高山掃部長者物語、信田ケ森、天ノ岩戸開、西ノ宮大神、魔民退治、三番叟、五大領四節分、日光権現、女舞
⑱	千厩	奥玉神楽	奥玉神楽 同好会	千厩町奥玉 字入山沢	明治14年 (1881)	瑞山より神楽を伝授し、祭りで披露してきた。昭和48年に同好会を結成して地区での奉納や発表を続けている。	鶏舞、信田森、大蛇退治、天の岩戸開
⑲	千厩	濁沼神楽鶏舞	新浪鶏舞 保存会	千厩町磐清 水字古館	平成7年 (1995)	明治5年頃に赤荻の高橋氏を招いて濁沼神楽が創設される。新浪神社の巫女舞を舞っていた女性たちが濁沼神楽から鶏舞を伝承し、小学生とともに新浪神社例祭で奉納を続ける。	鶏舞
⑳	東山	夏山神楽	夏山神楽保存会 ○	東山町田河 津字夏山	大正10年 (1921)	東山町の竹沢神楽千葉勇之進氏の弟子、高橋寅之助氏が夏山・横沢の若者に伝授。しばらく休止していたが、令和元年、地区の奉納演芸会出演を機に地区の女性の参加を得て活動を再開。定期的に夏山集会所で練習。	御神楽(鶏舞)、岩戸開き、一の谷、弁慶、安宅の関、広胤、葛の葉 ※現在は御神楽のみ
㉑	東山	南部神楽 東山鶏舞	南部神楽東山 保存会○	東山町長坂	平成29年 (2017)	佐藤金治郎氏に指導を受けた大木青年倶楽部会が大正2年に大木神楽を開始。近年、活動を休止していたが、平成29年から子供などへ鶏舞を指導し継承を図っている。	鶏舞
㉒	川崎	布佐神楽	布佐神楽保存会 ○ (地区全戸参加)	川崎町門崎 字布佐	文久3年 (1863)	相川村(現舞川)の法印神楽を伝授し、また明治期には松川の法印神楽を習得するなどした。地元神社奉納と地域での発表会を続けている。	三番叟、御神楽、岩戸開、三宝荒神、所望分神語、水神明神、魔王神語、御室焼、五矢神語、黒塚、羽衣、叢雲神語、屋嶋の合戦、小袖曾我、一ノ谷の合戦、玉織姫子捨ての場、法童丸母との対面、法童丸父との対面、楠公、げんべはり
㉓	藤沢	黄海神楽	黄海神楽保存会 ○	藤沢町黄海 字天提	戦前	現花泉町金沢の飯倉神楽を伝授した千葉猛氏が始めた。幾度かの中断を経たが、地域の女性の参加を得て平成22年から活動を再開。現在、白浜神楽の指導を受けるなどしている。	鶏舞
㉔	藤沢	本郷神楽	本郷神楽保存会 ○	藤沢町藤沢 字八沢	明治中期か	瑞山神楽を伝授した保呂羽神楽の佐藤留五郎氏が設立。葉山神社に奉納する神楽として伝えてきた。定期的な練習を重ね、式舞などの演目の伝承を図っている。	翁舞、参番叟、御神楽、西雲、八幡舞、山之神舞、明神舞、勇伝之部、天下里之部、参宝荒神、水神明神、天之叢雲宝剣由来記、日本武之尊草薙之宝剣奉納、玉取り姫、岩戸開、信田森、高山掃部長者、羽衣
㉕	藤沢	増沢神楽	増沢神楽保存会 ○	藤沢町増沢 字畑沢	明治42年 (1909)	千厩町清田熊田倉の千葉義美氏と矢越村深持の岩淵重次郎氏から指導を受けて立石神社の奉納神楽として始まる。地区の世帯が協力して保存会を作り、自治会館で練習を重ねている。	鶏舞、三番叟、岩戸開、四節分、信田森、高山掃部長者、竜神舞、日光権現、天之雲神話、蘇民将来、羽衣
㉖	藤沢	下大籠南部 神楽	下大籠南部神楽 保存会○	藤沢町大籠 字奈良原	昭和8年 (1933)	栗原郡金成から来た佐藤清人氏から神明社に奉納する神楽を習得。神社奉納とその後の自治会館での上演会を続けてきている。	のりと、白露、神楽由来、三番叟、岩戸開、蛭児の尊、牛若丸、一東の宝剣、屋嶋合戦、宝剣たばかり、三熊退治、水神舞、天孫降臨、大蛇退治、宝剣納め、羽衣、日光権現、田村三代記、竹生島、楠公父子の別れ、信田森

地域との関わり	・学校への指導(統合前校を含む) ・地域の子供指導 []:過去の実績	神社奉納など []:過去の奉納	主な例年の出場大会等	文化財指定
地区公民館での収穫祭(11月)での上演	・天狗田小学校への指導(～平成18年) ・地域の子供に指導	天狗田神社例祭(4月) [神楽殿での上演]		
地区行事で上演	[平成10年頃小中学生に指導]	興田神社例祭(10月)		
興田市民センターチャリティ、京津畑祭り(11月)、「山がっこ」イベントなど	・[京津畑小学校(～平成18年)] ・国学院大学との交流事業 ・会員の子供が参加している	荒川神社例祭(4月)、日月神社例祭(7月)、旭岡神社例祭(10月)	大東町芸術祭郷土芸能発表会(12月)	
平成10年まで20回にわたり「東磐井郡下神楽大会」を開催していた。	—	秋葉神社例祭(8月)、愛宕神社例祭に神楽殿で上演(8月)		
奥玉民芸大会(11月)	—	八坂神社例祭(7月)		
	・[磐清水小学校(～平成30年)]	新浪神社例祭(11月)		
過去には新築や厄年の祝いにも呼ばれていた。	・[田河津小学校へ指導(～平成26年)]	・田河津山神社例祭(10月) [羽黒大権現例祭]	東山町文化祭(11月)	
唐梅館絵巻(9月)ほか地域イベントへ出演			子ども文化祭(1月)、東山町文化祭(11月)	
布佐神楽発表会(4月)、川崎町文化祭(11月)	・川崎小学校(昭和50年頃～) ・地域の子供へ指導(昭和47年～)	伊吹神社(4・9月)、熊野神社例祭(4・10月)	いわい地方民俗芸能祭(11月)	岩手県指定無形民俗文化財(平成25年)
黄海公民館芸能発表会(11月)	[黄海小学校(～平成18年)]			
地区敬老会(10月)	・地域の子供を指導	藤勢寺例祭(4月)、葉山神社例祭に神楽殿で上演(9月)、保呂羽神社例祭(10月)	藤沢町子ども郷土芸能発表会(1月)、JA農業祭(11月)	市指定無形民俗文化財(平成28年)
施設慰問など	・新沼小学校(昭和50年頃～) ・地域の子供を指導	吉祥寺観音講(4月) [立石神社(～平成元年)]	藤沢町子ども郷土芸能発表会(1月)、JA農業祭(11月)	市指定無形民俗文化財(平成28年)
千松自治会館上演会(10月)	・[大籠小学校(～平成21年)] ・地域の子供へ指導※平成31年から休止中	神明社例祭(10月)	藤沢町子ども郷土芸能発表会(1月)※平成31年から休止中	市指定無形民俗文化財(平成28年)



Ⅲ 民俗芸能の環境

祭礼における民俗芸能の奉納

神社名	地区	住 所	例祭等	奉納	神賑行事	神輿に芸能供奉、門付け	備考
榎原神社	一関	赤荻字清水	例祭(10月)		南部神楽		
駒形根神社	一関	萩荘箱清水	例祭(10月)		南部神楽 (2演目程度)		
温泉神社	一関	厳美町五串 字滝の上	例祭(5月)	鶏舞			過去には神楽殿で神楽大会。若手県南宮城県北神楽大会へと発展。
吾勝神社	一関	萩荘字芦の口	例祭(4月)		南部神楽を招くことも		
八幡神社	一関	釣山	例祭(9月)	鶏舞、ハモニカ演奏			
天満社	花泉	花泉字東鹿野	例祭(10月)		3行政区持ち回りで演芸会		
八幡神社	花泉	金沢大柳	例祭(9月)		大名行列、宵宮に南部神楽		
御嶽山御嶽神明社	花泉	老松字水沢 屋敷	例祭(旧3月)、(旧9月)大護摩祈禱火渡祭	朝日舞	春:南部神楽(神前舞台) 秋:大黒舞		
八幡神社	花泉	涌津字館	例祭(9月)	鶏舞	参集殿で南部神楽		※令和元年から中止
日吉神社	花泉	涌津二ツ壇	例祭(10月)		南部神楽		
白山姫神社	花泉	油島字鴻ノ巣	例祭(10月)			神輿渡御に獅子頭供奉	
高倉神社	花泉	永井字粒乱田	例祭(11月)		南部神楽		
興田神社	大東	鳥海字小山	例祭(9月)	鶏舞		神輿渡御に南部神楽、権現舞が供奉	
熊野神社	大東	曾慶西之沢	例祭(9月)		神楽殿で各自治会が舞踊や民謡		戦前は山車が巡行。昭和期は神楽殿で神楽奉納、境内地で子供の鶏舞奉納など。
八幡神社	大東	摺沢字八幡前	例祭(9月)		鹿踊り、さんさ踊り、打ちばやし、大黒舞など		
八幡神社	大東	大原字八幡館	例大祭(9月、4年ごと)	伊勢神楽		神輿渡御に先陣行列、伊勢神楽が供奉	過去には伊勢神楽を各地区が持ち回り。
八幡神社	大東	大原水かけまつり(2月)			打ちばやし、鹿踊り	田植踊り、手踊りなど門付け	
猿沢神社	大東	猿沢字上ノ洞	例祭(10月)	山伏神楽、伊勢神楽		山伏神楽、伊勢神楽、手踊り	全地区が芸能を出す
白幡神社	千厩	小梨字小山	例大祭(4月、4年ごと)		打ちばやし		
松澤神社	千厩	千厩字前田	例大祭(11月、3年ごと)			先陣行列、稚児行列が供奉、町場で花相撲、おいらんど中、夫婦太鼓、ラップdeおいとこ	
八坂神社	千厩	奥玉梨木洞前	例祭(7月)	鶏舞	打ちばやし、宵祭りに南部神楽、踊りなど		過去には打ちばやしの奉納、伊勢神楽の神輿への供奉もあった。
新山神社	千厩	磐清水字新山	例祭(11月)	子供鶏舞			
新浪神社	千厩	磐清水字古館	例祭(11月)	鶏舞	神楽		
熊野神社	東山	長坂町	例祭(11月)	浦安の舞(地域の児童)	仮宮(東山地域交流センター)で浦安の舞		
早間神社	東山	松川字台	例祭(9月)				過去には南部神楽奉納
南流神社	室根	折壁字向山乙	例祭(8月)				過去には仮設舞台で南部神楽。平成初期までは1月に田植踊りを奉納、その後町内を門付け。
熊野神社	川崎	門崎字布佐	例祭(4月、10月)	南部神楽	4月川崎農村研修センターで南部神楽発表会		
神明社	藤沢	大籠下野在家	例祭(10月)	南部神楽	仮設舞台で南部神楽		
葉山神社	藤沢	藤沢葉山	例祭(9月)		神楽殿で南部神楽		
吉祥寺	藤沢	増沢十二木	観音講(4月)		特設舞台で南部神楽		

市内で行われる民俗芸能発表会

名 称(主催)	期日	会 場	出演団体	最近開催会の出演民俗芸能(※市内団体のみ、創作太鼓は含まない)	初 回
藤沢町子ども郷土芸能発表会(市)	1月	藤沢文化センター	藤沢町の民俗芸能団体(子供)	増沢神楽、本郷神楽、徳田田植踊り、藤沢ばやし、黄海源大鶏舞	昭和58年
一関民俗芸能祭(実行委員会)	3月	一関文化センター	一関民俗芸能団体協議会加盟団体	市野々鶏舞(萩荘小)、蓬田神楽、鶏舞(滝沢小)、富沢神楽、古内神楽、牧澤神楽、一関夫婦神楽、小猪岡豊年田植踊り、達古袋神楽、南沢神楽	昭和61年
いわい地方民俗芸能祭(いわい地方芸術文化団体協議会)	3月	持ち回り(平成31年は室根曲ろくふれあいセンター)	いわい地方芸術文化団体協議会加盟団体	峠山伏神楽、白浜神楽、浜横沢打ち囃子、大木鹿踊り、蓬田神楽、布佐神楽、屋中打ち囃子	平成15年
岩手県南宮城県北神楽大会(実行委員会)	4月	厳美中学校体育館	岩手県南、宮城県北の神楽団体	富沢神楽、達古袋神楽、本郷神楽、白浜神楽	昭和46年
奥玉民芸大会(奥玉振興協議会)	11月	千厩維新館	奥玉8自治会と各民俗芸能団体	花貫伊勢神楽、根山打ちばやし、奥玉神楽	昭和38年頃
むろね産業文化祭むろね芸能発表会(実行委員会・市)	11月	室根きらめきパーク	室根芸術文化協会加盟団体	上折壁子供打ち囃子、屋中打ちばやし、浜横沢打ち囃子、中里鶏舞	平成16年
東山文化祭(東山芸術文化協会芸術文化協会)	11月	東山地域交流センター	東山芸術文化協会加盟団体	夏山神楽、東山鶏舞	平成22年
一関地方伝承芸能継承交流会(一関市舞川市民センター)	12月	一関市文化伝承館	市内等の民俗芸能団体(子供など)	東山鶏舞、舞川小学校鹿子躍・鶏舞、上折壁子供打ちばやし、舞草鉦太鼓念仏	平成9年
大東芸術祭郷土芸能発表会(大東芸術文化協会・市)	12月	猿沢伝承交流館	大東芸術文化協会加盟団体	小沼鹿踊り、下猿沢伊勢神楽、長者さんさ、京津畑神楽、泷民伊勢神楽、前畑神友会、丑石鹿踊	昭和55年頃



一関地方伝承芸能継承交流会
平成30年(2018)12月2日



岩手県南宮城県北神楽大会
平成31年(2019)4月29日

民俗芸能を支える道具の相談先

民俗芸能の各団体は、さまざまな道具を自分たちで工夫し、手作りしてきたという一方、専門家によりよい道具を作ってもらい、また修理をしてもらってきたともいう。ここでは、市内で道具の相談ができる店舗を紹介する。

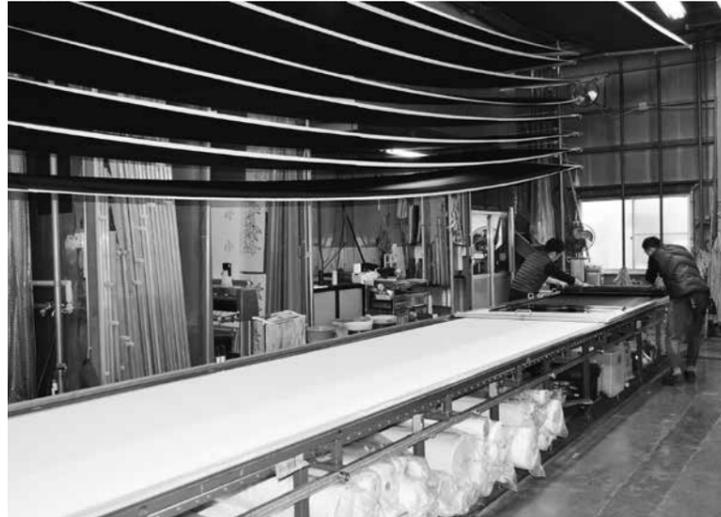
京屋染物店

(大手町7-28 TEL 0191-23-3660)

染物全般を取り扱う。鹿踊りの幕や袴、神楽幕などを扱い、依頼に応じて小物もそろえる。

大正7年(1918)に蜂谷松寿が創業。磐井川を利用して染めを行っていた。

地域での衣装の作り手が減る中、平成26年縫製工場を設立し、技術の伝承に努めている。



尾上屋呉服店

(山目町1-5-38 TEL0191-23-5058)

地域の団体から依頼があり、平成17年(2005)頃から南部神楽用品一式を扱うようになった。衣装や扇子、鶏兜だけでなく、太鼓や音響装置まで取り次ぎ、現在は民俗芸能一般のさまざまな注文に応じている。

袴は、もとは若柳地織(縦縞の綿)だったが、しわになりにくい化繊も含めて扱い、着物生地は昔の柄を全国から取り寄せている。縫い子さんたちを抱え、技術の継承を図っている。



関根太鼓店

(千厩町奥玉字宿下78-2
TEL0191-56-2220)

地域は打ちばやしなど太鼓の需要が多く、昭和24年(1949)、関根清治氏と息子の信一氏が「太鼓屋」を創業。自身も芸能をする信一氏は、神楽面や小道具も引き受け、夫人は衣装を作った。現在3代目。

太鼓の皮なめし、手彫りでの削り抜きなど独自の技術を培い、全国からの注文に応じている。平成29年(2017)からは仙台にも店舗を出している。



小山太鼓店

(室根町字千刈田46-4
TEL0191-64-2056)

大正15年(1926)生まれの小山徳男氏が満州やシベリア抑留中に学んだ技術で昭和24年(1949)創業。三代目が技術を受け継ぎ、長胴太鼓、締め太鼓、ほか依頼に応じて作成している。打ちばやしをはじめ、芸能がさかんな地域であるため、希望に応じて太鼓の作成、また周辺用具にも応じている。



旗や伊藤染工場

(川崎町薄衣字上段25
TEL0191-43-2174)

染物の専門工場。神楽幕、大漁旗、はっぴ、幟など手作業で作成している。

昭和10年(1935)、伊藤銀蔵氏が創業。昔は工場の前に広がっていた砂鉄川で染めの色落としなどを行った。堤防ができた後は川は使えず、井戸水でのり落としなどを行っている。現在は3代目。





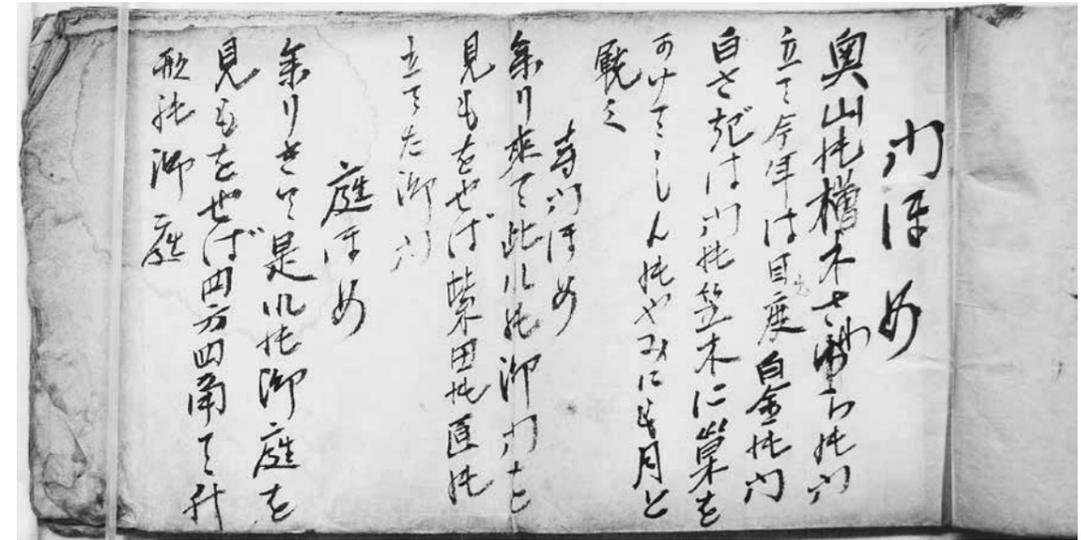
IV 資料編

1. 折壁鹿踊保存会所有文書

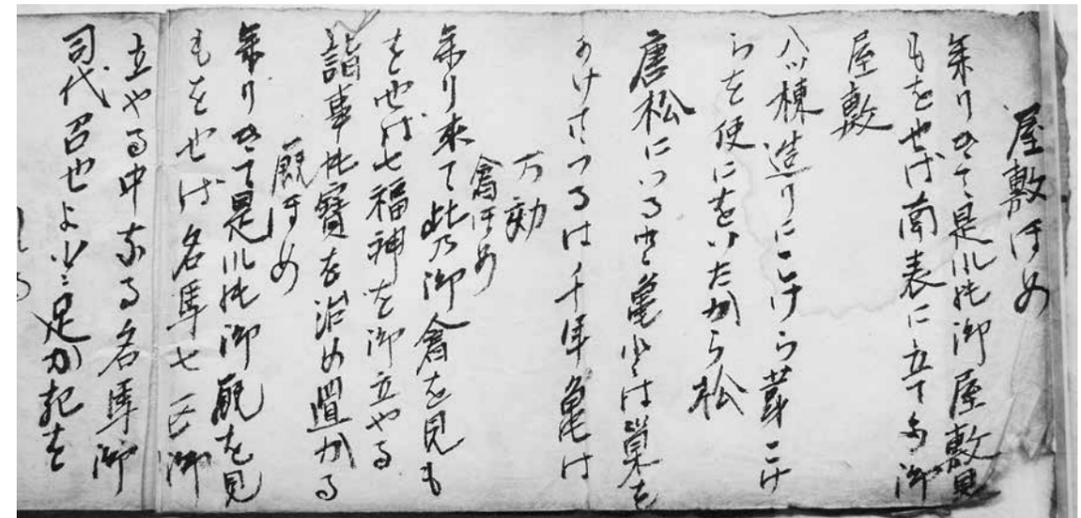
「獅子節」大正九年旧七月 (27 × 14cm)

大正9年(1920)7月に発起し、鈴木徳右衛門、對馬喜代治、世話人に坂本銀太夫が「獅子踊先生」になったこと、当時の連中9人が9年から11年まで踊り、再び昭和3年(1928)より先生を迎えて練習したことが書かれている。

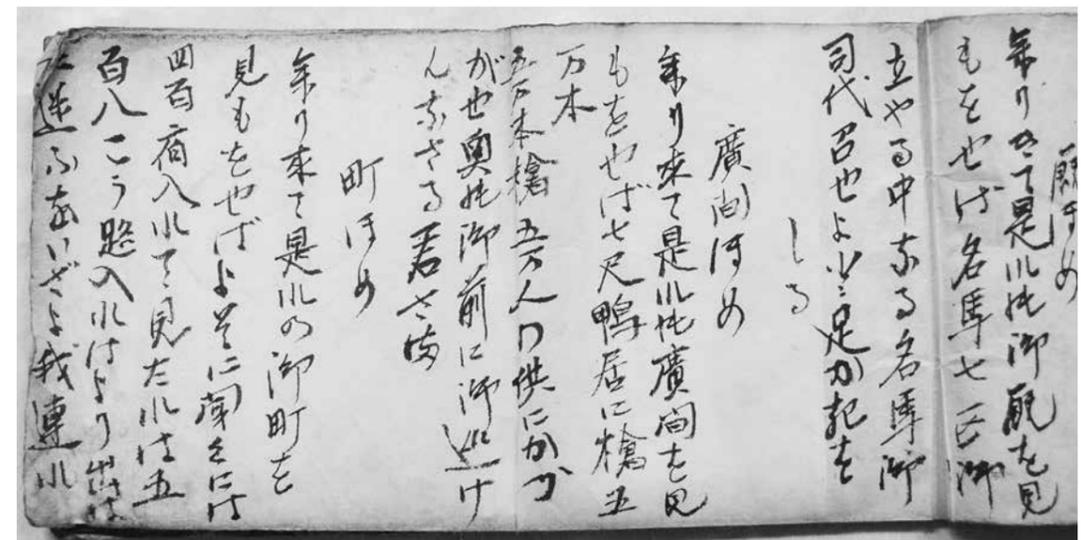
内容は、「門ほめ、寺門ほめ、庭ほめ、屋敷ほめ、倉ほめ、厩ほめ、廣間ほめ、町ほめ、染屋ほめ、札場ほめ、寺ほめ、客敷ほめ、御堂ほめ、墓踊り、祝儀ほめ、外村ほめ、家々あたり、二人狂、鉄砲踊、かかし踊り、二人狂、三人狂、打きり、一人狂打きり、鹿の子唄、引む唄、獅子発唄、とうろほめ、庭まはり、食唄」の歌である。



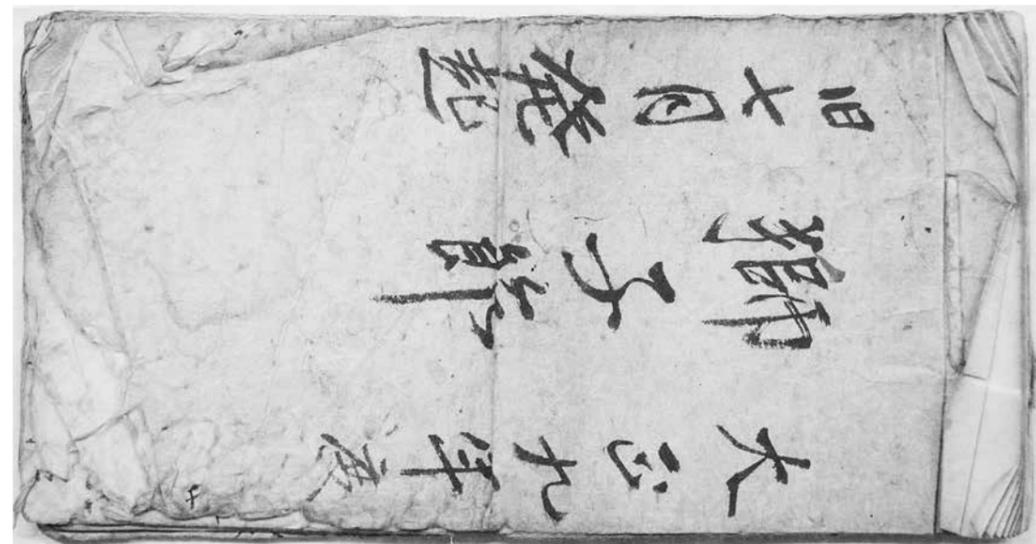
①



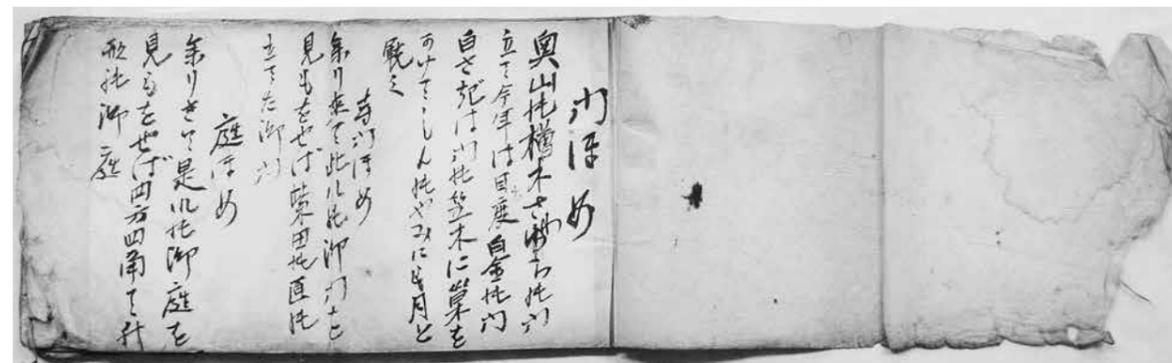
②



③



表紙



1枚目

染屋のり
染師如何なる月日に生
此きて月益日益に色も
染坊のり
札場へのり
けんだん都町地真中に
札立て所市内用の有
は札札
千本松万本小松をふり分
て此此直來たや御寺
見物御寺探古し
花物はけさ衣古したる
妾は御しや有り
客殿へのり
年りきて是此此客殿見
もをせばじうわ茶碗に
伊七て木碗
御堂へのり

④

南無阿彌陀佛
此此岸は都下り花地台
ほそより今年花光す
石米に國を此實をホレ
とて吾等にも下る花之
可す
恐水下らも来に取れて
國を此岸土に下る吾等
土渡の御札
昔より染七御札ある
前之へ札申せりごと吾等
外村へのり
こ此村に歸地先生何る
願之諸事御寺なるを
御せんるす

⑦

年りきて是此此客殿見
もをせばじうわ茶碗に
伊七て木碗
御堂へのり
年りきて是此此御堂見
もをせば地神公神御立
やる御かみて通れり
我外連此
墓跡
年りきて是此此客殿見
もをせば院号軒号大師
大居士千外外に立て置
かる
もをせば今年見多れけり
成る物
寺を此香地煙け細けり
天に登りてむら曇とす

⑤

家之すあり
吾川へは赤ん地連川
連川て諸事御寺なるを
御せんるす
二人控
香山嶋地者にあらるる
ももも縁て世けれは
らりふれり
鉄砲跡
此此里にけりある山立
來て切地康地心とゆ
志
山立ゆも薬もつ記は
下止先可ぬ多るを
ハッ連川
今迄中我連川へも
右へ無心静に遊

⑧

松嶋地岩や岩や暗けれ
もあかり地光下養
天竺地御書は池地味噌
藪を申し下して水
たむける
天竺地分る内池地
此岸を申し下りて米
多むける
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
全
全
南無阿彌陀佛
此此岸は都下り花地台
祝儀へのり

⑥

ハッ連川
今迄中我連川へも
右へ無心静に遊
友達
河見見見ゆるはり
志可志可御油多
亦此て喫て給ふ
今迄中我連川へも
元寧心静に遊友達
二人控
奥地御山山田鹿
心程獅子哉
赤り神は雲地外かに
されて風を便り上る神

⑨

三人控
此此池庭に男身出来ず
獅子男獅子遊び遊遊
天竺地峯々交れり可
る友心静けり左近
春駒は天竺橋にんか
か此て駒は勇ま花門
散り重
打り
海地真中地うそ地木地
島波よりん表んぞ
立つ支
一人控打り
跡者にたどす立てや
白丸

10

放也と川て方らふ
今年小竹は今生へ出来今
若き節も榊ゆめゆめ
一我妻は奥地深山に居ると
け南之使りボサ少文
地さしんぞ
一奥駒戀し中山立つ支
て川をさしし流行駒
り
一御山うら三切習へ御田
方に又も習へ御山三ツ切
一橋切に地木地下地池に
おま鍛冶が可けも在
地をり橋
一白丸山麓八ッ其れを見も
也鹿地ハッ其れ

13

立つ支
一人控打り
跡者にたどす立てや
白丸
白丸は立つかと思げ
立も也才跡をにた志五
や白丸
入丸名
ぞんぞあ
たんぞあ
ざんぞ
おくり
も又
き
東七

11

一白丸山小百合花のほえて
開け咲けて定はふ
一有地娘は羽田より上り七
相斗ハッ相子九ハッ相子
指交地羽田おる
一獅子地つ地竹ハッ香竹川
川にも川節け榊ゆめ
獅子とつけれ川頭をさる
と付けれは三は水舞ゆめ
一うし日け浦のけうえ花は
羽衣を榊へさりに元丸
一天竺地あんか河原にた
るえを娘結い左せり
〇引玉唄
一河しが立赤そ丸赤のり

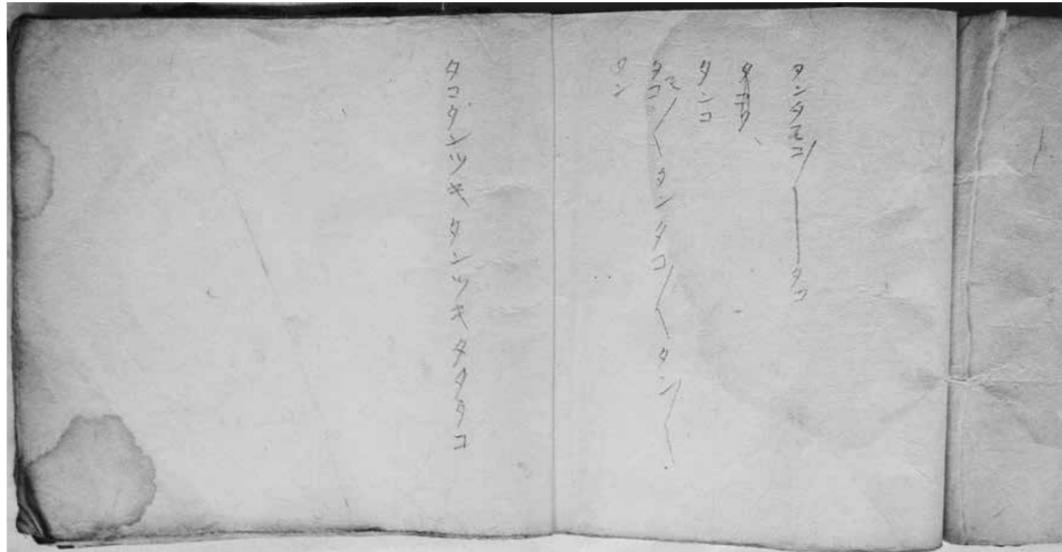
14

藤花子唄
指け枕地下地玉箱開けて
見れは戀地多のれ
此此御瀬戸地花木小鳥門
佐下よ花け散り支
一ホ、中泰山山山雲地見城
本出さ月哉
一朝暮に女節花小花を川
ませて此此御瀬花で靴々
一越によりく、雨けは面高
やつみみ少た古りちもた
りさつ
一奥地御山間し志竹ア
放也と川て方らふ
今年小竹は今生へ出来今
若き節も榊ゆめゆめ

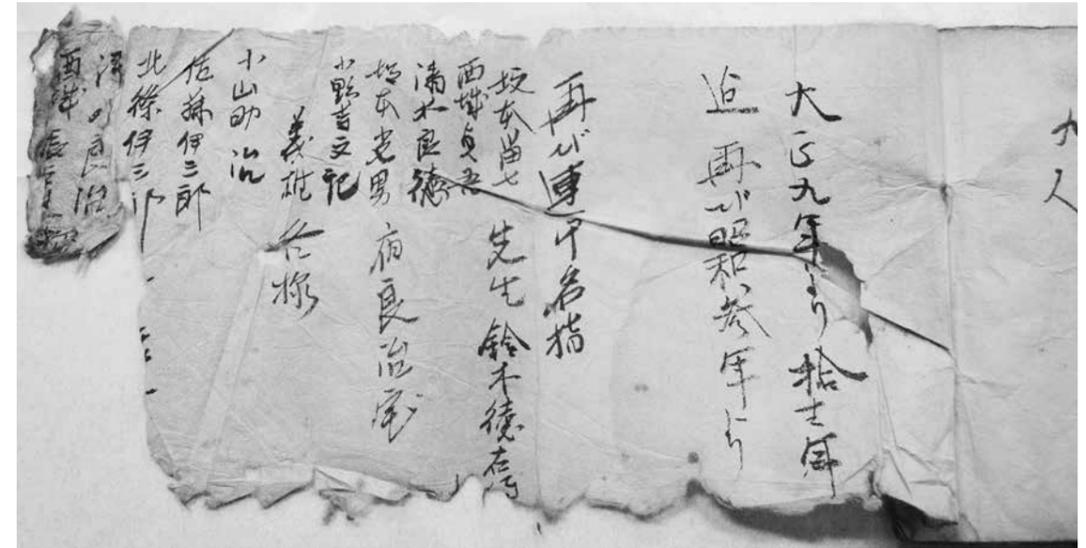
12

〇引玉唄
一河しが立赤そ丸赤のり
おし
一十五夜御月よし河筋
おしお花かか引
一嫁け天竺橋に望米を身
て望米け引此橋うら見
大正九年七月花起
獅子舞先生
王蹄 鈴木徳右衛門殿
對馬 義代治殿
世話 坂本銀太夫殿

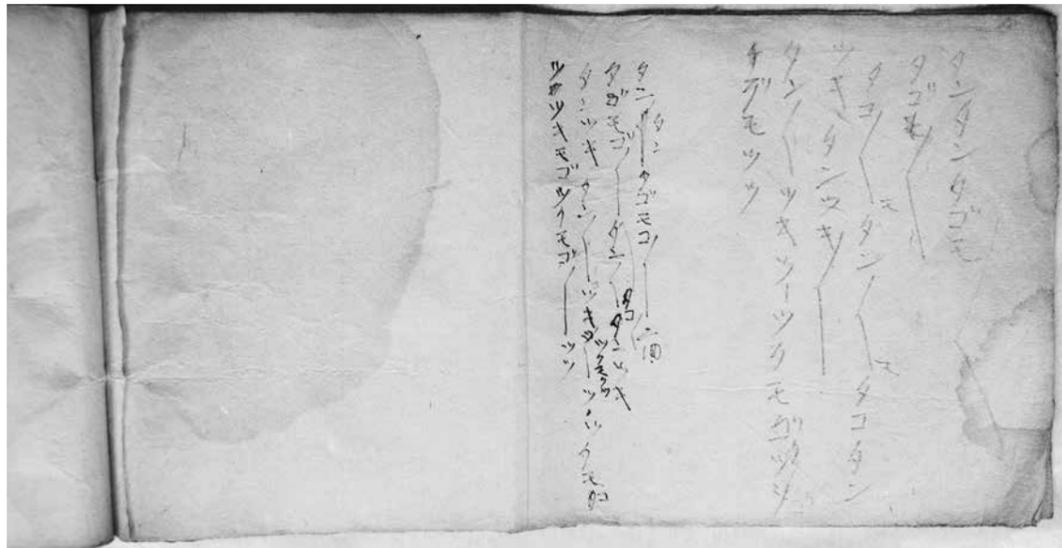
15



22



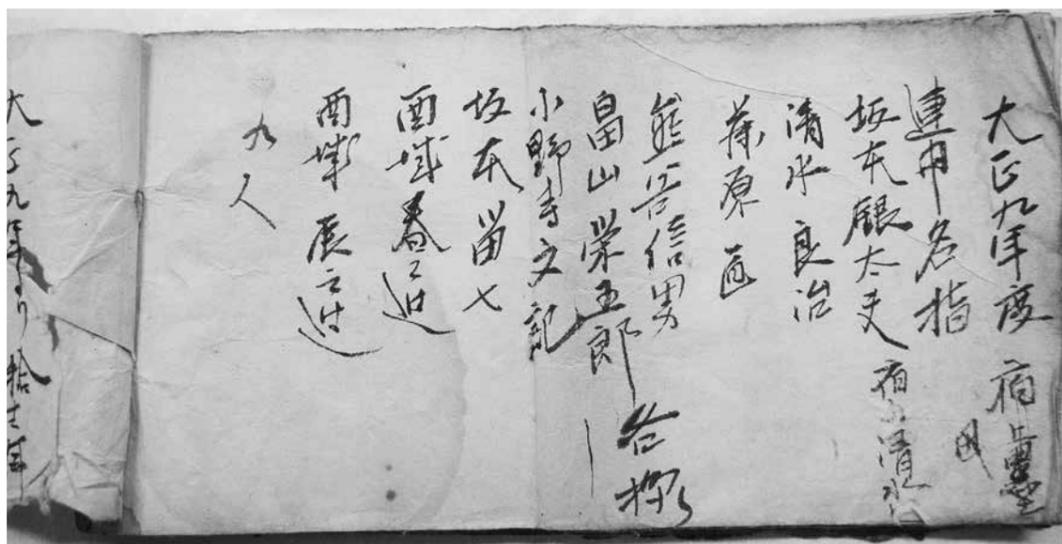
25



23



26



24

※2223は、後に書き込まれたものとみえる。

2. 巖美町字駒形佐々木家文書

駒形のナカヤシキの佐々木家には、鹿踊りに関する秘伝書と流派と装束に関する切紙が保存されている。現当主も地域の古老たちもこの鹿踊りについては知らない、見たことがないという。昭和期に巖美町で鹿踊りを呼ぶときは、舞川鹿子躍に頼んでいたという。しかし、近くの駒形根神社には寛政12年(1800)(現在確認できない)、文久3年(1863)、明治15年(1882)の供養碑が建てられている。

『岩手県一関市埋蔵文化財調査報告書第1集 骨寺荘園遺跡確認調査報告書第7集』(平成18年)に、「行山流鹿子踊供養碑及び鹿子踊資料」として同家の文書と翻刻文を掲載(18~38頁)したが、翻刻し直した上で再掲する。



本寺
鹿之助殿

先師系図遜人
半三郎
卯三郎

右之通派方不可有紛切紙を以相渡置者也

二狂派同人弟子与四蔵派也

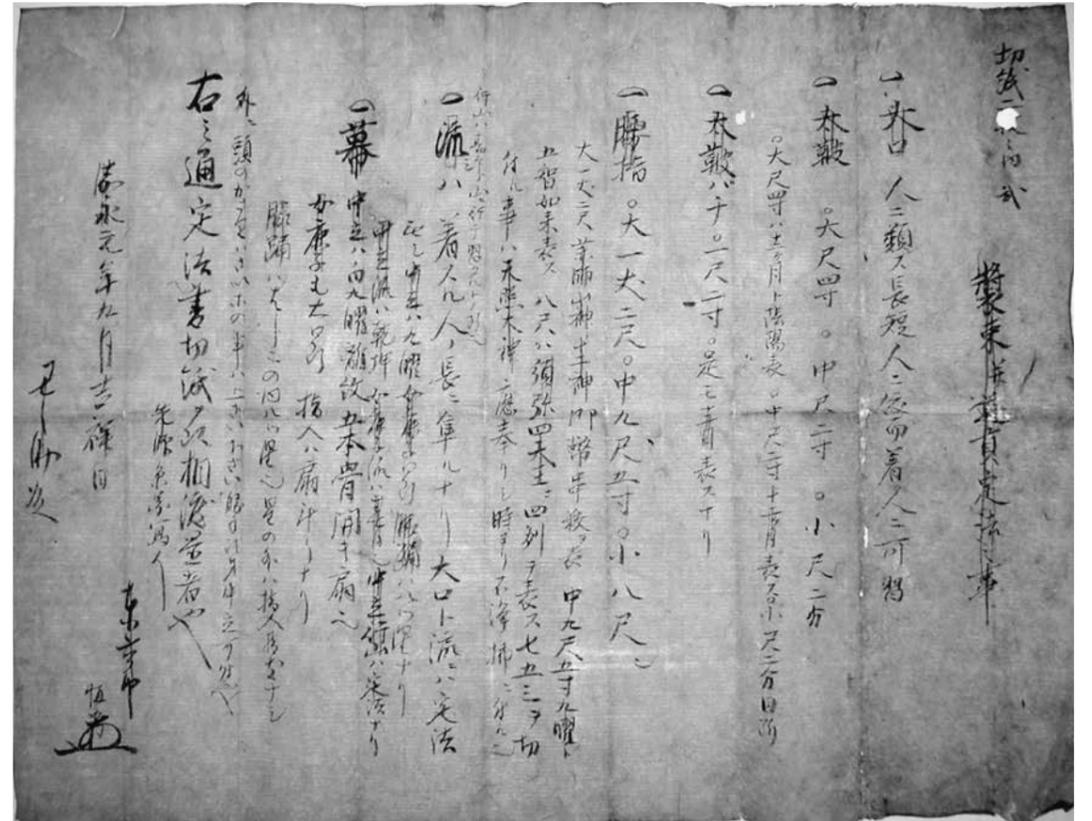
一狂派勘太郎弟子作左衛門派也

女獅子派勘之助 勘太郎伯父也

中立派勘太郎 元祖免許

白九曜

九曜別れの事



切紙二枚の内式

装束并道貢定法之事

一 大口 人二類ス長短人二依而着人二可習

一 太鼓 ○大尺四寸 ○中尺二寸 ○小尺二分

○大尺四寸八十二ヶ月ト陰陽表 ○中尺二寸十二ヶ月ト表ス ○小尺二分同断

一 太鼓バチ ○一尺二寸 ○是モ三月表スナリ

一 腰指 ○大一丈二尺 ○中九尺五寸 ○小八尺

大一二尺薬師山神十二神御幣串数ヲ表ス 中九尺五寸九曜五智如来表ス 八尺ハ須弥四天王二四列ヲ表ス七五三ヲ切付ル事ハ天照大神應奉リシ時ヨリ不浄□ニ付ル也 行山ハ勘太郎山二行テ習タルトノ断也

一 一流シハ 着スル人ノ長二俎ルナリ大口ト流ニハ定法

無シ中立ハ九曜女鹿子同断脇踊ハ八ツ星ナリ

中立派ハ乾坤女鹿子派ハ春日也中立行山ハ定法ナリ

中立派ハ白九曜離紋五本骨開キ扇也

女鹿子も右同断 指入ハ扇計リナリ

脇踊ハはしこの内八ツ星也星の外ハ指入指支ナシ

外二頭のかさりハさい等の事ハ上さい下さい勝手次第中立可然也

右之通定法書切紙ヲ似相渡置者也

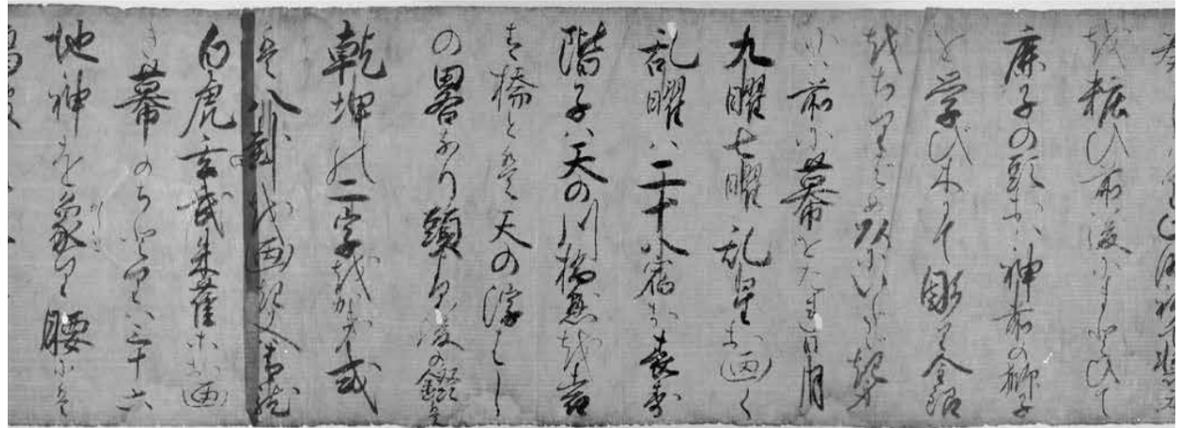
先師系図寫人

東六郎

垣□花押

嘉永元年九年吉祥日

丑之助殿



③
 を粧ひ前後にまとひて
 鹿子の頭おハ神前の獅子
 を学び木にて彫り金銀
 をちりばめ頭にいただき身
 にハ前に幕をたれ日月
 九曜七曜乱星お画く
 乱曜ハ二十八宿お表す
 階子ハ天の川橋懸を表
 す橋とは天の浮はし
 の略なり頭より後の綴は
 乾坤の二字をかき或
 は八卦を画き又ハ青龍
 白虎玄武朱雀等お画
 き幕のちとりハ三十六
 地神を象り腰には



④
 鞆鼓を附紫竹大和竹
 なんとに紙お附白幣と
 して腰に指大口には鳥
 井玉垣を画き是を着
 し八人の鹿子八人の八乙
 女と諸共に十六人にて奏
 しけり鹿は霊獸なる
 故大占に用ひ中臣の
 稜に左男鹿の八ツの御
 耳を振立て聞こしめせ
 共あり雨降らんとする時ハ
 三日以前にしろとなり鹿ハ耳
 疾くして殊ニ不浄之地お
 嫌ふ神前にてハ鳥井お拜
 し神殿を拜し人家に



①
 鹿子踊根元之巻
 夫民家に樂「一」處
 の鹿子踊ハ濫觴を尋
 ぬるに往昔
 天照太神天の岩戸に籠
 らせ玉ひし時國の内常
 闇となり日月の光り見
 えさりしかば八百萬神達
 集らせ給ひ天の香くやま
 の白まなしかの肩の骨を
 以て占ひ其告にまかせ岩戸の
 前にて徘徊せしけり神樂
 角力獅子舞ひ鹿子踊
 おはしめて
 天照太神を褒め奉り



②
 ければいかなるものによこれ
 あらんと面白さの聞候に岩戸
 を少し明けさせ玉ひけるに
 手力雄命岩戸を推開
 ければ日月の光り元の
 如し是即ち信州戸隠の
 大明神なり天津兒屋根
 の命は春日大明神是なり
 其後称徳天皇神護慶
 雲三年七月廿八日より三日
 三夜大和国春日大明神
 の神前にて鹿子踊を
 奏すへきの勅ちかくによつて
 三笠山に六十四間に竹着
 埜のを結び廻し其中にて
 奏しけり此時初て装束



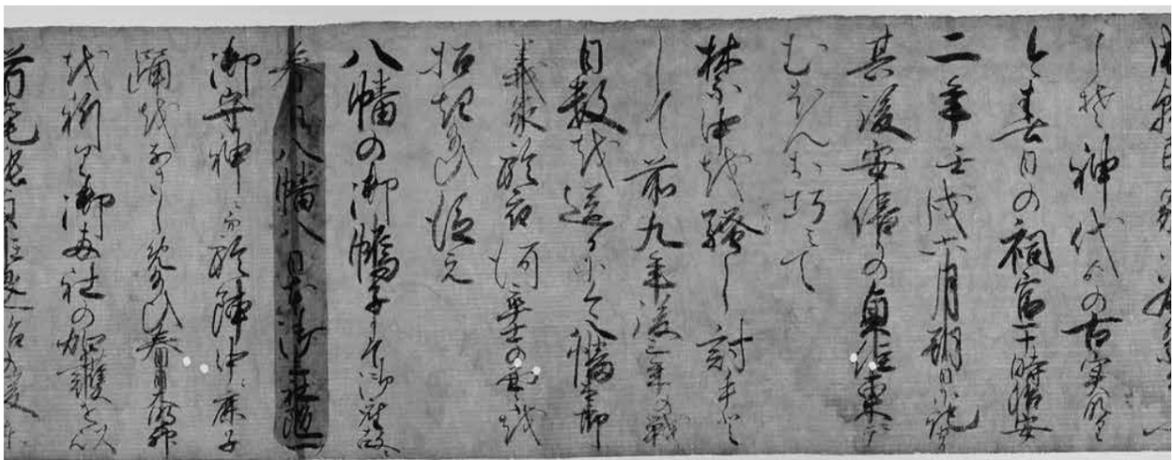
⑦ 首尾能貞任退治の後陣
 堅メを今の庭かためと唱ふ
 退治帰陣の後武蔵野二而
 夕ぐれの頃義家公士卒共
 各及野宿候然るお今に
 踊り終頃二至り武蔵野に
 月の入へき山もなし尾花か
 くしと申ハ此故なり其夜
 明方萱野二而鹿の啼声
 面白き物音しけるに義家
 公権五郎を被召向なる萱
 野二而鹿悉く啼声面白き
 物音しける二忍見て可参の
 仰にて権五郎谷子を伺ひ
 見るに鹿むれ遊びおどる



⑤ ては橋おうか、ひ門おうか、ひ
 三々九五々三七五三拍子を
 以はやしけるもかゝるいわ
 れある故也鹿ハ百歳にして
 白鹿となり五百歳にして
 玄鹿千歳お経て蒼鹿
 となるといへり鹿は筒様
 の靈獸なる故大和春日
 の郷社内二むれるをめす
 事日域の昔春明神(日明カ)
 我国を治め玉ふ時肩の
 骨を以て占ふ故に民
 家にて国家安全五穀
 成就民家に為祭玉ふ



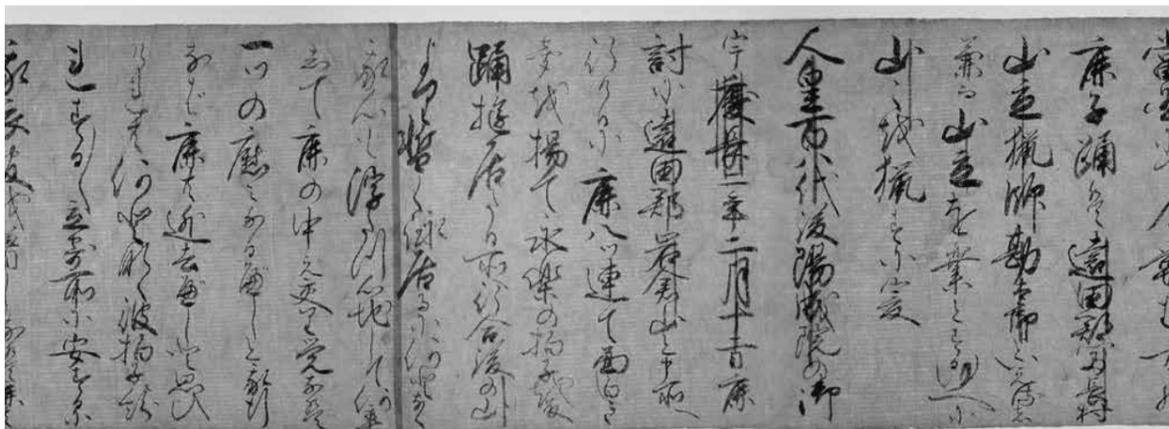
⑧ 事陣中にて踊りし容舁
 に似て面白し即義家公
 江此由申上けれハ御出馬あり
 ほのかに御覽是そ家世の
 治れるしるとやかゝる靈
 獸不浄を拂ひ我々の
 血しほ其外士卒の亡するお
 清浄にせんためなるへしと
 御帝の前に不浄お不拂而
 可出様なき故春日八幡の
 御願移たるなるへし
 是都えの土産なるへしと
 吉に被思召急き都へ登
 帝へ貞任退治の次第一々
 奏聞す帝詠聞ましま
 して外に珍ら敷キ興



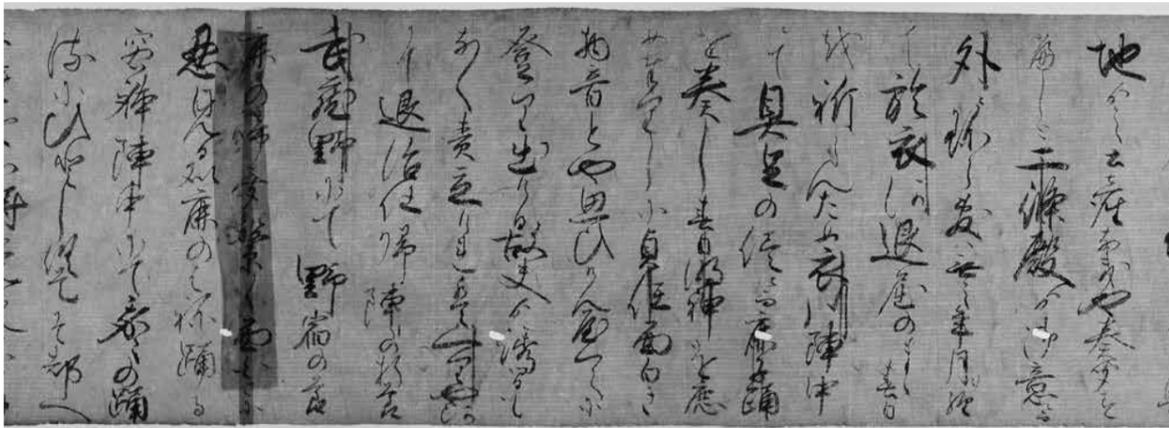
⑥ コトそ神代よりの古実なり
 と春日の祠官干時治安
 二年壬戌六月朔日に記セリ
 其後安倍の貞任東ニテ
 むほんお巧ミテ
 禁中を騷し討手と
 して前九年後三年の戦
 日数を送るに今八幡太郎
 義家於衣河卒士の面々を
 招き玉ひ従元
 八幡の御幡子にて御座候故二
 春日八幡八日本御三社随一
 御守神二而於陣中二鹿子
 踊をなさしめ玉ひ春日大明神
 を祈り御両社の加護を以



⑪ 奉るへし其後鹿嶋へも
奏すべきの宣旨にて然
も両社軍神の元祖なれハ
首尾能帰陣の禮おなす
帝春日鹿嶋にて御禮
申各帰城の節御酒
拝領の頃貞任の居城の
様子お御尋により山ハ
山谷ハ谷津の容より竹木
の生たる模様衣川衣ヶ瀧
の景を御現の蓋に森て
指上げるに帝殊の外御喜
悦 詠覽御座候て今の世ニ
現蓋といふもの祝義の座ニ
錦も是れや故実様有
といえ共記にいとまあらず
當国にて今勤むる所の



⑫ 鹿子踊は遠田郡富長村
山立狛師勘太郎といえるは
兼而山立を業とするゆへに
山々を獵すに爰
人皇百八代後陽成院の御
宇慶長二年二月十二日鹿
討に遠田郡岩倉山と申所へ
行けるに鹿八ツ連て面白き
声を揚て永樂の拍子を取
踊遊居たる所へ行合後の山
より暫く詠居るに何となく
我心も浮たつ心地して何卒
して鹿の中え交り覚なは
一ツの懸ミなるべしと我行
なば鹿共逃去べしと思ひ
けれ共何となく彼拍子二紛
れするく立寄所に安するに



⑨ 地より土産なきや奏聞す
へしと二條殿より御意二而
外ニ珍ら敷ハ無之年月ヲ経
て於衣河退屈のま、春日
を祈らんため衣川陣中
にて具足の俣ニ而鹿子踊
を奏し春日明神を褒
め奉りしに貞任面白き
物音とや思ひけん屋天に
登り出ける故夫より誘間も
なく責立ければくりや河
にて退治仕帰陣の折節
武蔵野にて野宿の節
鹿の啼声繁く面白さに
忍見る処鹿のはね踊る
容躰陣中にて我々の踊
るにひとしく是そ都へ



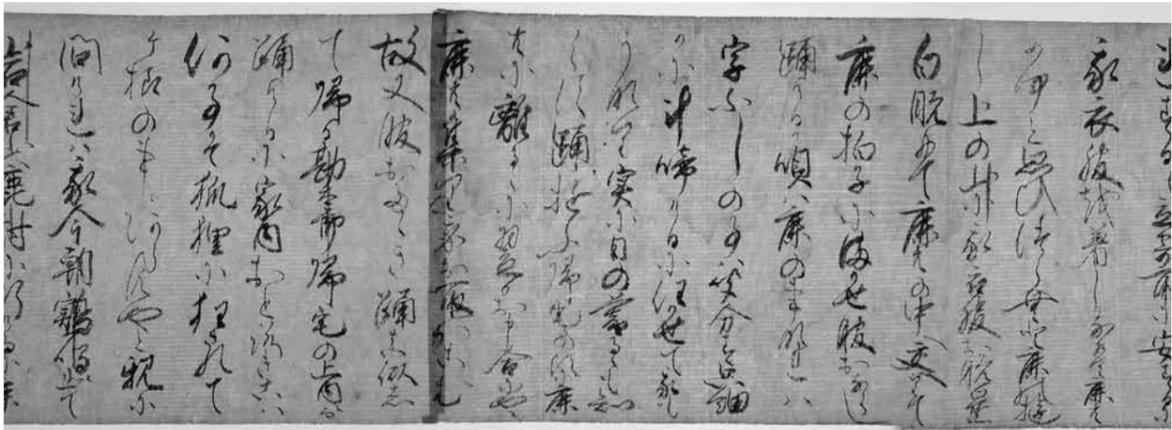
⑩ 土産と心得覚え參申候
と言上なされけれハ其踊
御身共の穢れを清めん
ため紫震殿の前にて奏
すへし具足の俣にて陣太鼓
お腰に付各大口お着し腰
には小ばだお指踊るに
帝面白く思召夫より此殿を
獅子居殿と名付くる其
後入鹿の大臣むほんの折
大職冠鎌足大臣退治
の節に俄に震動して紫の
雲獅子居殿にたなひき
入鹿退治なされ國治まる
より以来紫震殿と名
付くる 帝よりの宣旨には
春日の社にて禮の踊りを



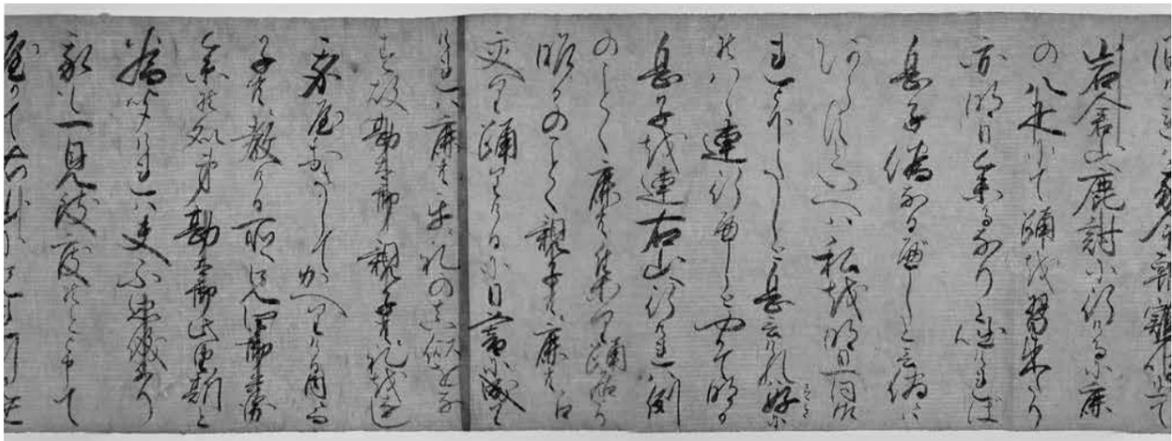
⑮ やかて右山に兄連行見せ
 ければ例のごとく踊居たる所見
 て面白き不思議と云て帰り
 ける面白き踊り連近所の
 若者共四人集め兄四郎兵衛勘太郎
 と親と子共と都合八人にて
 鹿子踊と名付鹿討に出候
 時踊初の書置如此演者也
 一唄の文句ハ我自作也
 一式人狂とハ八正の内六正居り
 式正二而踊を云也
 一三人狂とは八正の内五正居り
 三正二而踊りを云也
 其後八月十七日御野場二而
 菱喰討し咎によつて牢



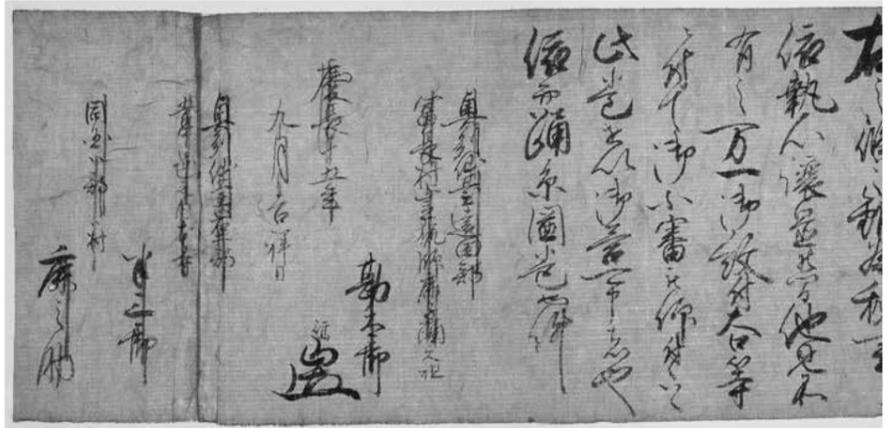
⑯ 者被仰付牢内にて徒然の
 折に板をた、き唄おうたい
 拍子おとりけると所に
 貞山様大崎御野場江御出
 馬御帰城の頃此音を御聞
 被遊御近習を被召何か面白
 き拍子の音何者成可承届
 被 仰付御意に付御近習衆
 佐藤利源太様御出被遊何
 者に候や板お打拍子おとり
 唄お唄ひし者御前より御尋
 なり委細可申上由被仰候得者
 牢守左渡之助承知仕只今
 承届可申上候間一寸御叩被
 遊被下度申上牢内穿鑿



⑬ 我衣服を着しなは鹿共
 如何と思ひつらむと鹿の遊
 し上の山に我衣服お脱置
 白脱びだつにて鹿共の中へ交りて
 鹿の拍子にまかせ腹おならし
 踊けるの唄ハ鹿の事なれハ
 字ふしの事ハ聞分す只細
 かに計啼けるに任かせて我も
 かなり実に日の暮る、も知
 らず踊遊ぶ帰宅の頃に鹿
 共に離る、に翌日お申合にや
 鹿共集り我お取かこむ
 故又腹おた、き踊真似し
 て帰る勘太郎帰路宅の上内二而
 踊けるに家内おとろきこハ
 何事を狐狸に狂されて
 ケ様の事二あらずやと親に
 問けれハ我今朝鶏鳴に出て



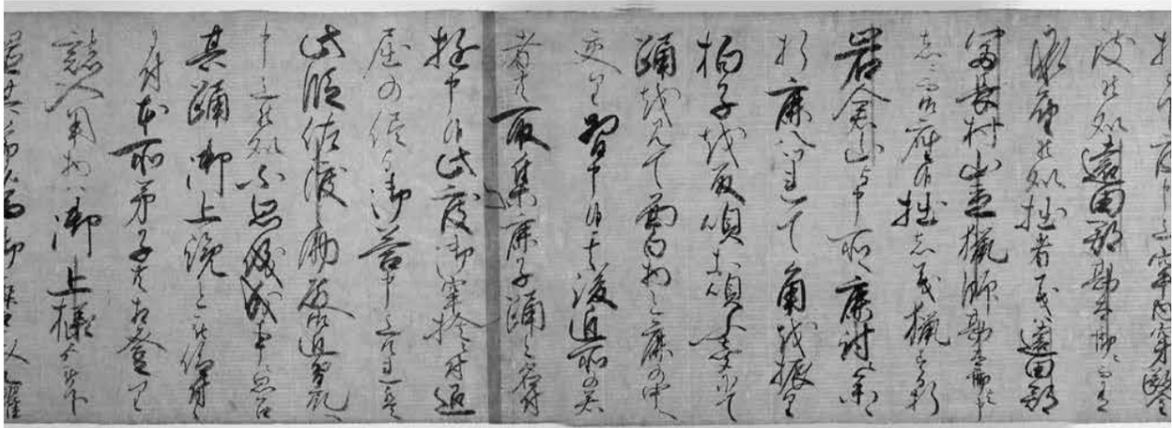
⑭ 岩倉山へ鹿討に行けるに鹿
 の八正にて踊を習ひ来たり
 亦明日参るなりと咄ければ
 息子偽なるべしと云偽二は
 あらずといへハ私を明日一同つ
 れ被下たしと息こゝろ云ければ好きに
 候ハ、連行へしとやにて明日
 息子を連右山へ行けれハ例
 のごとく鹿共集り踊居たり
 昨日のごとく親子共二鹿共江
 交り踊りけるに日暮に成り
 けれハ鹿共互二礼の真似をな
 す故勘太郎親子共二礼をなし
 我屋おさしてかへりける内二而
 子共二教ける所へ兄四郎兵衛
 参候処弟勘太郎此由斯と
 為聞けれハ夫不思議なり
 我も一見致度候と被申て



19

依執心讓置候間他見不
有之万一御紋付大口等
二付て御不審被仰付候ハ、
此卷を以御答可申者也
依而踊系図巻如件

奥州仙台遠田郡
富長村山立獵師鹿子踊元祖
勘太郎 行山 (花押)
慶長十五年
九月吉祥日
奥州仙台岩井郡
五串邑之内本寺
半三郎
同国同郡同村
鹿之助



17

致候所遠田郡勘太郎二而有
承届候処拙者義ハ遠田郡
富長村山立獵師勘太郎与申
者二而御座候拙者義獵する折
岩倉山与申所へ鹿討ニ參候
折鹿ハツ連て角を振り
拍子を取唄お唄ふ声にて
踊を見て面白物と鹿の中へ
交り習申候其後近所の若
者共取集鹿子踊と名付
遊申候此度御牢捨ニ付退
屈の俣与御答申上ければ
此段佐渡之助殿御近習衆へ
申上候処不思議成事ニ思召
其踊御上覽と被仰付候
に付本所弟子共相登り
諸入用物ハ御上様より被下



18

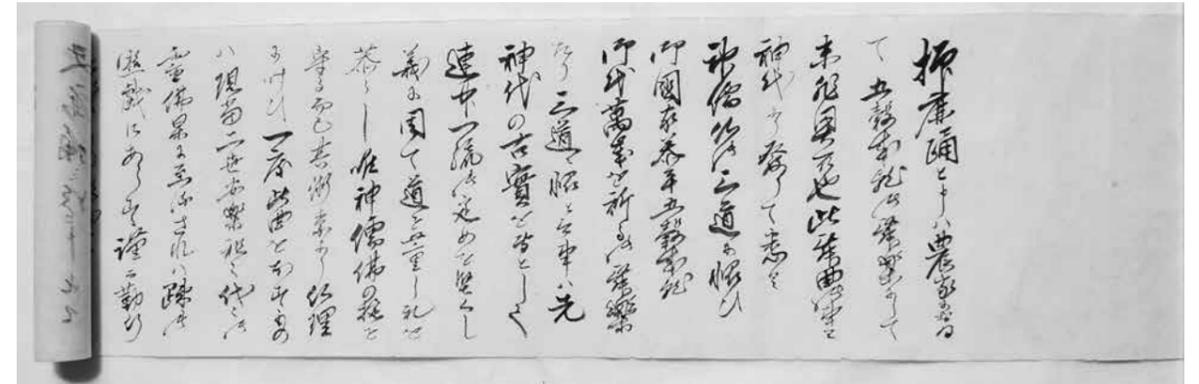
置其節為御褒美九曜
の御紋拝領被仰付候事
大口ハ御前より御意ニ而往昔
八幡太郎義家於衣川陣
中ニ而踊候踊にひとしく
候に付国土安穩の政事
是そ土民慰ハ可然与陣踊
の畧鹿子踊と御意あり
大口を被許申事なり
右九曜御紋に付何方より如何
様之儀有之候共拙者儀罷出
可申分候依而書札段々
遜置者也
右之條々雖為秘事

3. 大東町曾慶字蟹小沢足利家文書

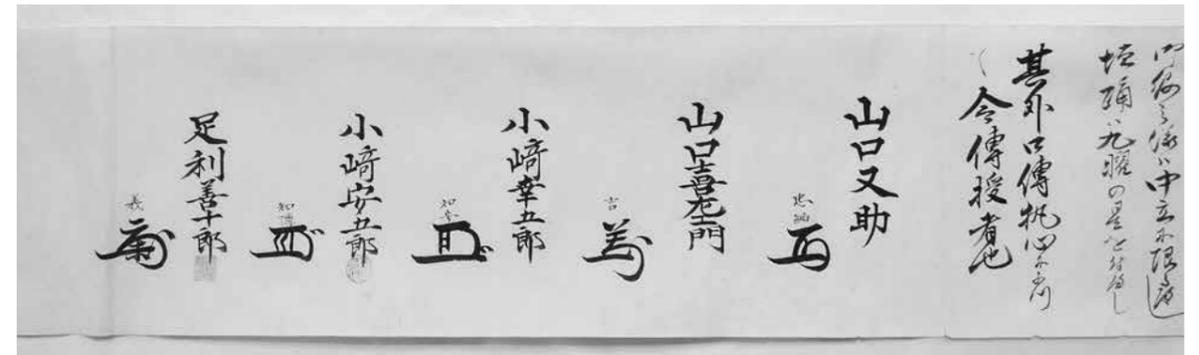
足利家にはいくつかの鹿踊り関係文書が所蔵されており、「角懸仰山踊秘傳巻」と書かれた桐箱には巻物が入っている(①)。「抑鹿踊と申は…」から始まる定形の巻物であるが、年号はない。地元の郷土史家の金野富夫氏は「行山流山口派鹿踊りについて」においてこの足利家の所蔵の巻物についてふれ、全文を翻刻して掲載している。それには文化14年(1817)7月の年月が入っており、現在の文書とは異なる。

金野氏によれば、このほかに同様の巻物を山崎氏と大東町沖田前田野村上氏、鳥海新田の菊池氏、摺沢三浦氏(写本)、室根村上折壁古坊屋敷藤代氏が持っており、一部小異があるがほぼ同文であるという。

同家にはほかに、②安永2年(1773)8月8日の東山大原村山口屋敷又助へ石田豊前、中村淡路から蟹牡丹を許す書付、③弘化元年(1844)に曾慶村中立善次郎殿あてに洪民村踊師匠幸五郎から「仰山踊之事」として菊御紋、蟹牡丹御紋、九曜御紋、鳥毛前多礼を使用して渡世することを許す書付、④嘉永5年(1852)7月の信平様宛の書き上げ書(大原村山口喜左衛門、洪民村幸五郎、曾慶村善治郎、東山北方大肝入芦章右衛門から)、⑤安政2年(1855)7月の足利善十郎宛での小崎幸五郎名代嫡子安五郎から巻物併傳授拝領御紋等全部を許す書付、⑥安政5年(1858)東山洪民村頭取安右衛門に鮎貝太郎平家老芦立三右エ門と佐藤新太夫から九曜御紋を用いることを許す書付がある。



① (部分:最初)



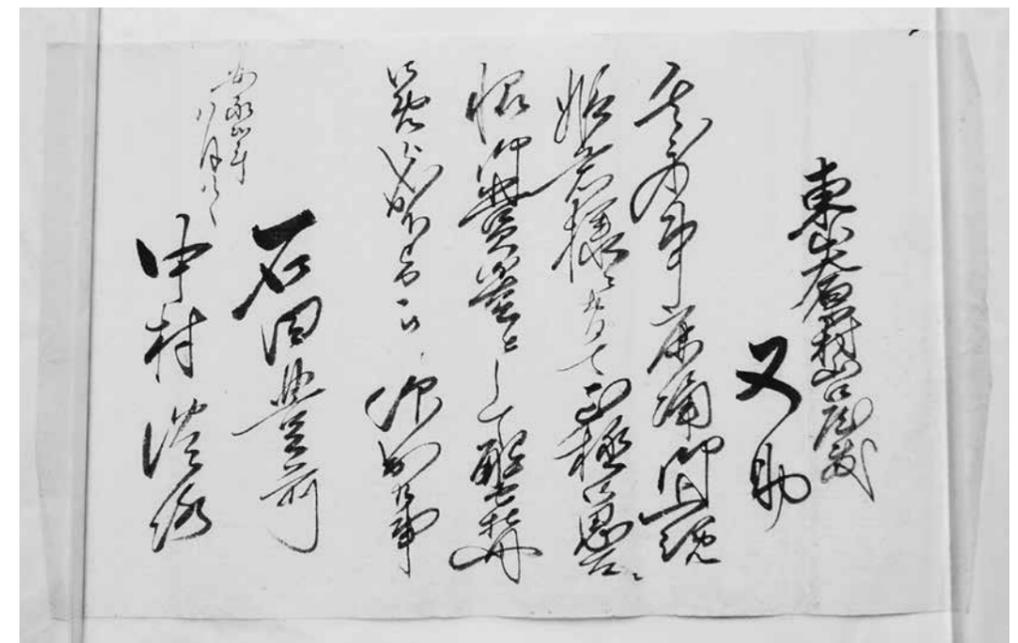
① (部分:最後)



① (箱)



①



②

金野富夫「行山流山口派鹿踊りについて」『東磐史学』創刊号
1976年 59～61頁より引用

角懸仰山踊秘伝巻

仰鹿踊と申は農家におゐて五穀成就の舞樂にして未非奥所也此舞曲の事は神代より發して悉く神儒仏の三道に協ひ御国安泰五穀成就御代万歳を祈る舞樂たり三道に協と云事ハ先神代の古実專として連中一統の定を堅くし義に因て道を重し礼を恭しく唯神儒仏の掟を守るにて其術素より仏理に叶ひ一度此曲をなすものハ現当二世安泰祖々代々の靈仏果に至るされハ疎の遊戯にあらず謹テ勤行すべきものなり

鹿踊始の事

夫鹿踊と申すは大己貴子武甕槌命鹿を撃きて其頭を載き舞戯れ給ふ事あり是の樂の濫觴なり又依伝ハ葛流あり此曲の伝来ニいへるハ神代彼所々稲あり是を爰に従し植んとして諸神評議有て一神彼所ニ到り見たもふに田の辺りに悉く竹を植て囲み一方の口に獅子是を警固して稲を取る事難がりけれバ其神則白狐と化して遙此方より土中を穿ち田の中に辺れ稲を取て又彼穴に入て逃去り給ふ此故に追事叶はず警固の獅子三撃呼んで死す其の神事の故まり逃れ去りて歸りたもふて稲を作り給ふこれ宇賀神なり然れ若獅子の靈妨をなして稲実らず爰におゐて七月鹿踊といふ樂を始め鹿の靈を宵めけれハ倏惚和ぎて米になんなりけれ是所謂萬流鹿踊の濫觴也

人数九人に定むる事

一、三五を積て九となる之を老場といふ天の終百数なり陽の壯を用ゆる為なり

仰山踊と云事

一、鹿踊に萬流あり流儀同けれ共鹿頭の造の異なあり凡夫踊権坊おとり関東踊諸国萬流あれとも仰山踊ト申ハ昔台覽に奉備し時誠に仰山なるものと、上意ありしより村里において仰山踊を最上とす。

角巻の事

一、軍器の兜鍪に角あり其角猛獸の角を負る鹿踊の角巻ハ兜に習ひて忍の緒を表する也舞樂なれハ是角巻と号せしものなり。

流しの事

一、諏訪 鹿嶋の両神鹿を撃き其頭をかふべに載き舞給ふ是れによりて其の貌に似たるを似て流と号し色を萌黄に定む萬物萌出る色にて其壯なる色を頭に載き五穀成就を祈舞ふ亦木火土金水の五行にとりてハ青は木也鹿の山林に住ものなれハ其草木を表するに兼たるものなり

腰指の事

一、彼田の辺りを竹にて囲ひしを表し紙を似て昏手を付る耳幣を像り用ゆるなり

幕二幅の事

一、幕ハ形状を圀子要害にして天地を表し二幅に定め則陰陽なり

大口の事

一、鹿踊ハ神代の古実をまふ舞樂なれば大口着用を用ひ色黒にするハ方角にとりてハ北なり北の方は坎三の卦にして五行にとりこハ水なり五穀を養ふ根元なり亦幕を天に像り大口を地に表し水を像る共いふ

鶏毛前かけの事

一、神代にてハ鶏をとこよのなかき鳥と云卦に在て立つ巽に属し里に在て昂に應じ此故に鶏の毛を用ふ

御詠歌の事

陸奥の信夫牡鹿の牡鹿の里声を

揃ひて遊ぶしかかも

御紋拝領等の事 恐れ

多ければ爰に略す

秋萩をしからみ ふせて鳴く鹿の

めにはみへずおとのさやけさ

此の歌は古今集に読人

しらずとなり

御詠歌の儀ハ中立に限るべく

垣踊ハ九曜の星を付べし

其外口伝執心によって令伝援者也

山口又助

文化十四年 忠継花押

七月 山口喜左衛門

吉 花押

小崎幸五郎

知安花押

小崎安五郎 朱印

知隣花押

足利善十郎

義 花押

4. 大東町沖田字前田野村上家文書

沖田字前田野の村上家には鹿踊り関係の巻物ほか文書類が伝わっている。

巻物①は天保12年(1841)7月の築館村(現大東町沖田)中立の常五郎宛てに小崎幸之丞からのものである。先述の金野氏が地域に同様の鹿踊りの巻物が複数あるといううちの一つである。(金野富夫「行山流山口派鹿踊りについて」『東磐史学』創刊号1976)

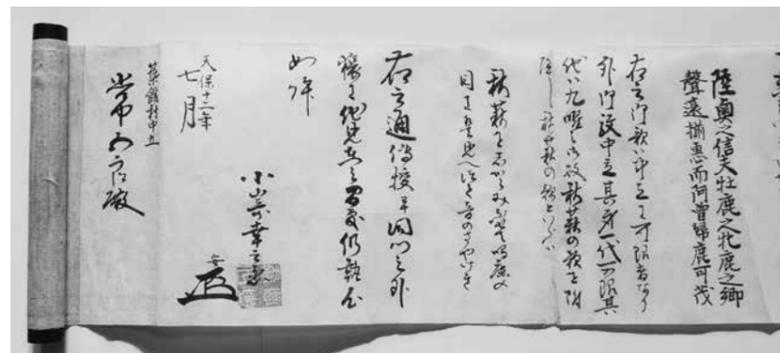
村上家にはほかに宝暦9年(1759)に東山郡(ママ)築館村源右衛門宛に江刺郡伊手村地之上屋敷卯平治、百目屋敷指南人次四郎、彦太郎、千之助、千松、次三郎、与助、正五郎、万太郎、長助からの弟子として指南を許す書付②、宝暦11年(1761)7月の上伊手村次ノ神やしき字平次宛ての東山月立(築館)村前田野源右衛門からの「免之書附之事」③、寛政12年(1800)8月14日の仲三郎あての武左衛門からの目録④などがあるが、当主は鹿踊りについては、わからないという。



①



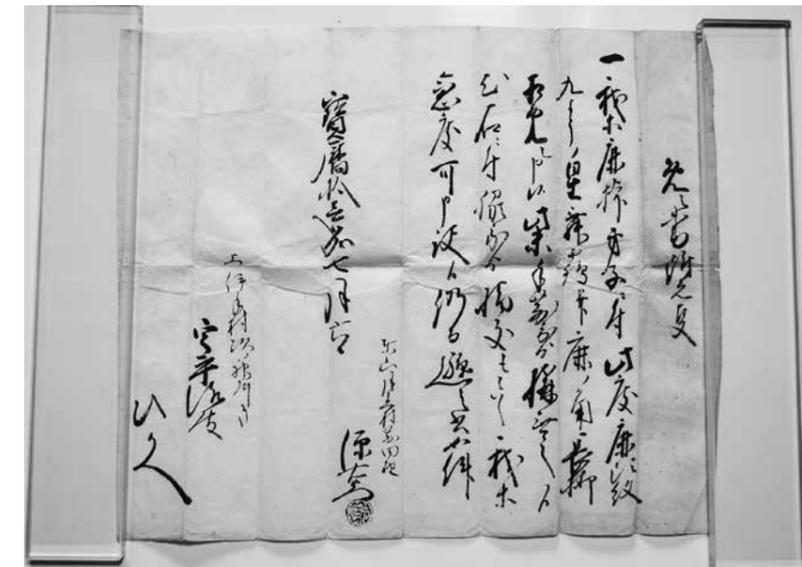
① (部分:最初)



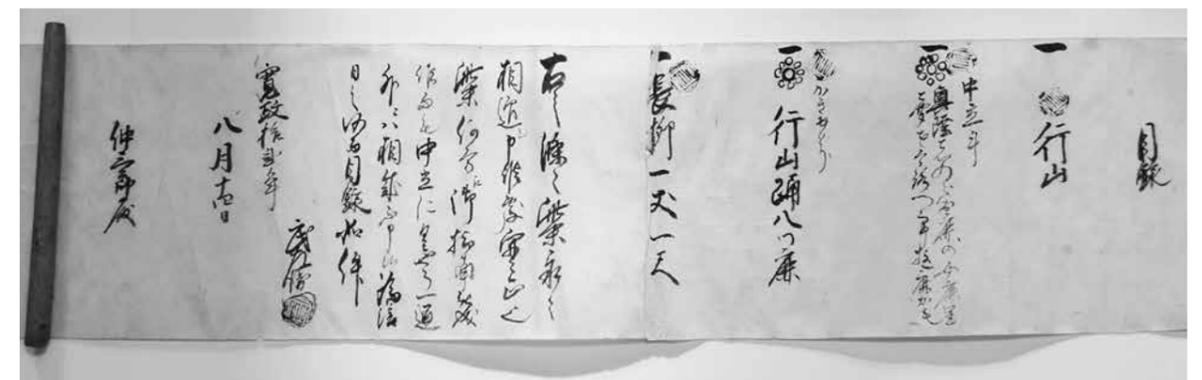
① (部分:最後)



②



③



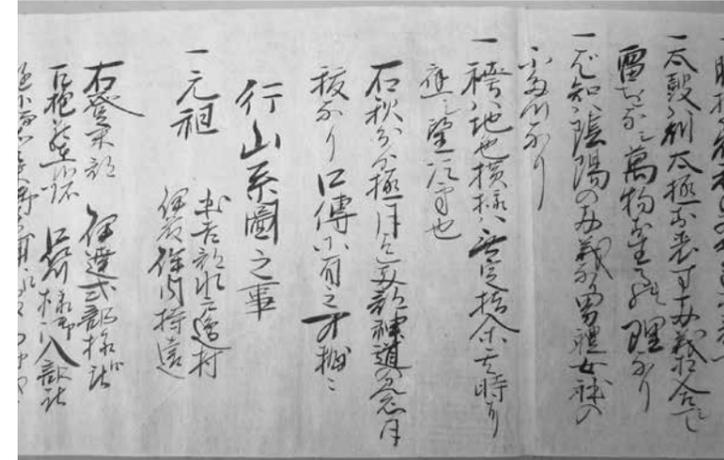
④

5. 「両部神道行山流鹿子踊莊束之事」

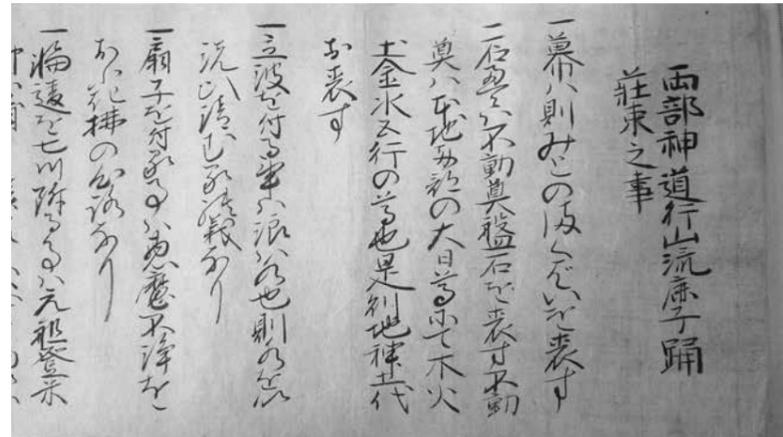
奥州市安部氏がインターネットオークションに出品されているのを発見し、入手したという。旧所蔵家から流出したと思われる。

文政5年(1822)8月の日付で猿沢村佐々木万太郎あてに吉田惣三郎、吉田七太郎から出されている。

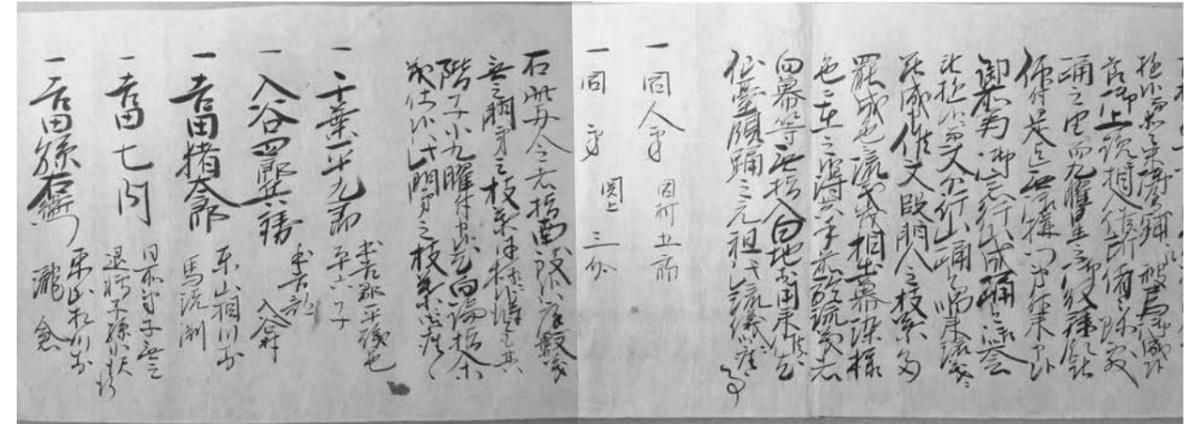
(撮影:安部 靖氏)



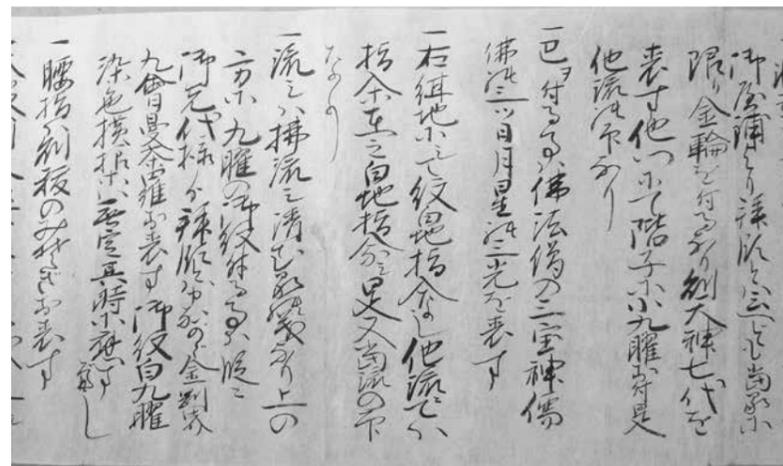
③



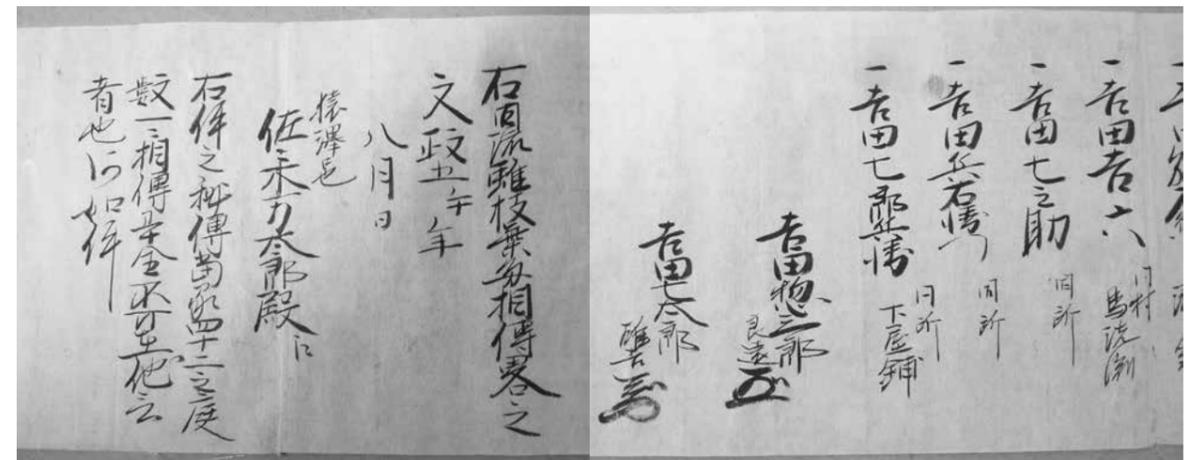
①



④



②



⑤

⑧

花のいかたのほめ事

- 一、花のいかたを見申せば
天より花はよふりかゝる
- 二、申のにかくとくよよそなわまる
茶とう香花たむけおく
- 三、前におんそうよまきようよむ
こくらくじようど のよ水引に
- 四、水にうむれこしする人
うかべのためのよ花いかた
- 五、茶とう香花かすのかし
あまたうごそうはよお念佛
- 六、百八十一口の明りにて
こくらく世界をまんとうに
- 七、花のいかたを見申せば
こくらくじようどにぞもにたや
- 八、しよぶつぼさつのおんかくで
みだの成土に長すあめ
- 九、西方成土につくいかた
おかみ申せやせぞのつ水

⑤

門のほめ事

- 一、顔をかくせしかぶりもの
意外長らもごめんなれ
- 一、八れて見たれば七里にわ
金銀まさごをすかたたり
- 一、この象からを見申せば
八つむね作りにひわたぶき

⑥

おいとま念佛

一、我々は
しよぶつのおんそも知らねども
御めん回ましませ我々を

- 二、大せいじやくはい引きつれて
ゆるくこちそう有難や
- 三、昔より
三七御礼とゆせども
一礼申して立つやつれ

⑨

花のいかたえこ

此の右りもろくのぼさつ達
りゆうぐうぐせいの舟をこつにうつして
今又花いかたとくようなす
水にうむれてしむむし男女の
しようれいとくかのうろぐじ
うえんむえん

せん事をなむあつたし

せんかいはんれいぐせんかいたにうちく
れはかんらんぼさつは、かじをとり
じをうぼさつは、さをとり
ひかんの孝に居たり居たつて
長くさんすめくをの心れ
昔友に無成土をじようじう

⑦

川のほめ事

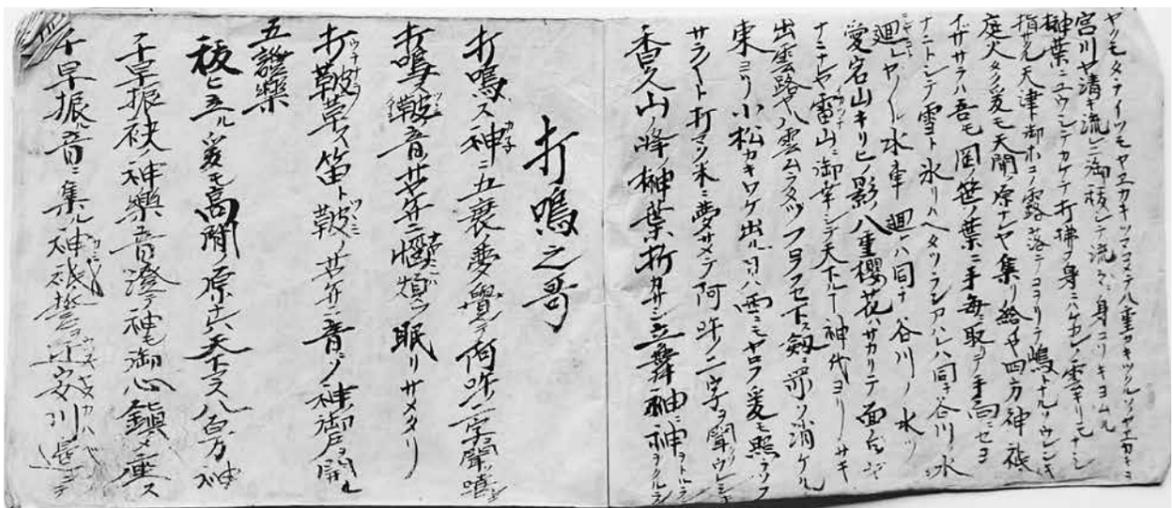
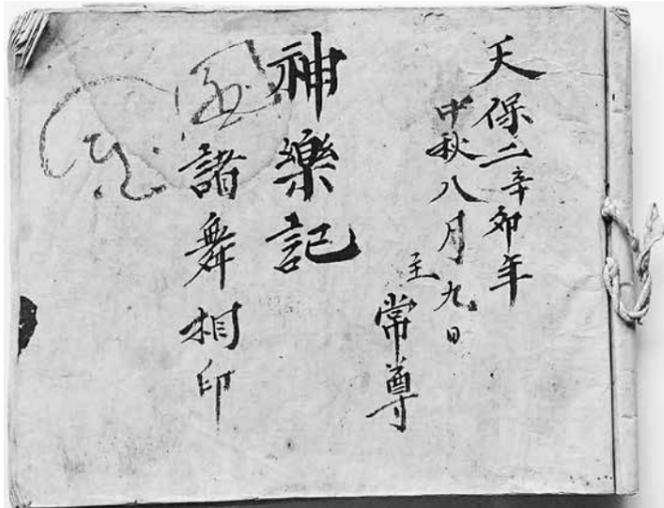
- 一、これの大川見申せば
九百九まかりまたまかり
- 二、まかりくを見申せば
水神さん言あたちやる
- 三、舟の中より見申せば
舟むごん言あたちやる
- 四、ともものせんどうよ見申せば
あやとにしきを見たまとな
- 五、白金ろかえをお手に持ち
こぎ行く大川おもしろや

7. 大泉院文書

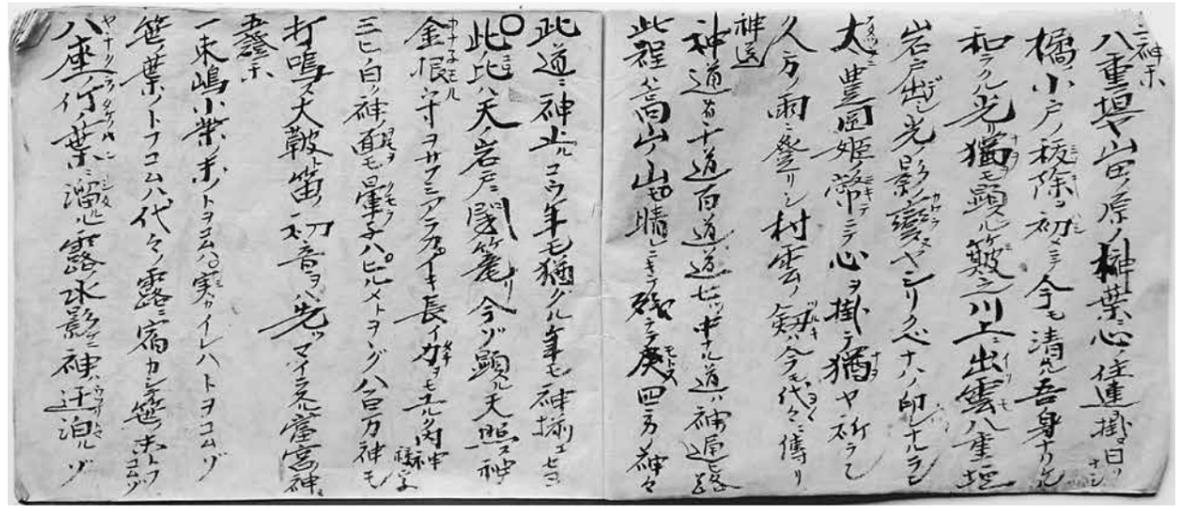
かぐらぎ しよまいあしらす
「神楽記 諸舞相印」 天保2年(1831) 常尊

大泉院には多くの文書が所蔵されている(後述)。神楽関係と思われる文書は3点あり、その内一つを紹介する。「打鳴之歌」から始まり、「打鳴」「三神ノ移り」の口唱歌、「劍座之次第」、「磐戸ノ神諷」、「白露神諷」に続く。神諷は、「所望分」「吾兒」「聚雲神諷」「蛭兒」「湯之父」「荒神五大尊附歌」「初矢神諷」「作々結神諷」「日本武神諷」「魔王退治」「橋引神諷」「五矢神諷」「釣弓」「火々出見神諷」があり、さらに「初矢」から「両天」「五證楽」「普照」「空照」「道祖」「神唄」「住連寄利」「吾兒」「湯父」「蛭兒」「鬼門」「荒神法」まで舞い方が示される。その後ろに「大天姥神語」が記されている。

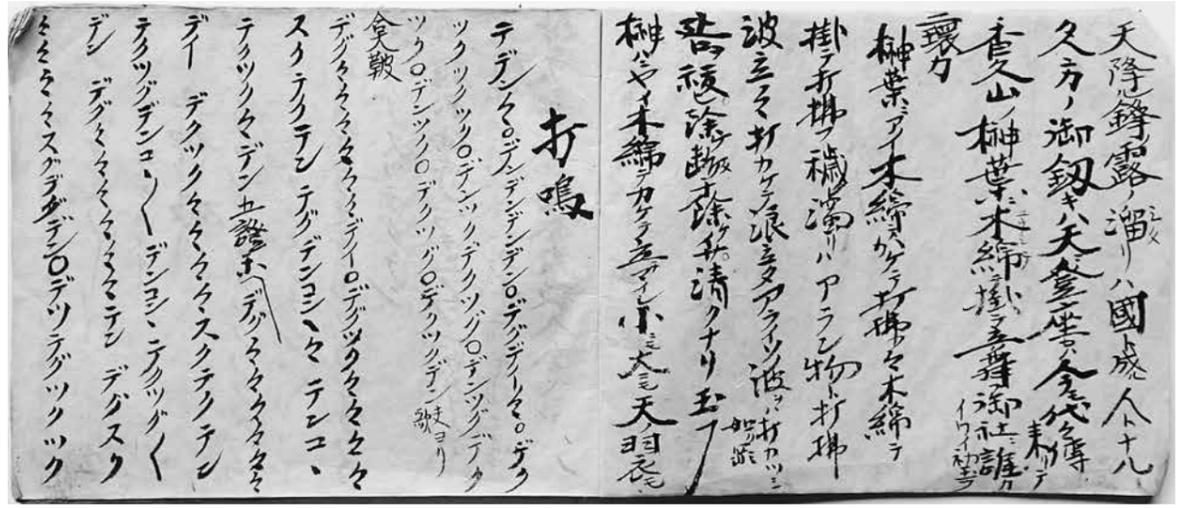
「浜の法印神楽」といわれる本吉太々法印神楽(宮城県気仙沼市)に伝わっていた演目と共通しており、当地方での法印神楽のようすがわかる資料である。(撮影:八巻 徹氏)



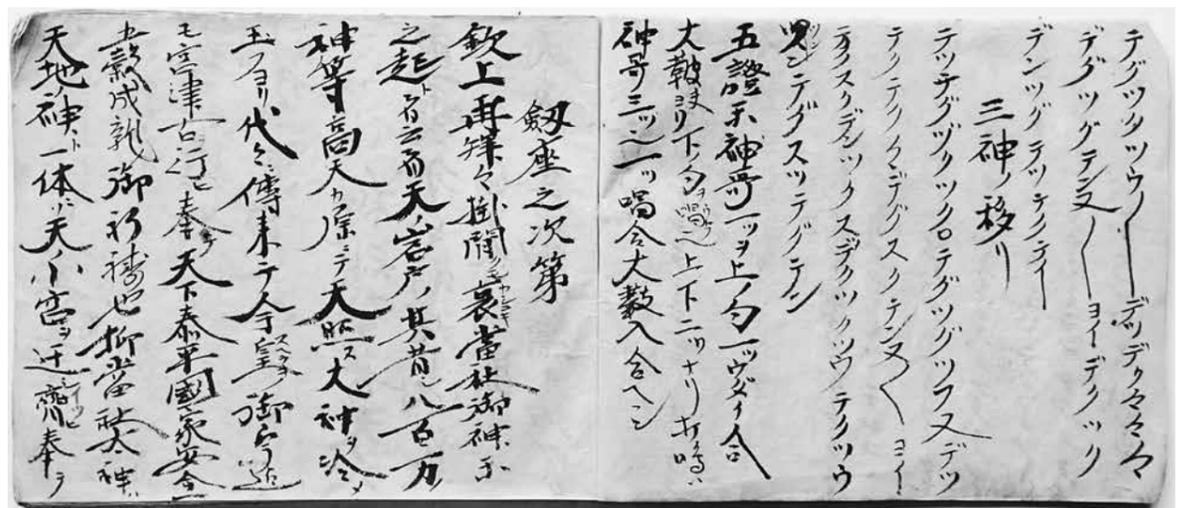
①



②



③



④

遷奉八中津國也遷八百
天神也ヤラ面百カト十カヤ
其御備八百万神共儀ノ乘
素多鳴命ニキ根國八神ト
五部神方于坐置座
又責神祇ニ給給
天神七代地神五代國津神
始ニ是也
高皇經二神于雄荒御光
自カカ也トク種ヲ解
峯ノ飛打ノキ令社大神
カラレトヤヤノ驛ノカヤ太
神ヤ
白露神詠
夫我回天地未分
分九時ノ五德移任四時

8

ナリ四真源理ヲ氣指
合ノ物ヲ名ケテ天常ニ尊ト
申奉テ國ノ開始ナリ
其特海中一物ノ形カヤ
ノ如ク其中ニ神生ル神名
神中五命申奉一物一理
神也復國常ニ命申
奉時ハ八万物力一定ノ神
理也又太元命神申奉時
ハ明理本願ニテ三ツ御名
此一神也夫此御神也國
攷追尊次豊國至尊是
也陰陽不令一神家ナリ
出玉次ニ塗敷命沙名火
尊次大道尊大古邊尊

9

次面足惶振尊次伊勢諾
伊勢尊此西代ハ陰陽分
二神ノ生出玉ノ是天神七代ト
又奉テ吾國ノ始ナリ
所望分
夫自八國常命ヨリ六代自
面足惶振二神性天ノ心
万鬼ノ命也然四季神等
物申サヤク
四神是ハ何更ニ候
幸自ハ八上ノ鬼命ニ天者
テハ元氣土德神地有テ五鬼

10

今日於玉ノ百產玉豊榮ニ登リ
諸障ヲ祓申八百カ神等若御
ニ此ハ祈禱所也此ニ是ト敬カ
神代思ニ渡ニ又ニヤ天海橋
天ノ御柱 柳神代申昔天ノ
重雲分ナキ時渾波ノ息
ノカキコノ如ク夫ノ清ク晴ルルハ
天ト成ル重ク濁ルハ續キ地ト
特天地中ノ物有ル名ヲ神
トル國常ニ尊ニ是神代初
國攷追命次國常ニ命次ハ
塗敷沙敷命次大古邊命
大古邊命次面足命惶振命
次伊勢諾命伊勢尊等遷天神
七代ノ尊ニ奉テ天地御建ニ始
三香ニ是テ是ノ御鏡ノ二柱ニ
是天地ノ神トナリ也

5

柳天地開萬物分出則二柱
破馭盧尊ニ出奉テ御神ヲ
天照大日靈命ニ奉テ天カ下
草追日不合ニ少地神始也
次悉禮身命禮命入出見命
ウカヤフテ不合命合地神出カ
上齊奉テ天下奉テ皇ニ是禮
ト子護ノ御神也
磐戸ノ神詠
柳神代昔天ノ岩戸始ニ
尋ル素多鳴命行跡甚ク
ナカ品ヲナドリ成テ是ノ神
天岩戸入也岩戸ノ隠ニ
天カ下常ニ是也其所時八
万神等愁悲テ天ノ安川原集
種々言議ニ奉テ天ノ香久山

6

真神ヲ根起メ山岩戸ノ前立
上坂ハ八咫ノ鏡ヲ
中津枝ハ八坂ノイタツヒ妻
掛下津枝ハ幣掛湯ヲ
度火ヲ燒テ天宮根命
諺釋言クク旗命岩戸殿ニ
天鈿女命香久山真坂掛ヲ
爲髮蔓蘿ヲ以手懸トナシ
爲葉ヲ手草成テ神カリシ
業ヲ夫八百萬神等ニカヤ
以舞玉ノ其時天照大神
如何成更テカニ粟ヤト石ニ思カ
岩戸ノ開キ出テ夫ハ手力雄
命御手玉ヲ瑞新殿

7

釣魚樂申サレ
不思也魚樂申サレ候處ニ
魚針ヲトテ兄ノ命何ト云分
ケ申サレヤ
自盛冠翁ニ候命何ト云候
敬告玉フヤ
是ハ八幡ノ儀カ然ラハ意行
御教奉之間ナレ片間ト申御
召是意急ニ釣針御奉給
是ハ八幡ノ儀カ然ラハ意行
御教奉之間ナレ片間ト申御
召是意急ニ釣針御奉給
是ハ八幡ノ儀カ然ラハ意行
御教奉之間ナレ片間ト申御
召是意急ニ釣針御奉給

26

借り魚釣樂候處ニ魚針
取無詮方我帯ル釣針以テ返
雖モ無引候無是此此
天下リ如何モ其釣針バ若
手ニ入間敷ヤ
是ハ八幡ノ儀カ然ラハ意行
御教奉之間ナレ片間ト申御
召是意急ニ釣針御奉給
是ハ八幡ノ儀カ然ラハ意行
御教奉之間ナレ片間ト申御
召是意急ニ釣針御奉給

27

是ハ八幡ノ儀カ然ラハ意行
御教奉之間ナレ片間ト申御
召是意急ニ釣針御奉給
是ハ八幡ノ儀カ然ラハ意行
御教奉之間ナレ片間ト申御
召是意急ニ釣針御奉給
是ハ八幡ノ儀カ然ラハ意行
御教奉之間ナレ片間ト申御
召是意急ニ釣針御奉給

28

今ナラハ契モ深キイユスキ情ケ
安レカクサ
神ノミチ奉サレハ初リ申サレ
南無ヤ熊野ノ三所権現
大峰ハ大金剛童子
湯殿月山羽黒ノ権現
大山石尊大権現
富士淺間大権現
日本諸神大小神祇
此橋成就ル出橋引玉ヤ
五天神
欽再拜々々敬白夫昔國始
後二様御神國津美生トテ
一女三男ヲ生玉フ三男々牛頭天王
トハ自ラカヤリ
今貞
欽再拜々々敬白夫我君牛頭
天王御内今貞ハ自ラカヤリ
夫々天神御代ヨリ根國足云
國ニテ久シク経歴座シ先或時日暮

23

巨且宿借サセ給不仁ニシテ
不奉貸又自借テ自家食
ケ地奉貸粟カラテ穀粟飯奉
ハ天王大慈モ玉種々教成
玉ノ藤氏將来子孫門戸書門
立置ハ疫癘ヲ除ヘシ境越
思時ハ神四手懸テ道ヲイシテ送
ルヘシ六月至テ青馬作田畑
繫置ケル天王来巡リテ作物
衆毒ヲ掃ク衆生ニ與ベシ是
今代迄モ傳テ来テ古又ナリ
望召セ君々合望召君合々望
口ヒト只 昔ゴノ脱ク神ノ子ナラハ古
取レ君夫取レ今貞 此
此形来ハ麻羅モハハ鬼神魔王
カテテ難疫痛難 昔夫一ツ
射佛

24

タリ矢ツボ印ニタカ今貞
意トグ取テ急度印ニテ来リ
夫昔君牛頭天小弓疲座
造酒一捧奉
盃對テ取テ今貞
君ニマイラス
西ノ海其ノ浦々ノ悦アラ
君ニマイラス
西ノ海其ノ浦々ノ悦アラ
君ニマイラス
西ノ海其ノ浦々ノ悦アラ
君ニマイラス
西ノ海其ノ浦々ノ悦アラ
君ニマイラス
西ノ海其ノ浦々ノ悦アラ
君ニマイラス

25

既揚 掉押 嘜而入
 鬼門 素多鳥尊且退治舞
 出懸 降伏七會 鎧附 鎧上七會
 鳴探 扇見渡 鎧附 鎧上七會
 威大猛 見渡 鎧上七會
 揚 鎧上七會 下鎧 鎧上七會
 三鎧印 折手 三足
 亂聲 折手 腕羌
 亂聲 折手 腕羌
 四六實 度方 三足 三足
 亂聲 折手 腕羌
 三鎧印 折手 腕羌

38

荒神法 別而
 護身法 如常 次六印
 次天藥印 天藥強魄 令感無明龍玉
 次施甘露印 施甘露 令感無明龍玉
 六三 亂聲 折手 本九陽宮
 出懸 早初子鈴 飛行印
 混泔 腕羌 混泔印 右
 腕羌 混泔印 腕羌
 兩渾泔印 飛行印 三神示
 出懸 神示 四方扒
 走實 三鎧

39

大天姥神語
 自倭姬命也然天照大皇靈
 尊勅請於此國清淨地
 相尋巡行既百年及於然太
 神御鏡出崇頂不行國
 不坐地三十餘清地見
 伊勢國二度立改令一見
 力浦中一然重仁天皇

40

智拳印 終
 道祖 猿田長舞
 四方拜 初夫地 八葉印
 三古印 折 兩拳印
 折而 四度足 乘弓始
 折而 四度足 乘弓始
 亂聲 折手 本九陽宮
 亂聲 折手 本九陽宮
 八葉印 折 未將
 神樂 太刀三神樂
 鉾招 鉾真
 荷鉾 又右肩 又右肩

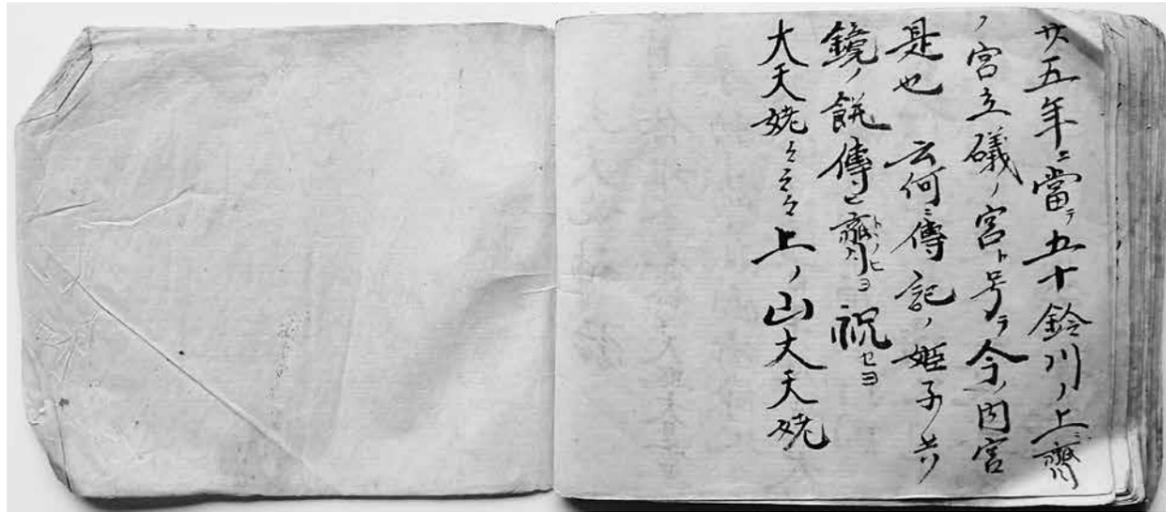
35

鉾合 鉾探
 次五鉾 九證樂
 鎧着 鉾直步 先合 尺巡
 本合折引 中合折引
 佛鉾 持カラ三段引
 住連守利 豐國主命
 出懸 早初子鈴 飛行印
 混泔 腕羌 混泔印 右
 腕羌 混泔印 腕羌
 兩渾泔印 飛行印 三神示
 出懸 神示 四方扒
 古兒 木花咲姫舞

36

兩渾泔 兩結 兩渾泔
 六三 亂聲 折手
 三神樂 住連切古兒折手
 湯文
 出懸 合掌手 出正面 打鳴 內念
 四方拜 大極志 右手世將 二大神
 次神風品 次禱子里 次上腕
 下腕 次双露 次三神樂 納
 輕兒 西宮太神舞
 出懸 大鼓哥 二勾風 口傳
 四間巡 掉押 二方拜 折
 三足 折 公利 亂聲 腕羌
 二勾哥 花籠 折 鉾真
 走前後 一向西海 釣

37



④1

しゅげんだいせんいん 修験大泉院の来歴と伝存文書の概要

川崎小学校の裏側に大きな屋根の寺院風の建物がある。ここはかつて郷澤山妙音寺大泉院と称する羽黒派に属する修験寺院であった。安永4年(1775)の風土記御用書出には「本山は武州東叡山輪王寺宮御座候、右御院代羽州羽黒山江被差下蒙御支配」とあり、新山権現・矢作正観音など8か所の別当を務めていた。ここは現在でも地域から「大泉院」と呼ばれ、保呂羽神社を本務として数社を兼務する大泉院法印の子孫である菅原瑞男宮司が管理している。また、「御殿(祈祷殿)」と呼ばれるこの建物には、安永4年の風土記御用書出に「古什物之事」として書き上げられた「本尊 大日如来」(大泉院の控には惣箔木仏御長二尺座像、五光より台座迄四尺八寸とある)が安置され、その厨子の扉には「大日靈貴命」の墨書きがある。

なお、「御殿」の正面には「正一位高館大明神」の社額が見えるが、高館神社は薄衣村南方(字高館)にあり、利便性からこの「御殿」を遥拝所として使っているため掲げられたものという。

大泉院は、元暦元年(1184)に南光院真永が新山権現を薄衣村北方里野沢山に勧請して開基した古い歴史を持つ修験寺院であるが、正保年中(1644~1647)に堂宇が焼失し、仙台藩の重臣泉田家の除地である現在の泉台に移転し、泉田家と村方の祈願を勤めてきた。現在の大泉院の境内にある2本の「笠松」は移転前の地である「里野沢」から移植したものだという。

また、大泉院は元禄2年(1689)第11世宥円の代から東山南方13か村19か院の触頭を命じられ、以後江戸時代を通じてその立場にあった。なお、小先の寺格を持つ大泉院は百姓身分の修験ではなく、泉田家に召抱えられ100文の知行地を宛われた士分修験である。明治となって大泉院は神道国教化政策に従い、仏具等を廃し、第19世正一僧祇法印玄俊は復飾し名前を菅原真雄と改め社人となった。

正保年間に寺院が焼失したこともあって、現存する文書としては慶長19年(1614)の羽黒山大先達華蔵坊源量が発した補任状が最も古い。幸いなことに、戦後に解体された社務所(復飾するまで道場・行屋として使用されていた建物)にあった仏像や文書類が、安政年間(1854-1859)に建てられた「御殿」へ移されたため、修験活動に係る聖教典籍ばかりではなく、仙台藩北部の霞を支配した大先達慈雲山良覚院六供が発した文書、大泉院支配下の各修験院の書上類、大泉院の大旦那泉田家に対する援助要請の資料、神仏分離に係る資料、近代の神社経営関係資料など多岐にわたる資料が伝存している。

大泉院文書の整理は、大泉院に伝わっている「大日如来」の奉納額の解説を依頼されたことがきっかけとなって、平成29年(2017)の夏から開始した。これまでに保存袋への収納と写真撮影を終え、現在は目録作成に向けて内容を精査しながら資料点数を数え、分類方法を検討している状況にある。現時点で符札を含めた文書・典籍類を入れた保存袋の数は1,200を超え、版本類33点を含めた総資料数は最終的には1,500点にのぼるものと推測している。

資料群において特徴的な点は、修験としての宗教活動に使われた聖教典籍類のなかには、医方・薬方関係の書物が多く、一方では百味筆筒が伝存していることから、祈祷・呪術と並んで医術が当修験の活動の重要な分野であったことを示している。また、大泉院には2基の神輿が社殿に納められているが、文書群の中に神輿代金の受領書が3通あり、当地方の仏具等の制作流通を知る手掛かりとなる貴重な資料も含まれている。

[一関市文化財調査委員 八巻 徹]

9. 狐禅寺芸能保存会所有文書「七福神舞」

狐禅寺藤ノ沢の木村謹吾さん(大正末頃生れ。赤荻から婿入)は、ニサプロウさんと正月に赤荻の大黒舞を舞って各家を回っていた。水沢までも行ったという。

七福神舞は、謹吾さんが大船渡から来る行商のおばさんに習ったもの。平成4年(1992)頃狐禅寺芸能保存会

に教え、女性も含めてみなで習った。ここに掲載したのは、その際に作った歌詞である。衣装や小物を自分たちで作って発表会などにも出ていたが、現在は行っていない。

1から9(10)の数え歌の歌詞は、大船渡市の碁石七福神や平七福神などと共通する部分もみられる。

七福神舞

口上

七福神と言う神は 一で大黒 二にホー天
 三でさん面長つのもり 四ツよじよる
 五ツは泉の我が恵比須 六ツ無口のホーレン神
 七ツ南天ベラベラ弁財天 八ツ屋敷は毘沙門天
 九ツ此の家のお祝い かしやにかむぎりかんの葉
 奥のみ山のゆんでり葉 七五三とお飾りて
 さーさー七福神が舞い込むよ 舞い込むよ
 舞い込んだは良けれどオハヤシがなければ踊られぬ
 踊りがなければハヤサレぬ 上座においでのお客さん
 これらにおいでのお客さん
 どんどんハヤシてくれるなら
 此処で一つ覚えた七福神舞共はやそうよ
 サイサイナ サイサイナ

(大黒天)

東西な 東西な
 この調子にかんまいて
 一つで大黒 二に恵比須 三でさらばと舞い込めば
 四で世波の良い年は 心も楽で 気も楽で
 大黒天はその時に 宝の俵をふんまいて

宝の袋をヒッチョツて 宝の小槌を振り上げて
 金沙の扇であおぎだて ニッコリ かつこり笑ったわ
 大黒天と申すなり

(恵比須)

東西な 東西な
 五ツ泉の三郎は 棧沙のお舟に 帆を上げて
 金銀のべたる 帆柱で あーやに錦の帆をかけて
 ふたんのさおに上げの糸 福ヶ島をこぎ出した
 月諸共に出で潮の波の あわじの島影やー
 これから釣魚の初まり 良き場所を見つけ
 黄金の釣り糸を投げ込んだ
 沖に見えるは タイかヒラメか
 オットト ひくようだ ひくようだ
 オットト おん目出たいを釣り上げた
 大きな鯛をば釣り上げて
 おん身を左の小脇に抱え込んで
 右に釣り竿打ちかづぎ
 よいこらさつさと かけ込んだわ
 恵比須様と申すなり

(弁財天)

東西な 東西な
 六ツ無病福祿神
 福祿神と申するは 頭も長く ひげ長く

親子の縁は末長く 夫婦の仲もむつまじく
 うつわの如く世は円く 扇の如く末長く
 ばしよの如く葉広く
 三日に風がそよふく 五日にさらり舞下り
 五尺に余りし 長頭ふりたて ふりたて
 舞い込んだは 福祿神と申すなり

(毘沙門天)

東西な 東西な
 七つ何ごとないうに 秋の方から毘沙門天
 毘沙門天と言う神は 悪魔を払う神なれば
 頭にちようどかぶとを 二でにがたのよろいを着
 右のおん手に剣を持ち
 左のおん手にほこを持ち
 五重の塔のその上で 持ったる御けんを振り回し
 これより東西北南 八方にらんで立ったるは
 毘沙門天と申すなり

(布衣)

東西な 東西な
 八つ屋敷はホテー 布祿寿郎神
 ホテーさまと言う神は お腹を大きく福の神
 寿郎神と言う神は 峰来山の山をすき
 松に竹に梅植えて 小春初め福寿草
 黄金のおいろであたたか
 梅に小枝に花が咲く
 うぐいすホーケチヨと鳴いている
 春は千才の春 海たんたんころり たんころりん

おうひやれ ひーやれ太平楽の舞踊り
 寿郎神と申すなり

(弁財天)

東西な 東西な
 九つ小倉の弁財天
 弁財天と言う神は
 女の神でことなれば 頭にがざり宝かんは
 金銀玉やの花かざり黒金釘子泉酒
 この酒一杯 飲む人は四百四病の病なし
 一杯飲めや鶴吉 二杯飲めや亀吉
 金と銀との盃でやつたりとつたり
 おんみきしづは 取りかわし
 飲んだら 歌えや 鶴吉よ
 飲んだら ハヤセや 亀吉よ
 すんなり くんなり 踊りださせる
 弁財天と申すなり

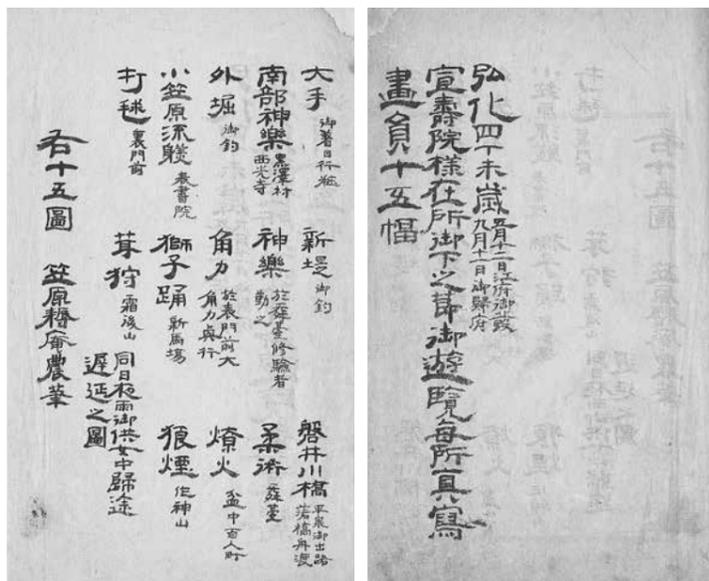
(白玉)

ハヤシおもしろさに持った小槌を振り上げて
 一振り振れば 一千両 二振り振れば 二千両
 三振り 四振り おくしれず
 こら程の宝を だれ様にゆんじるか
 だれ様にゆんじるか
 百万億の宝を 会場の皆様方に
 まんまんとゆんじると
 七福神 みはえた

せんじゅいんさまざいしょ おくだりの せつ ごゆうらんまいしよしんしゃ
 10. 「宣寿院様在所御下之節御遊覧毎所真写」

一関市博物館所蔵 笠原耨庵筆 弘化4年(1847)(25.4 × 17.1cm)

一関市博物館「お姫様のお国入り-イギリスに渡った一関藩の風景画-」平成25年(2013) から写真部分を引用。

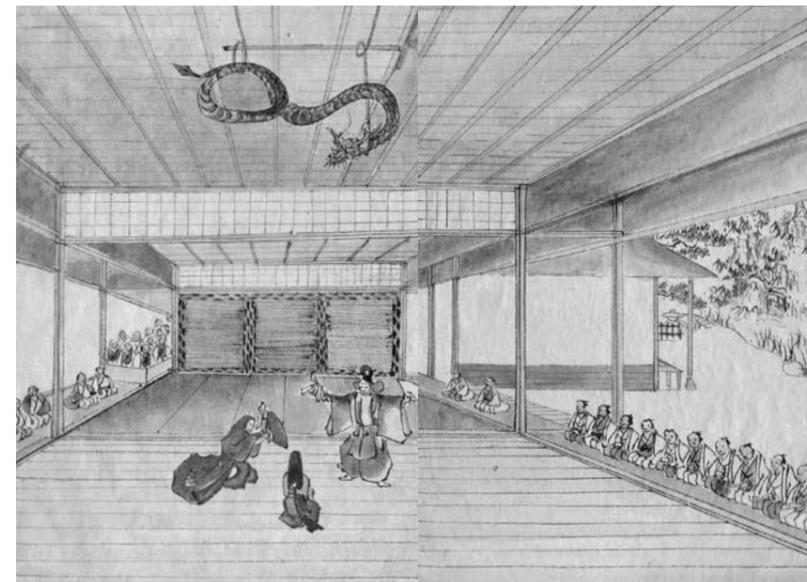


一関藩5代藩主田村村資の娘で6代藩主宗顕の正室である宣寿院(1793~1855)が、弘化4年(1847)に江戸から夫の墓参りで一関を訪れ、一関滞在中に周辺を遊覧した際の様子15図が綴じられた資料である。医学校慎濟館学頭の笠原耨庵の筆による。その中に民俗芸能を鑑賞する場面が3図含まれている。

神楽 於舞台修験者勤之

居館の舞台で演じられた修験者の神楽を見ている場面である。天井からつるされた大蛇で大蛇退治、叢雲の演目であることがわかる。

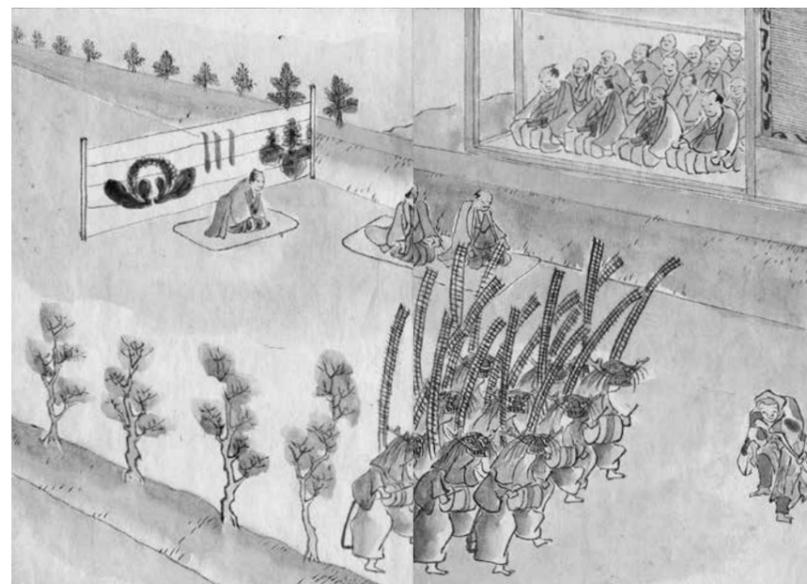
本吉太々法印神楽(宮城県気仙沼市)の『両部神楽相伝録』には、一関の田村大明神1000年忌(1810)において神楽を奏したとあり、この神楽が地域の修験によるものか、遠くから招いたものかは不明である。



獅子踊 新馬場

屋外で踊る「獅子踊」。踊り手は9人おり、道化役がその前で踊っていることがわかる。

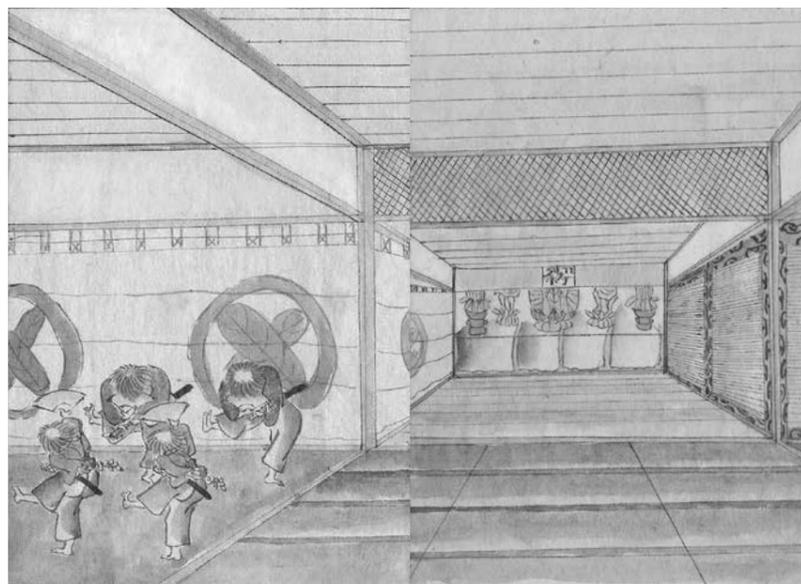
田村家では、初代の宗良(1637-1678)の頃から屋敷に鹿踊りを招いており、恒例ともなっていた[一関市史編纂委員会『一関市史第6巻』1975 110頁ほか]。



南部神楽 黒沢村西光寺

宣寿院が下黒沢村(現一関市萩荘)西光寺に出かけて見たという「南部神楽」が描かれている。毛采をかぶり、扇と鈴を持ってそろって踊る様子が描かれている。

下黒沢村は南部神楽発祥の地の一つとされるが、現在の南部神楽とどのような関係にあるのかは不明である。



岩手県一関市文化財調査報告書第8集
一関市民俗芸能調査報告書

発行 令和2年3月
発行・編集 一関市教育委員会
〒021-8503
岩手県一関市竹山町7-5
電話 0191-26-0820
印刷 川嶋印刷株式会社
〒029-4194
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
電話 0191-46-4161(代)

